博士＜臨床心理学＞論文

幼児気質質問紙の作成とその臨床的応用の可能性

２０１５ 年　３ 月

武　井　祐　子

川 崎 医 療 福 祉 大 学 大 学 院

題目　幼児気質質問紙の作成とその臨床的応用の可能性

目次

第1章　序　論

第1節　幼児の気質特徴を評価する臨床的意義・・ 1
第2節　基本概念の定義・・ 6
第3節　発達心理学における気質研究・・ 10
第4節　幼児期の気質を評価する方法・・ 16
第5節　本論文の目的および論文構成・・ 20

第2章　幼児気質質問紙の作成

第1節　目的　質問紙作成の基本方針・・ 25
第2節　質問紙作成のための質問項目の収集および選定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第3節　幼児気質質問紙の作成・・・ 28
第4節　幼児気質質問紙簡易版の作成・・ 62
第5節　幼児気質質問紙短縮版の作成・・ 69
第6節　本章の総合考察・・ 77

第3章　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と発達的問題との関連

第1節　問題と目的・・・ 83
第2節　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と乳児期までの発達的問題との関連・・・・・・・・・・・・ 84
第3節　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と幼児の問題行動との関連・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第4節　本章の総合考察　幼児気質質問紙を用いた子どもへの発達支援の可能性・・・・・・・・・・・・・・ 92

第4章　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と養育者の育児不安との関連

第1節　問題と目的・・・ 95
第2節　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と養育者の育児不安（量的分析）との関連・・・・・・・ 96
第3節　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と養育者の育児不安（質的分析）との関連・・・・・・・ 103
第4節　本章の総合考察　幼児気質質問紙を用いた養育者への育児支援の可能性・・・・・・・・・・・・・ 118

第5章　本研究の総括と今後の課題

第1節　幼児気質質問紙作成の試み・・・ 122
第2節　幼児気質質問紙の臨床的応用の可能性・・ 124
第3節　幼児気質質問紙を用いて気質特徴を評価することの臨床的意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
第4節　今後の課題・・・ 128

引用文献・・・ 130

謝辞・・ 141

付録・・ 143

第 1 章
序 論

第 1 節
幼児の気質特徴を評価する臨床的意義

昭和 50 年次以降，多少の変動はあるものの，出生数の減少は続き，平成 17 年次の合計特殊出生率は 1.26 になった（厚生労働省大臣官房統計情報部，2013）。その後，若干の回復傾向はみられるものの，平成 23 年次の合計特殊出生率は 1.39 であり，欧米と比較しても低い出生率となっている（厚生労働省大臣官房統計情報部，2013）。そのような中で，虐待，不登校，非行など，子どもをめぐる様々な問題が社会問題化している。

子どもの行動特徴は，10 年のスパンでみると，その程度はわずかではあるが変化している（草薙・星，2005）。10 年前と比較すると，ひと言でいうなら「いい子」になり，よりおとなしく，怒りや不快の否定的情動表出はあまりせず，元気に遊ぶことより読書などのおとなしい活動を好むようになり，より注意を集中し，衝動的ではなく，行動を抑制するようになっている（草薙・星，2005）。「いい子」である子どもは当然のことながら，養育者にとって育てやすい子となっていると考えられる。しかしその一方で，相談現場においては，「どのように叱ればいいか分からない」「自分の子どもは順調に発達しているのだろうか」という育児不安，「子どもと一緒にいるとイライラする」「自分の時間が欲しい」という育児ストレスなど育児をめぐる悩みについて相談も増加し，子どもを虐待する行為の背景には，程度の差はあっても子育てをめぐる不安やストレスが少なからず存在することが指摘されている（星野・富永，2013）

乳幼児を育てる養育者は，乳幼児健康診査などの相談現場で育児不安や育児ストレスなどを相談することが多い。乳幼児健康診査のなかでも，とくに 1 歳 6 ヶ月児健

康診査（以下，1歳6ヶ月児健診）と3歳児健康診査は，地域の事情に合わせて多少の調整のもとに実施されている。これらの乳幼児健康診査は，母子保健法により市町村単位で行うことが義務づけられ，日本のどの地域でも同じシステムで利用できる定着した事業となっている。

市町村単位かつ集団で行われている1歳6ヶ月児健診は，諸外国に類をみない日本独自のシステムである（小関・森岡，2002）。1歳6ヶ月児健診では，20%程度の子どもが「要経過観察」と判断され，5人に1人の子どもが育児上の心配があると指摘されている（吉田，2003）。しかし，乳幼児健康診査の現在の目的は，従来の疾病対策から，養育者のリスクを早期発見，早期介入をおこない，育児不安を解消させるような育児支援にスライドしている（松石，2002）。1歳6ヶ月児健診が，乳幼児を育てる養育者が利用する相談システムの1つであることを考えると，1歳6ヶ月児健診の機会に，子どもにとっても養育者にとっても適切な育児ができるよう専門家が支援していくことが必要である。また，乳幼児健康診査などの相談現場では，養育者の育児ストレスや育児不安などの問題を評価して適切にサポートすることだけでなく，養育者が育児ストレスや育児不安などの問題を呈さないよう，予防という観点から，支援の方法を検討していくことが重要である。

従来，相談現場で訴えられる養育者の育児不安は，主として子どもの発達をめぐる心配であり，その時期に対応した具体的な助言で解決してきていた。しかし，昨今，育児不安の内容自体が変化し，養育者が漠然とした不安を訴えることが多いと指摘されている（田中，1993）。実際，相談現場では，「子どもとうまく関われない」「子どもと一緒にいるとしんどい」といった，具体的な方針を示すだけでは解決しない，漠然とした育児不安や育児上の問題が訴えられるようになっている。よって，1歳6ヶ月児健診などの相談現場で，養育者の育児不安に対応する専門家が育児不安を低減あるいは予防するための支

援をするためには，乳幼児期の子どもを育てる養育者の育児不安に影響を及ぼす要因について理解しておく必要がある。

子どもの発達を促していく環境として欠かせない親子関係，とくに母子関係が健全であることは重要であり，乳児期，幼児期ほどとくにあてはまる。子どもの成長発達の過程で何か問題が生じると，母子関係が適切に機能していないと考えられ，母親の責任とされることが多い（大日向，2002）。しかし，最近の研究で，子どもの発達上の問題（田中，1993；渡部・岩永・鷲田，2002）や子どもの健康上の問題（福井，2002）など，子ども側の要因が，母親に影響を与え，そのことで養育者が育児不安を抱くようになると報告されるようになっている。

子ども側の要因のなかで，養育者の育児不安につながる子どもの特徴は，養育者にとって育てにくい，あるいは扱いにくい特徴として評価することができる。2歳と3歳では，男児が女児より扱いにくい子どもとされることが多いが，1歳では性別によって違いはないこと，実際のところ，どの年齢にも扱いにくいと認知される子どもが2割程度存在していることが報告されている（高濱・渡辺，2006）。つまり，1歳代の子どもにおいては5人に1人が性別に関係なく扱いにくいとされる特徴を示しており，1歳代の子どもを育てる養育者に，なんらかの積極的な育児支援をしてくことは重要である。

養育者が育てにくい，扱いにくいと認知する子どもの特徴は，昨今，子どもの気質特徴によって記述することができるという報告がある（庄司，1999；庄司，2000）。子どもの気質特徴と様々な臨床的な問題との関連は，いくつかの先行研究で指摘されてきている。

子どもの発達上の問題と子どもの気質との関連については，以下のように先行研究で指摘されている。たとえば，子どもの発達上の問題の1つである発達の遅れとの関連では，子どもが1歳6ヶ月や3歳の時点で発達の遅れが疑われる場合，これらの子どもはしばしば変化に慣れに

くく，活動の持続性が短く（麻原・村嶋・飯田，1992），扱いにくい気質（麻原・井桁，1993）を示すことが指摘されている。また，子どもの発達の遅れは新奇刺激に対する回避傾向や否定的な気分の質と関連することも指摘されている（Tassel，1984）。子どもの発達上の問題は，単に発達面の遅れだけでなく，落ち着きのなさや乱暴といった行動上の問題も含まれるであろう。子どもの行動上の問題との関連では，1歳6ヶ月の時点で注意の集中性や体内リズムの規則性が低く，喜怒哀楽を強く表出する子どもは，児童期に注意欠陥および攻撃的・反抗的な行動傾向を示すと報告されている（菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井，1999）。

養育者にとって子どもの発達上の問題と行動上の問題は，それのみでも育児上の困難をもたらす。乳幼児期の発達上の問題や行動上の問題は，それが治療できない場合や養育者の関わりのみでは変容させることが困難な場合，養育者は解決策が見いだせず，子どもの発達上の問題や行動上の問題といった特徴が養育者の育児上の負担となる可能性はとても高い。それに加え，なんらかの発達上の問題や行動上の問題をもつ子どもが，養育者にとって扱いにくい，育てにくい気質特徴をもつ子どもである場合，養育者の育児はより困難になる。しかしその一方で，子どもがなんらかの発達上の問題や行動上の問題をもっていても，養育者がその子どもの気質特徴を知ることは，日常の育児をするうえで，どのような関わり方がより適切であるか明確にするかもしれない。実際，子どもの能力よりも気質傾向の方が，乳幼児の親の育児感情に与える影響が大きいという指摘もある（諏訪・加藤・山田，2007）。よって，発達上の問題や行動上の問題をもつ子どもを育てる養育者にとって，子どもの気質特徴を理解することは，育児上の困難を軽減し，養育者の育児不安を低減することにつながる可能性がある。

一方，育児ストレスや育児不安に代表される養育者の心の問題と子どもの気質との関連も先行研究で指摘され

ている。たとえば，子どもが乳児期に生活リズムの不規則さや応答性の低さを示す場合，母親の育児負担感や育児不安が高まる傾向がみられ，結果的にネガティブな育児イメージが形成されるケースが報告されている（上村，1989）。また，子どもが刺激に敏感で，情緒的反応が強い場合，養育者の育児に対する対処不能感や育児不安が高くなることや（奥石，2002a；奥石，2002b），乳幼児期において扱いにくい気質特徴を示す子どもであった場合，母親の育児ストレスが高まることが指摘されている（水野，1998）。

養育者が育児不安や育児ストレスを訴える状況では，子どもの発達を促すために適切な関わりをすることは困難になりがちであり，子どもの発達が阻害されていく可能性がある。子どもの発達が阻害されることで，養育者の育児不安や育児ストレスはさらに高まり，その結果，子どもの発達が阻害されるという悪循環も予想される。そのような状況の下では，子どもの情緒発達に必要な健全な愛着関係を形成していくことが困難になり，愛着関係を基礎に育まれていく自尊心や，自律性を獲得できず，結果的に不登校や非行につながるような臨床的な問題にいたることもあるであろう。よって，養育者が子どもの気質特徴を理解することが，育児不安や育児ストレスを訴える養育者への直接的な支援につながり，結果的に子どもの発達を阻害することなく，養育者と子どもの健全な愛着関係の形成に寄与することも可能となると考えられる。

以上のことを考慮すると，1歳6ヶ月児健診で養育者への積極的な育児支援が可能となるように，1歳6ヶ月頃の子どもの気質特徴を評価すること，とくに子どもの気質特徴のなかでも発達の遅れや発達上や行動上の問題，育児不安や育児ストレスなどの養育者の心理的問題と関連がみられる気質特徴を早期に評価し，子どもにとって適切な関わりや環境が提供できるよう，専門家が養育者に助言することは重要である。

第２節
基本概念の定義

気質とは何であろうか。人間は一人一人違う。正常に産まれた赤ちゃん（新生児）は，成人に比べると大きな個人差は観察されず，個人差は生後の生育環境やそこでの経験の差から徐々に生じるものと考えられてきた（田島，2000）。しかし，新生児にも，よく泣くタイプやあまり泣かないタイプ，敏感なタイプや鈍感なタイプ，よく動くタイプやあまり動かないタイプがあることは，何人かの新生児に関われば明らかである。多くの研究者達は，このような発達初期からの個人差を，生得的で生物学的な基礎をもつ気質という概念で捉え，遺伝的要因の影響が強く，環境的要因によってはあまり変化しないと考えていた。気質の研究史については水野（2002）がまとめているが，その気質という概念がどのように扱われてきたか，その歴史的な流れをみると，大まかに以下のようにまとめられる。

ギリシアのHippocratesは，熱と冷と乾と湿の比率が違う4つの体液が人間の体のなかにはあるとし，その4つの体液を血液，黄胆汁，黒胆汁，粘液としている。のちにこの4体液説から，多血質，黒胆汁質，黄胆汁質，粘液質の4つの気質タイプが分類され，それぞれ行動上の特徴があてはめられている。つまり，人間の生理学的な体質的な違いと行動上の特徴（気質）の対応関係が明らかにされている。20世紀になるとドイツのKretschmerが，体格を細長型，肥満型，闘士型の3つに分類し，それらの体格と精神病との関連性を整理し，3つの体格と3つの精神病に対応関係を見いだしている。さらにそこから得られた知見を，健常な人の体格とパーソナリティの関連性に発展させ，細長型，肥満型，闘士型という3つの体形が分裂気質，循環気質，粘着気質という3つの気質類型が示す行動特徴と対応することを明らかにしている。つまり，人間の身体的特徴と行動上の特徴（気質）とを

対応させて類型化しようとしている。また，同じ20世紀にアメリカのSheldonは，Kretschmerと同じく体格に注目し，体格の違いを3つのタイプに整理し，内胚葉型，中胚葉型，外胚葉型という3つの体格類型を考えた。彼は気質をあらわす特性を集めて気質尺度を作成し，内蔵緊張型，身体緊張型，頭脳緊張型という3群の気質類型を設定して，この3つの気質類型と内胚葉型，中胚葉型，外胚葉型という3つの体格類型との対応関係を明らかにした。つまり，人間の身体的特徴と行動上の特徴（気質）とを対応させて類型化して整理している。そしてその結果は，Kretschmerの考えを支持するものであった。さらに近年になると，イギリスのEysenckが，統計的分析によって外向性と神経症的傾向が独立した基本次元であるとし，その2次元を組み合わせ，4つの気質類型を同定している。彼は外向性と神経症的傾向の2つの基本次元が大脳皮質の興奮と抑制とのバランスといった生物学的な基盤に基づく個人差と関連していると説明している。彼はその後，精神病質傾向を追加し，3次元での説明を試みようとしている。つまり，Eysenckは，統計的手法によって得られた気質類型の次元と生理レベルでの体質的個人差とを対応させて類型化している。

発達心理学においても気質については研究対象となっている。発達心理学の分野では発達初期にみられる子どもの行動特徴の個人差に気質という用語をあてているものが多いが，研究者によってとらえ方に若干の違いがみられる。

Thomas & Chess(1986)は，New York Longitudinal Study（以下，NYLS）で得られたデータより，行動反応パターンの個人差を気質とよんでいる。彼らは，気質をパーソナリティや能力，動機などと明確に区別し，“活動水準（activity level)”“周期性（rhythmicity)”“接近・回避（approach/withdrawal)”“順応性（adaptability)”“反応閾値(threshold)”“反応の強度(intensity)”“気分の質（mood)”“気の散りやすさ（distractability)”

“注意の範囲と持続性（attnetion and persitence）”という 9 つの特徴で評価できるとしている。Kagan & Moss(1962)は，初めて出会った人に対して人なつっこく接し，初めての場所でもすぐに馴染む子どももいれば，初めての人に恥ずかしそうにしたり，恐れたり，初めての場所になかなか馴染まない子どももいることに注目した。彼らは，縦断研究をすすめるなかで，それらの個人差を気質的行動特徴とし，子どもの幼児期から児童期，青年期まで一貫して確認されることを明らかにした。彼らは，初めての状況（場所や人）に対して極端に臆病になるといった行動特徴を“行動抑制傾向（behavioral inhibitation)”という気質概念で表現し，心拍といった生理学的指標と対応すること，発達初期から安定してみられる気質的個人差であるとしている。Buss & Plomin（1984）は，気質は発達初期にみられる特性であり，遺伝的なもので，生得的なパーソナリティ特性であるとしている。気質次元として，“情動性（emotinality)”“活動性（activity)”“社会性（sociability)”の 3 つを考え，これらの気質次元は後のパーソナリティ特性とある程度の連続性を示すとしている。彼らによると，発達初期に出現した遺伝的なものである気質特性は，後に環境要因によって修正されることはあるが，後のパーソナリティを安定して形成するものであるとされている。Rothbart（1981, 1986）および Rothbart & Derryberry（1994）は，気質を“反応性（reactivity)”と“自己制御（self-regulation)”における体質的な個人差で，生物学的体質を基盤として，遺伝によるものと時間の経過にともなうことによる成熟によるもの，環境のなかで経験することによるものとが相互に影響しあって現れる行動特徴としている。気質次元として“活動性の水準（activity level）”“微笑と笑い（smiling and laughter)”“恐れ（fear)”“制限を与えられた場合の負の情動表出（distress to limitations)”“沈静の容易さ（soothability）”“注意の持続性（undisturbed

persistence)”の独立した6次元をあげている。Caspi & Silva（1995)は，子どもの気質を“コントロールがきかない（undercontrolled)”“抑制的（inhibited)”“順応（well-adjusted)”という3つに類型化し，その後のパーソナリティの発達においても一貫性が高いとしている。Goldsmith & Campos（1982）は，社会化の影響を受けていない，認知的プロセスに媒介されていない解釈が比較的容易とされる乳児期に限定して気質概念を定義している。彼らは乳児と関わり合いをもつ他者にとって意味があり，認知されうるレベルで分析される必要があること，行動上にあらわれるものが生理学上の指標よりも容易に見極められることから，乳児が気質特徴として表出する行動様式を中心に気質を定義している。彼らによると，気質は個人差の概念であり，体質上の概念であり，程度と性質は気質次元によって様々であるにしても，気質次元は安定したものとされている。また，気質次元は情緒と関連をもち，情動的なものであること，気質の個人差は各々の気質次元が表出される時の強度のパラメーターと表出における時間的パラメーターで表されるとしている。

水野（2003）は，発達心理学領域における気質概念を整理し，体質的なものであること，乳児期にあらわれ，ある程度の発達的連続性をもつこと，客観的に判断できる個人差であること，環境の影響を受けて変化しうると考える点が共通した気質概念であるとしている。確かに，前述したような発達心理学領域における多くの研究者の気質概念の考えを整理すると，気質は基本的に体質的な基盤をもち，個人の行動特徴に一貫性をもたらす，ある程度の発達的連続性をもつ，発達初期から明らかになる個人差と考えられる。しかし，気質特徴が観察可能な行動特徴として表現されると理解するならば，気質特徴そのものが変化するというよりも，環境との相互作用の結果，表現される行動が変化する可能性があると理解することも可能である。どちらにせよ，気質概念を扱う際には，

環境との相互作用という視点が特に重要であると考えられる。

第３節
発達心理学における気質研究

従来，子どもの性格は，両親からの関わりなどの環境要因によって形成されていくと考えられていた。しかし，1960年代になると，子どもの生来の性格（気質）が親の子どもに対する関わり方に影響を与えること，さらに同時に環境の働きにより，子どもの性格も変化していくという，子どもの気質と環境の相互作用説が提唱された。また，子ども自身が気質における個人差に基づいて，周囲の環境を選択していくと考えられるようになった。

例えば，活発すぎる子どもに対して，一般的に親は子どもの行動を制限するような関わりが多くなり，子どもの活発さは抑えられてしまうことがあるだろう。また，新しい環境に馴染みやすいタイプの子どもは，新しい経験を積極的に選びとり，多種多様な経験を積んでいくようになるだろう。つまり，子どもの生来の気質特徴が異なるがために，周囲から与えられる環境あるいは自分から選択する環境が異なることにつながり，その後の発達過程が異なることとなる。

しかし，その一方で，馴染みやすさが同じ程度の子どもでも，子ども自身が選択できないレベルで異なる環境が与えられた時，それぞれの子どもは全く異なる発達をたどっていくこともある。つまり，たとえ子どもが同じ気質特徴を示していても，周囲から与えられる環境が否応なく異なり，その異なった環境で育つことを要求されるがために，異なる発達過程を示すこともありえる。どちらにせよ，子どもは自身の特徴と環境との相互作用によって影響を受け，その子どもなりの発達をしていくと考えられる。

気質と環境との相互作用の重要性を実証した研究とし

て，Thomas, Chess, Birch, Hertzig & Korn（1963）の報告があげられる。彼らは1956年から，NYLSを実施し，140名以上の生後2，3ヶ月の子どもの詳細な行動特徴のデータを定期的に集めた。その結果をもとに，乳児期初期における子どもの行動反応パターンに明確な個人差がみられること，乳児期初期に見られた個人差が生後2年間はある程度安定性を保っていることを報告している。

Thomas & Chess（1986）は，行動反応パターンの個人差を気質とよび，“活動水準（activity level）”“周期性（rhythmicity）”“接近・回避（approach/ withdrawal）”“順応性（adaptability）”“反応閾値（threshold）”“反応の強度（intensity）”“気分の質（mood）”“気の散りやすさ（distractability）”“注意の範囲と持続性（attnetion and persitence）”という9つの特徴で評価できるとしている。さらに，これらの特徴のなかでも“周期性”“接近・回避”“順応性”“反応の強度”“気分の質”の5つの特徴にもとづいて，気質をいくつかのタイプに分類している。1つは，反応が強く，生理リズムが不規則で，初めてのことに慣れにくく尻込みし，機嫌が悪い「扱いにくい子ども（Difficult Child）」であり，全体で10%程度いるとされている。もう1つは，反応はおだやかで，生理リズムが規則的で，初めてのことにも慣れやすく，物怖じしないで積極的に近づく「扱いやすい子ども（Easy Child）」であり，全体で40%程度いるとされている。また，反応はおだやかで，活動性が低く，初めてのことに慣れにくく尻込みし，機嫌が悪い「時間のかかる子ども（Slow-to-Warm-Up Child）」は，10～15%程度いるとされている。

彼らは，人間の行動は，何ができるか（What），なぜ行動するか（Why），どのように行動するか（How）という3つの側面から評価されるとしている。このなかで気質は人がどのように行動するのか（How）の違いであり，何を行動するのかあるいは何ができるのか（What）という行動の内容の違いや能力の違いを指すものでも，なぜ行動

するのか（Why）という行動の動機にかかわるものでもないとしている。つまり，気質はどのように行動するか（How）という行動のスタイル，あるいは行動的個性とされている。

彼らによると，気質特徴による違いは以下のように考えることができる。食べる，眠る，遊ぶ，泣く，笑うといった乳幼児の行動の内容にもとづいて子どもを区別することは容易ではない。しかし，行動の内容にもとづいて子どもを特徴づけるのではなく，どのようにするのかという行動のスタイルという視点で考えると，子どもの気質特徴を比較的容易に記述することができる。食べるを例にあげて考えると，ある子どもは規則的に食べたが，別の子どもは不規則に食べたと記述することは，複数の子どもの食べるという行動をどのようにするかという視点で明確に区別することを可能にする。また，眠るを例にあげて考えると，ある子どもはわずかな物音で睡眠が中断し起きてしまうが，別の子どもは一度眠りにつくと大きな音がしても睡眠を中断せずに一定時間眠っていると記述することは，複数の子どもの眠るという行動を，どのようにするかという視点での明確な区別を可能とするだろう。このように，行動の内容や種類ではなく，行動の様式的側面に注目することで，発達初期において，個人差を記述することが可能となると考えられる。その行動の様式的な違いを気質特徴と評価することができる（Lerner & Lerner, 1983　遠藤訳 1993）。

さらに，Thomas & Chess（1986）は，環境と気質とが相互に作用し合い，その結果，子どもが発達していくという視点の重要性を指摘している。気質は人がいかに行動するかについての個人差であるが，子どものもつこのような行動スタイルは，養育に関わる周囲の大人の態度形成に大きな影響を与えている。つまり，個体のもつ特性の能動的な機能を認め，養育者が一方的に子どもに影響を与えるだけでなく，子どもの側も養育者をはじめとする周囲の大人に影響を与えているという，生得的要因

と環境要因の両面から発達の一般法則が指摘されている（上村，2002）。

Thomas & Chessの研究において，同じ気質特徴をもった子どもであっても，その子どもを取り巻く環境の違いにより，異なる発達をとげることが明らかにされている。たとえば，「扱いにくい子ども」の 70%，「扱いやすい子ども」の 18%，「時間のかかる子ども」の 40%がなんらかの精神医学的な援助を必要とする行動上の問題を青年期までのどこかで呈していたことが明らかとなっている。この 3 つのタイプの子どもの養育者の養育観や育児方法に特別な違いがないことも明らかとなっており，子どもの発達初期の気質特徴が，のちの問題行動と直接的に結びついていると考えることもできる。実際，「扱いにくい子ども」の方が，「扱いやすい子ども」や「時間のかかる子ども」よりも，後の問題行動を引き起こしやすいことは多くの研究で明らかとなっている。しかし，たとえ「扱いにくい子ども」であっても，彼らの報告でいえば，残りの 30%が深刻な問題を引き起こすことなく成長していると解釈することもできる。つまり，同じ気質特徴を呈していても，環境との相互作用によって，問題を引き起こすこともあれば，とくに問題をおこすことなく成長していく可能性がある。

同じ気質特徴を呈していても，環境との相互作用によって，問題を引き起こすこともあれば，とくに問題をおこすことなく成長していく可能性があることは別の報告でも明らかとなっている。たとえば，NYLSのプロジェクトのサンプルのうち，133 人の中産階級の白人と 98 人の労働者階級のプエルトリコ人の約 14 年間にわたる追跡調査で明らかにされている。2 つのサンプルの子どもの気質属性の分布に違いはないとされたが，その後の適応状況には大きな違いが認められた。たとえば生理リズムの不規則性において，中産階級の白人家庭では，規則的なリズムが要求されるため，子どもの生理リズムの不規則性は親の要求に適合しないこととなり，問題とされ，

結果的に問題行動の前兆となった。しかし，中産階級の白人家庭の親は，子どもの不規則な生理リズムを安定させるために生活のなかで多くの手段を講じ，彼らの多くの子どもはその手段に適応したため，子どもの不規則な生理リズムが続くことはなかった。つまり，中産階級の白人家庭においては，生理リズムの不規則性は乳児期には問題となるものの，それより後の児童期以降の適応の問題の前兆とはならなかった。しかしその一方で，労働者階級のプエルトリコ人家庭では，乳児期の子どもの不規則な生理リズムに対してとくに問題とせず，生理リズムの規則性を子どもに要求することは全くなかった。つまり，子どもの生理リズムの不規則性は，労働者階級のプエルトリコ人家庭では親の要求に適合しないということはなく，問題とならないため，子どもの問題行動の前兆とならなかった。労働者階級のプエルトリコ人家庭の親は，子どもが望む時間に寝て，起きることを許し，親は子どもの不規則な生理リズムを安定させるために，生活のなかでとくに手段を講じることはなかった。さらに，子どものスケジュールに合わせて自分のスケジュールを調整するため，多くの子どもはそれに適応することとなり，子どもの不規則な生理リズムは続いたが，子どもの適応上の問題が生じることはなかった。しかし，子ども達が児童期以降，就学する時期になった時，子ども達は生理リズムの不規則性のために十分な睡眠が得られず，臨床的な問題をもつ子どもの半数に睡眠障害が診断されていた。つまり，労働者階級のプエルトリコ人家庭においては，生理リズムの不規則性は乳児期には問題とならないものの，それより後の児童期以降の適応の問題の前兆となっていた。

また，調査対象となっていた労働者階級のプエルトリコ人家庭はたいてい複数の子どもがいて，小さなアパートに住んでいた。また，暮らしている外の環境は決して安全とはいえず，子どもだけで十分に外で遊ぶということは難しい状況であった。一方で，中産階級の白人家庭

においては大きなアパートや自分の家を所有できるといった経済力のある家庭がほとんどであった。加えて，外の環境もそれほど危険な環境ではなく，子どもに適した遊び場も有していた。これらの2つの家庭において，活動性の高い子どもが育つ際に，労働者階級のプエルトリコ人家庭の子どものように，危険な地域で育っているために外で遊ぶことができず，かつ狭い住居のなかで育つ場合と，中産階級の白人家庭の子どものように，安全な地域の外で十分遊ぶことができ，かつ広い住居で暮らし，家のなかでも十分に活動性を満たして遊ぶ事が出来る状況では，活動性の高い子どものその後の異なった適応につながることは明らかである。つまり，気質特徴そのものだけの問題でなく，子どもの生活する社会的文脈や環境との適合性がその後の子どもの発達に大きな影響を与えている。

このような子どもの行動特徴と環境を相互作用的視点は，Thomas & Chess（1980　林監訳 1981）によって，適合のよさ（goodness of fit）という理論的概念のなかで提唱されている。適合のよさ（goodness of fit）という理論的概念によると，環境からの期待や要求が子どもの気質と調和したときは，子どもの発達は望ましい方向に発展するが，環境からの要求が子どもの特性と適合しないときには，子どもに必要以上のストレスがかかって，不適応な行動が起こり，望ましい発達が妨げられると説明される。リスク要因をもって生まれた子どもが全て将来なんらかの問題を引き起こすわけではなく，その可能性は養育者との相互作用的な関係のなかで規定されるのである。

以上のことから考えると，子どもの発達を考える際に，気質特徴そのものだけでなく，気質特徴と環境の相互作用的視点，その子どものおかれている家庭環境や育児方針などの社会的文脈とともに，その時期に社会的に要請される条件があるといった発達的な視点，さらに物理的な文脈からも考える必要がある。子どもが不適応問題を

呈さず健全に発達するためには，子どもの発達にとって適切なかかわりを提供する必要のある養育者が，気質と調和した条件を満たした環境（goodness of fit）を子どもに提供できるよう，子どもの気質を理解することが重要であると考えられる。

新生児の気質は生得的なものであるが，それにもとづいて形成される性格は育った環境の影響を受けている。前述の Thomas & Chess の研究によると，新生児の生得的な特徴が，異なった経験をひきよせることは予想できる。たとえ養育者をはじめとする養育環境が同じでも，遺伝的にもったそれぞれの特徴は，環境との相互作用を受け，その特徴をより明確にしたり，弱めたりする（Kagan, Reznick, Clarke, Sidman & Garcia-Coll, 1984）。つまり気質自体が，環境に影響を与え，気質から影響を受けた環境がさらに気質に影響を与えている。このことは，新生児の気質特徴が親の反応を引き出し，それがさらにあらたな性格を形成していくことを指していると考えられる。よって，母子関係を考える際に，母子に専門的な支援を行う必要のある専門家が発達初期の子どもの気質特徴を評価していくことで，その後の発達にとって，あるいは母子関係にとって望ましい関わりについて検討していくことができ，養育者に対し，より適切な助言をすることができると考えられる。

第４節
幼児期の気質を評価する方法

気質を評価する方法としては，面接法，乳児期から成人期にわたって多く開発されてきている質問紙法，日常生活の中でもしくは意図的に操作された状況のもとで，対象の行動の様子を観察，記録し，その結果を分析することによって，観察対象の特徴や行動パターンといったある種の法則性を見いだそうとする観察法（角田，2007）などの手法がある。

面接法においては，Thomas & Chess が NYLS で実施したように，膨大な時間と面接調査が可能な人材の確保が必要となる。さらに，得られたデータが客観性を保ち，一般化できる結果に導いていくための分析には，多くの技術と労力を必要とするなど，評価するうえでの簡便性にはかけている。

また，観察法においては，直接的な測定法として，Brazelton & Nugent（1995　穐山監訳　1998）による新生児行動評価尺度や Campos(1976　内藤他訳，1982）が開発した心拍の変動を利用して個人差を明らかにするものなどがある。Brazelton & Nugent（1995　穐山監訳 1998）の新生児行動評価尺度は，18 項目の反射検査と 28 項目の行動検査から構成されており，このうち 28 項目の行動検査は“反応性”“刺激順応性”“興奮性”“鎮静性”“運動の成熟性”“運動のコントロール性”などの項目があり，Thomas らの結果と類似していることから，気質特徴が行動面に現れた個人差として評価することができるかもしれない。また，子どもの笑いや泣きなどの情動的反応や慣れや注意の程度が子どもの特定の刺激に対する心拍の変化と対応していることから，Campos（1976　内藤他訳，1982）が有効性を主張した心拍変動の個人差を重要な気質特徴と考えることもできるだろう。しかし，これらの直接的な測定や検査は，実施する上での観察者の技量と経験が必要となる。さらに，その個人差として得られたデータが，その後の子どもの発達上の問題や行動上の問題，あるいは養育者の心の問題などの実際の臨床的問題とどのように対応しているのかという研究についての報告は十分とはいえず，臨床的に応用していくには課題が多い。また，多くの対象者に実施するためには，実施できるだけの環境の調整と人材を必要とするなど簡便性には欠けている。

一方，質問紙法においては，多くの対象者に同時に実施することができ，また数量的に得られたデータの分析は簡便で，比較するデータがあれば，結果の解釈も容易

である。しかし，その一方で，質問紙法による測定では一貫して高い信頼性を獲得することは難しく，他の測定方法である観察法との関連もそれほど高いとはいえないなど（Lerner & Lerner, 1983　遠藤訳 1993），その信頼性において検討が必要である。以上のことから，気質特徴を測定する方法としては，気質を評価する目的を明確にし，どの方法を用いることがその目的に合致しているかを明らかにし，適切な方法を選択していく必要がある。

養育者は日常の経験のなかで子どもと関わり，子どもの行動特徴（気質）を認知している（上村，1989）。例えば，日頃あまり大声を出さず，活動性の少ない子どもは「おとなしい」と認知され，常に活動的に動き，元気な子どもは「活発だ」と養育者に認知されるであろう。さらに，養育者は，自身が認知した子どもの気質特徴に応じて養育行動をおこなっていると推測される。子どもの気質に対する認知が適切であり，かつ，気質と調和する環境設定が可能であれば，深刻な臨床的問題に発展することは少ないであろう。しかし，相談現場で扱われる臨床的問題の背景には，養育者の認知の仕方が適切でない場合や，認知が妥当であっても，気質と調和する環境設定が困難な場合があると推測される。よって，相談現場で子どもの気質を扱う場合，養育者が子どもの気質をどのように認知しているかを明らかにできる方法であり，かつ，気質特徴と環境の相互作用の視点，その子どものおかれている家庭環境や養育者の育児方針に基づく関わりなどの社会的文脈とともに子どもの気質特徴を理解していくことが必要である。つまり，養育者が子どもの気質を家庭環境や自身の関わりのなかでどのように認知しているかを明らかすることで，子どもの発達にとって適切なかかわりを提供する必要のある養育者が，複数の側面からの条件を満たした気質と調和した環境（goodness of fit）を子どもに提供できるよう，専門家が支援することも可能になる。

養育者自身が認知した気質を評価する方法としては，家庭での養育者の観察による評価か，質問紙による評価があげられるであろう。このうち，質問紙評価は，気質評価の手法として広く用いられている方法であり（Worobey,2000),気質を測定するための質問紙の開発，既存の気質質問紙の妥当性や信頼性の検証に関する研究が多く行われてきている。質問紙評価は，観察評価と比して，多人数に同時に実施できること，比較的短時間で実施可能なこと，手続きが明確で結果の一般化が行いやすいという利点を有している（宮下，1998)。このことから，限られた時間内で専門家が援助方針を設定することが必要とされる相談現場では，気質を評価する手法としては質問紙評価による手法を用いることが妥当であると考えられる。

気質を評価する際に使用される質問紙は，NYLSの報告をもとに，Carey らによって作成された質問紙が広く用いられている（Worobey, 2000)。この質問紙は，年齢段階別に作成され（Carey ,1972; Carey & McDevitt, 1978; Fullard,McDevitt & Carey, 1984), 臨床現場や研究において広く使用されている。Thomas & Chessの研究は，子どもの気質を評価する研究としては先駆的であったが，養育者に面接を行い，養育者から聞き取った結果に基づいているという点から，養育者のバイアスがかかった子どもの気質が評価されている可能性があるとの指摘があった。しかし，Thomas & Chessの研究では，子どもの健全な発達は「適合のよさ」（goodness of fit）の程度，つまり子どもの気質が能力と期待や要求などの環境の諸条件と調和するときに生じると考えている。環境と子どもの気質との関係で発達をとらえようとしている点は新しい視点であり，また膨大なデータから作られた指標についての評価は高く,今なおその考え方は受け入れられ，その考え方を踏襲した質問紙が広く使用されている。

しかし，気質を評価するための多くの質問紙は計量心理学的な原則に十分な注意をはらわずに作成されてきて

いる。質問紙作成の際に，因子分析を適切に行った上で因子的妥当性について十分に検討する手続きがされてはいないことも多い。たとえばCarey & McDevitt（1978）などの質問紙は，質問項目がある因子に負荷するかどうかは経験的に示されればよいという曖昧な仮説に基づいて作られた尺度となっている（Lerner & Lerner, 1983 遠藤訳 1993）。つまり，気質を評価するための質問紙のなかには，妥当性についての問題を有しているものがあり，加えて，信頼性についても十分に確認されているとはいえない。

さらに，従来の気質を測定する質問紙は，気質を文脈や環境から離れた個人内属性として測定しているといった問題点が指摘されている（Lerner & Lerner, 1983 遠藤訳 1993）。気質が行動特徴として表現されると考えると，文脈の変動と関連して変化する現象となる。しかし，多くの質問紙において，計量心理学における安定性と現象における安定性を区別することがなされていない。つまり，気質を文脈から離れた個人特性としてのみ考えているために，文脈や環境といった要因との関係性のなかで気質を研究することが不十分となっている。気質の安定性は絶対的な意味をもつものではなく，行動の他の側面と関連させて初めて高い。気質属性そのものに焦点をあわせると計量心理学的な安定性を適切に評価できず（Lerner & Lerner, 1983 遠藤訳 1993），養育者が認知する子どもの行動特徴から気質特徴を測定する場合には，気質は文脈や社会的関係のなかで評価されなければならないと考えられる。

第５節
本論文の目的および論文構成

気質を評価する際に使用される質問紙は，NYLSの報告をもとに，Carey らによって作成された質問紙が広く用いられている（Worobey, 2000）。この質問紙は，年齢段

階別に作成され（Carey, 1972; Carey & McDevitt, 1978; Fullard, et al., 1984），臨床現場や研究において広く使用されている。

しかし，これらの質問紙はNYLSにより導き出された9つの気質特徴に，経験的に合致すると考えられる項目を集めて尺度を作成したため，9特徴に対応する尺度の因子的妥当性は確認されていない。そのため，その後の研究で尺度の構造面での問題点がいくつか指摘されている。たとえば，因子分析を行い，妥当性を確認したところ，NYLSによって導きだされた9特徴に対応する因子は2因子のみで，全ての因子は得られていない（Sanson, Prior & Garino, 1987）。さらに，尺度によっては内的整合性が低いこと（Slabach, Morrow & Wachs, 1991）や尺度間で内容の重複がみられること（Rothbart & Mauro, 1990）も指摘されている。一方，日本においては，Carey らによって作成された質問紙は，佐藤（1985, 1988）や庄司（1984）などのグループによって，翻訳，標準化の作業が行われている。しかし，Carey らの質問紙同様，気質の9特徴に対応する全ての因子の再現性は確認されていない（庄司・副田・恒次・前川，1995; 菅原・青木・北村・島，1988）。よって，NYLS によって導きだされた気質特徴を記述する際に，9つの次元をそのまま用いることが適切であるかを検討する必要がある。

さらに，Carey らによって作成された質問紙は，日本においては，構造面だけでなく，内容面および形式面でも問題点が指摘されている。内容面においては，質問紙を翻訳し，標準化する際，作成者の意向をくみオリジナルの内容を忠実に採用することを原則としたため，日本文化に馴染まない不適切な項目が含まれていることが指摘されている（佐藤，1985）。形式面においては，日本の相談現場で使用するには項目数が多いことが指摘されている（佐藤，1985）。よって，1歳6ヶ月を対象とした乳幼児健康診査などの日本の相談現場で使用する際には，日本独自の文化に馴染む内容で，かつ，項目数が絞られ

た質問紙の作成が必要である。

Bates は，乳児や子どもの「気むずかしさ」は母親の知覚現象であると指摘している（Lerner & Lerner, 1983 遠藤訳 1993）。また，子どもの気質特徴と環境との適合の良さを高めるためには，気質を文脈のなかで測定する必要がある。よって，母親を中心とする養育者が日常生活のなかで，子どもをどのように知覚しているか，子どもの特徴をどのように評価しているかを明らかにできるような内容を含んだ質問紙が作成される必要がある。そのためには，可能な限り文脈や環境との関係のなかで評価されるよう，日常生活での子どもの行動の特徴を明らかにできるような質問項目を用いる必要があると考えられる。

そこで本論文では，あらたに 1 歳代の幼児を対象とした，因子構造などの構造面，日本の文化にあった内容面，項目数などの形式面の問題点について整理した上で改良を試み，日常生活のなかで母親が知覚した気質特徴を評価することが可能な気質質問紙を作成し，作成された気質質問紙の臨床的応用の可能性について検討を行う。

本論文は，以下のように 5 章から構成される（Figure 1）。第 1 章では，今まで述べてきたように，気質を評価することの臨床的意義を確認し，気質に関する研究が心理学，発達心理学の分野でどのように実施されてきたのかを概観し，本研究で明らかにする幼児の気質概念について確認した。また，幼児の気質を評価する手法として，質問紙に着目し，養育者を対象に質問紙を使用して研究をすすめることの意義，従来用いられてきた気質質問紙の問題点について整理した。第 2 章では，第 1 章で述べたことをうけ，臨床現場での活用，有益性の高い幼児気質質問紙の作成を試みる。第 3 章では，第 2 章で作成された幼児気質質問紙と子どもの発達的な問題や問題行動との関連から，子どもに対する発達支援における気質質問紙の臨床的応用の可能性について明らかにする。第 4 章では，第 2 章で作成された幼児気質質問紙と養育者の育児

不安との関連から，養育者に対する育児支援における気質質問紙の臨床的応用の可能性について明らかにする。第5章では，本論文の総括として，本論文で作成された幼児気質質問紙の独自性，その臨床的応用の可能性，幼児気質質問紙を用いて気質評価をすることの臨床的意義を考察し，最後に今後の課題について述べる。

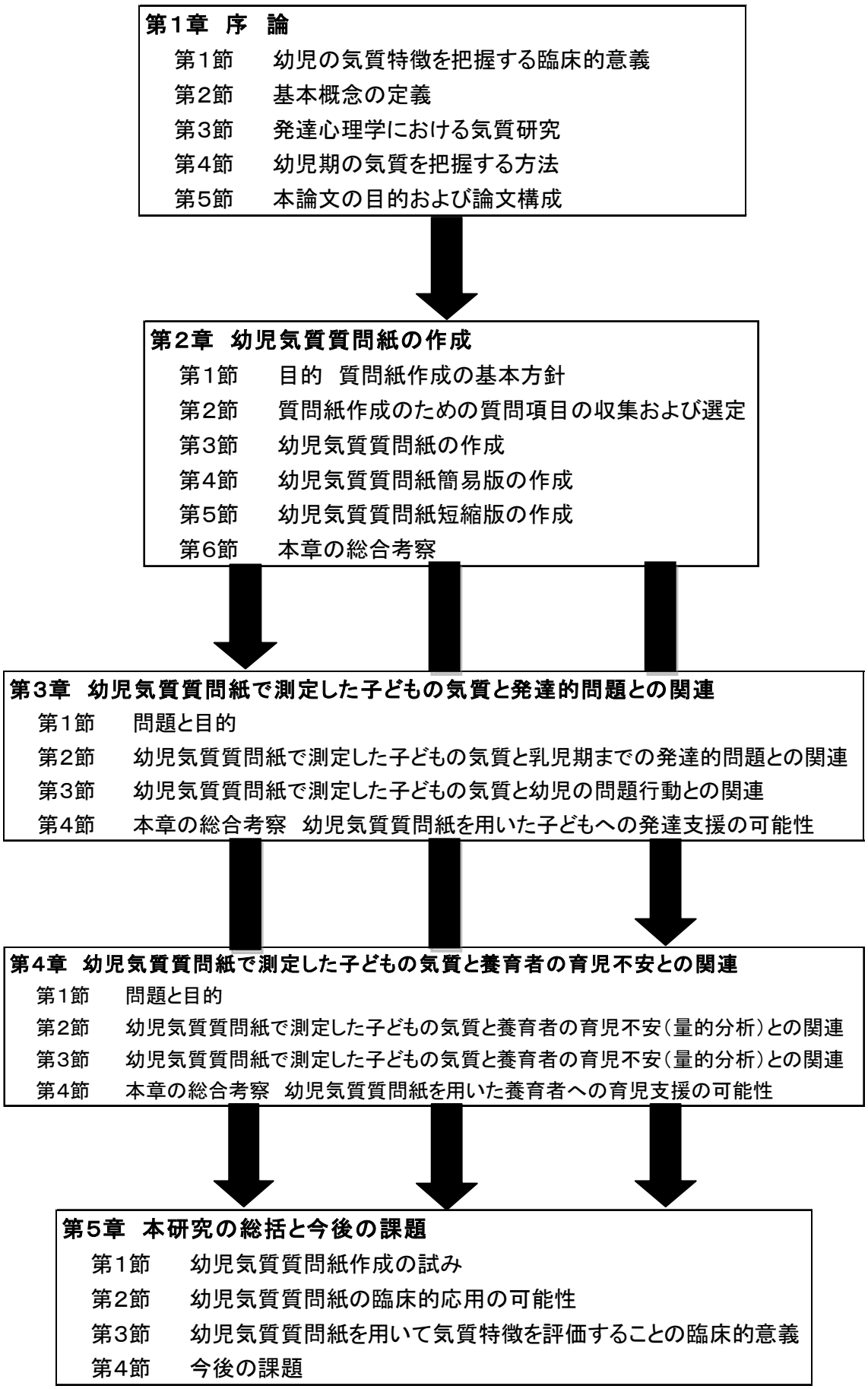

Figure 1　本論文の構成

第２章
幼児気質質問紙の作成

第１節
目的　質問紙作成の基本方針

幼児の気質を評価する幼児気質質問紙作成の際，以下の６つの基本方針ですすめた。

1. 幼児の気質特徴を幅広く評価することができるように候補となる質問項目をできるだけ多く収集する。
2. 収集された質問項目のなかから，NYLSによって導きだされた９つの特徴に対応させ，気質特徴を文脈のなかで評価できるよう，項目内容が日常の育児場面を反映するなど具体的であり，かつ回答者が理解しやすい項目であるということを基準にして，質問紙作成のための項目を選定する。
3. NYLSの９つの気質特徴を参考に幼児気質尺度を作成するが，NYLSの９つの気質特徴に対応した尺度が作成できない場合は，統計的に得られた因子構造を手がかりに，あらたな次元の尺度として作成する。
4. 尺度を構成する項目数は，従来の質問紙の項目数より少なくなるよう，選定する。
5. 作成された気質質問紙の各尺度の信頼性および妥当性について確認する。
6. 作成された幼児気質質問紙をもとに，項目数を減らし，信頼性と妥当性を有したスクリーニング用の幼児気質質問紙を作成する。

第２節
質問紙作成のための質問項目の収集および選定

質問項目の収集

幼児の気質に関連すると考えられる特徴を記述するために作成された複数の既存の質問紙から幅広く項目を収集した。具体的には，Toddler Temperament Scale(以下，TTS Fullard,et al, 1984)91 項目，EAS(Buss & Plomin, 1984) 20 項目，Toddler Behavior Questionnaire（以下，TBQ；Hagekull, Lindhagen & Bohlin, 1980)44 項目，Colorado Childhood Temperament Inventory（以下，CCTI；Rowe & Plomin，1977)30 項目，Child Characteristics Questionnaire（以下，CCQ；Bates, Freeland & Lounsbury, 1979) 32 項目の幼児気質質問紙である。加えて，子どもの情緒面，社会性の問題を評価するために開発された Infant-toddler Social and Emotional assessment（以下，ITSEA；Briggs-Gowan & Carter, 1998)62 項目も項目収集のための質問紙として採用した。TTS については，日本語版として使用されている庄司（未公刊）の１歳児から３歳児用の行動様式質問紙の質問項目を用いた。その他の質問紙の項目については，心理学を専門とする大学教員３名，心理学専攻の大学院生１名，研究生１名が邦訳した。同一の項目に対する異なった訳は別項目としてとりあつかったため，最終的に項目数は 960 項目になった。次にこれらの質問項目は，Thomas & Chess（1986）の定義に従い，表面的妥当性から，邦訳した５名によって NYLS の９つのいずれかの気質特徴に分類された。各気質特徴に分類された項目は，“気の散りやすさ”が 13 項目と少なかったが，その他の特徴には 39 項目から 162 項目が分類された。また，9 特徴のいずれにも分類されなかった項目は 256 項目あった。256 項目の内訳は，42 項目が CCQ，34 項目が EAS，5 項目が TBQ，42 項目が CCTI，133 項目が ITSEA からの

項目であった。

9つの特徴に分類された項目について，内容が日常の育児場面を反映するなど具体的であり，かつ回答者が理解しやすいということを基準にして，邦訳した5名で協議し，各特徴について9～14項目，計88項目を選定した。

質問項目内容の選定（予備調査）

1.目的

質問項目の内容が子どもの年齢および日本文化に馴染む内容であるか否かを確認することを目的とした。

2.方法

2.1　調査協力者

2002年7月にK市で実施された1歳6ヶ月児健診対象者221名の養育者を調査対象とした。

2.2　調査方法

1歳6ヶ月児健診時に使用する問診票とともに，健診受診の約1ヶ月前に郵送し，健診会場で回収した。

2.3　質問紙

9つの特徴について9～14項目，計88項目の質問項目で質問紙を作成した。各項目について，通常の日常生活のなかで体験することとして内容を理解することが困難であるか否か（以下，理解困難），内容が子どもの年齢あるいは状況に応じているか否か（以下，回答困難）を尋ねた。

3.結果と考察

1名以上が理解困難と回答した項目は6項目みられた。これら6項目のうち，1項目のみ10名（4.5%）であり，残りの項目は1名（.5%）から3名（1.4%）であった。一方，1名以上が回答困難と回答した項目は26項目みられた。これら26項目のうち，最も多かった項目の件数は35名（16.0%）であり，次いで24名（10.9%）であった。

残り24項目は1名（.5%）から4名（.8%）であった。質問項目を邦訳した5名で協議した結果，2%未満の応答率を示した項目はそのまま採用することとした。2%以上の応答率を示した3項目について協議した結果，応答率が最大でも16%であること，NYLSによって導きだされた9つの気質特徴を記述する項目としては適切であり，この段階で積極的に削除する理由はないと判断し，88の質問項目をそのまま尺度作成のための候補として採用することとした。

第３節
幼児気質質問紙の作成

調査１　NYLSの９つの気質特徴に対応する因子の確認と尺度作成のための項目選定

1.目的

予備調査で採用した項目を用いて，NYLSによって導きだされた9つの気質特徴に対応する9因子の抽出が可能かどうかを検討する。さらに，本調査のデータから得られた因子構造を手がかりに，尺度作成のための最終候補に残る項目を選定することを目的とした。

2.方法

2.1　調査協力者

K市が2002年8月から12月に実施した1歳6ヶ月児健診の対象者1,972名の養育者である。うち，健診を受診したのは1,620名，質問紙が回収されたのは1,171名（回収率　59.4%）であった。回答者のうち1,143名（97.6%）が母親であった。対象幼児の年齢の範囲は12ヶ月から23ヶ月で，平均18.2ヶ月（*SD*=.75）であった。対象幼児の性別は男児586名（50.0%），女児580名（49.5%），不明5名（.4%）であった。

2.2　調査方法

1歳6ヶ月児健診時に使用する問診票とともに，健診受診の約1ヶ月前に郵送し，健診会場で回収した。なお，回答項目が1項目でも欠損値となっている場合（179名），さらに7月受診予定者として配布された質問紙（予備調査用質問紙）に回答していた場合（22名）は分析対象から除外したため，最終的に分析に用いた対象者は970名となった。

2.3　質問紙

予備調査で選定した88項目から成る質問紙である。回答形式は，1.“全くない”から4.“いつもある”の頻度による4段階とした。また，質問紙記入日，対象幼児の生年月日，年齢，性別，出生順位，対象幼児と記入者の関係を記入する欄を設けた。

3.結果と考察

9つの気質特徴に対応した因子が得られるかどうかを確認するために，88の質問項目への回答に対して，因子数を9に指定し，共通性の反復推定による主因子法を用いて因子分析を実施した。これらの9因子によって全分散の86%が説明された。次にこの9因子に関してPromax回転を行った。結果，NYLSの9特徴に対応すると考えられる因子は，第Ⅴ因子と第Ⅶ因子の2因子のみであり，それぞれ“周期性”と“気の散りやすさ”に対応していた。この2因子をのぞく7因子については，既存の複数の尺度から選定された項目で構成されており，NYLSの他の7つの特徴とは対応していなかった。また，これらの各因子に.30以上で負荷した項目は，第Ⅵ因子と第Ⅶ因子では4項目，第Ⅷ因子では3項目，第Ⅸ因子では2項目であった。このように，9因子中，4因子に関しては弱小な因子であることが推察された。以上のことから，予備調査で採用した項目でNYLSの9特徴に対応する9因子を抽出することは困難と考えられた。

そこで，9因子までの範囲で解釈可能な因子を多く抽

出することとし，このことにより最終候補に残る項目数をできるだけ多く確保しようとした。探索的に9因子から順に因子数を減じて因子分析を繰り返した結果，7因子にまで減じて抽出した際に，因子の解釈が可能となった。これら7因子は全分散の78%を説明していた。また，これらの各因子に.30以上の負荷を示した項目は最少でも7項目存在した。この因子分析の結果を手がかりにし，いずれか1つの因子に.30以上の負荷量を示し，同時に他の因子には.30以上の負荷を示さないという基準を設け，60項目を採用した（Table 1）。

採用した60項目の内訳は，TTSからの項目が47項目と大部分を占めた。残り13項目のうち，7項目がITSEAから，2項目がTBQとCCTI，1項目がEASとCCQからの項目であった。

得られた因子のうち，第Ⅰ因子は，TTSの“反応の強度”と“気分の質”の否定的な内容の項目を中心に構成され，否定的な感情反応を示すと考えられる。第Ⅱ因子はTTSの“注意の範囲と持続性”，“接近・回避”と“活動水準”のなかで，活動性や初めて会った人や新しいことに積極的に関わるといった項目を中心に構成され，活動性および接近性を示すと考えられる。第Ⅲ因子はTTSの“接近・回避”と“順応性”の項目を中心に構成され，見知らぬ人や場所への慣れやすさに代表されるように主に新環境への順応性を示すと考えられる。第Ⅳ因子はTTSの“反応閾値”と“順応性”の項目を中心に構成され，状況や感覚的な敏感さ，注意すると従うといった，周囲の刺激や周囲からの働きかけに対する過敏性を示すと考えられる。第Ⅴ因子はTTSの“周期性”の項目から構成され，生理リズムの規則性を示すと考えられる。第Ⅵ因子はTTSの“反応の強度”や“順応性”など全て異なる尺度から4項目，EAS以外の全ての質問紙から1項目ずつで構成され，落ち着いて遊ぶことができない，動き回る，注意しても従わないといった，落ち着きのなさを示すと考えられる。第Ⅶ因子はTTSの“気の散りやす

さ”の項目を中心に構成され，活動が刺激によって中断されやすいといった気の散りやすさを示すと考えられる。

得られた7因子のうち，NYLSの9つの気質特徴に対応する因子として生理リズムの規則性と気の散りやすさの2因子が抽出され，これらの2因子は9因子抽出した際にも得られていた。よって，これらの2因子は，NYLSの気質特徴に対応し，かつ安定した因子と考えられる。しかし，その他の因子については，NYLSの気質特徴に対応していないだけでなく，安定して抽出される因子か否かは現段階では不明である。例えば，第Ⅳ因子に「1～2度強く叱られると，同じ失敗をするのを避ける」，第Ⅵ因子に「あなたが何回注意しても近寄ってはいけないところに行こうとしたり，さわってはいけないものを取ろうとしたりする」といった従順性を示す項目が負荷しており，第Ⅳ因子と第Ⅵ因子が内容的に重複した因子である可能性も否定できない。よって，因子的妥当性を有した尺度を作成するためには，調査1の結果をもとに，再度，因子構造について検証することが必要と考えられる。

Table 1　因子分析の結果

番号	項目内容	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	第Ⅶ因子	a		b
41	自分の思いどおりにならないと、激しく感情を表す(泣き叫ぶ、金切り声をあげる、地団駄を踏む)。	.643							TTS	5	*
40	短気で、怒りっぽい。	.612							ITSEA	2	*
83	よくさわいで、大泣きする。	.562							CCTI	2	*
3	遊びがうまくいかないと、泣き出したり、金切り声をあげたりする。	.527							TTS	5	*
87	泣いたり、怒ったりした時、手足をバタバタさせたり、地団駄を踏んだりする。	.488							TTS	5	*
72	他の子どもにオモチャを取られると強く嫌がる(泣いたり、必死に取り返そうとする)。	.466							TTS	5	*
52	遊びをあなたが妨げると、激しく嫌がる(怒る、泣きわめく)。	.453							TTS	5	*
77	叱られたり、注意されたりすると、不機嫌な状態が続く。	.452							TTS	6	*
44	新しいこと(自分で服を着る、オモチャを片づけるなど)を覚える時、いらだったり、泣いたりする。	.347			.234				TTS	6	*
9	一日中ぐずっている不機嫌な日がある。	.332			.217				TTS	6	*
76	一人で遊ぶようにさせられると、不機嫌になる(眉をしかめたり、文句を言ったりする)。	.286			.243				TTS	6	
8	食べ物の好き嫌いをはっきりと表す(好きなものには声をあげて喜ぶ、嫌いなものは、はっきりと嫌がる)。	.277							TTS	5	
75	嫌いな食べ物は、好きな物の中に混ぜて与えても気がつく。	.273							TTS	9	
42	ベビーシッターや保育園の先生に対して、喜ぶにしろ、嫌がるにしろ、感情をはっきりと表す。	.271			.220				TTS	5	
55	遊んでいるとき、ひどく興奮する。	.263							ITSEA	1	
5	いったん泣き出してもすぐに気がそれて泣きやむ。	-.268							CCTI	6	
38	欲しいもの(お菓子、ごちそう、プレゼントなど)がすぐにもらえなくても、我慢して待てる。	-.360							TTS	4	*
39	初めて会った子どもには、自分から関わっていこうとする。		.516						TTS	3	*
22	新しいことに対して好奇心が強い。		.470		.300				ITSEA	8	*
7	他の子どもたちと一緒にいる時、機嫌よくしている。		.466					.314	TTS	6	*
69	1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。		.456					.284	EAS	3	*
73	他の子どもたちの遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらを見る。		.445						TTS	8	*
74	新しくできるようになったこと(ボールを投げる、積み木を積む、絵を描くなど)をしばらく続ける。		.444						TTS	7	*

50	あなたが遊んであげる時は、しばらく遊びが続く。	.398		TTS	7	*
1	同一の子どもとしばらく遊びが続く。	.394	-.207	TTS	7	*
14	座って遊ぶよりも、走ったり、飛び跳ねたりする遊びの方を好む。	.380		TTS	1	*
56	初めての場所を探索している時、活発に動き回る(走る、飛び跳ねる、よじのぼる)。	.378		TTS	1	*
30	自分一人でいろいろしたがる。	.326		ITSEA	8	*
61	声を出してよく笑う。	.323		ITSEA	7	*
48	初めて見る小動物(小さな犬や猫)に近寄って行き、遊ぼうとする。	.322		TTS	3	*
37	泣いたりむずがったりしたとき、その原因がなにか分かる。	.257		CCQ	1	
88	あなたが忙しくてかまってやれない時、注意をひこうとする。	.252	.298	CCQ	1	
58	泥まみれになっても平気である。	.239	-.241	TTS	9	
62	お腹がいっぱいになると、それ以上の食べ物やミルクを摂るのをはっきりと嫌がる(口をつぐんだり、吐き出したりする)。	.224		TTS	5	
21	車のチャイルドシートなどに拘束されると嫌がる。	7.22		CCQ	3	
64	誰かが話しかけたり、抱っこしたりするとむずがるのをやめる。			CCTI	6	
66	好きなテレビ番組を見ている間、じっと座っている。			TTS	1	
67	“ボーっ”としており、自分の身のまわりで起こっている出来事に全く気づいていない。	-.217		ITSEA	5	
18	乗り物の座席やベビーカーの中でじっとしている。	-.249		TTS	1	
45	初めての人に抱かれたり、体をさわられたりすると、泣いたり、嫌がって母親にしがみついたりする。		.670	TTS	3	*
27	他の人がそばにいると、あなたにしがみついたり、膝の上に乗りたがる。		.586	ITSEA	4	*
6	初めての場所(初めていく家、お店、旅行先)で、最初の数分間、不安そうにしている。		.501	TTS	3	*
51	抱っこしてもらいたがることが多い。		.271	CCQ	1	
68	一人でいるように言われたとき、遊んでいたオモチャで遊び続けることをやめてしまう。			CCQ	3	
57	目が覚めた時、ぐずる(ぐずぐず言ったり、泣いたりする)。			TTS	6	
65	服の脱ぎ着をさせる時、嫌がる。			TTS	4	
85	医療機関へ行った時、最初から嫌がらずに診察を受ける。		-.275	TTS	3	
2	初めての場所(親戚の家、旅行先など)でも、最初から普段と同じように眠る。		-.310	TTS	4	*

32	あなたから離れる新しい環境(保育園、ベビーシッターなど)に、比較的はやく慣れる。	-.460				TTS	4	*
36	知らない人にも、すぐに話しかける。	-.579				TTS	3	*
17	知らない人に遊んでもらっていても、機嫌よくしている。	-.629				TTS	3	*
20	快・不快を問わず、においに敏感である。		.544			TTS	9	*
25	1～2度強く叱られると、同じ失敗をするのを避ける(過ちを繰り返さない)。		.452			TTS	4	*
60	物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。		.434			ITSEA	5	*
15	あなたの髪型や服装の変化に気がつく。		.383			TTS	9	*
71	服が濡れるとすぐに気づき、服をかえてもらいたがる。		.381			TTS	9	*
59	してはいけないことをしようとした時、言い聞かせるとやめる。		.369			TTS	4	*
31	何かをしていた時、おやつを食べるとか、トイレへ行くなどで中断しても、また同じ活動を続ける。		.366			TTS	7	*
13	普段、食べている食べ物の味や固さが違っていると、気がつく。		.335			TTS	9	*
19	初めて見るものに興味をもって、立ち止まる(5分間以上)。		.317			TTS	7	*
80	あなたが会合や旅行に行くなど、日常習慣が崩れたり変化すると、様子がかわる。		.293			CCQ	2	
12	誉められると、すぐに興奮する(声をあげて喜ぶ、飛び跳ねる)。		.266			TTS	5	
28	嫌いになった食べ物を好きになることがある。		.211			CCTI	5	
47	食べ物の温度に敏感である(ちょっと熱かったり、冷たかったりすると嫌がる)。					TTS	9	
79	夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。			.657		TTS	2	*
29	朝食の時に食べる量は、毎日大体同じである。			.595		TTS	2	*
63	ベッド(または布団)に入ってから眠るまでの時間は、一定である。			.484		TTS	2	*
35	昼寝の長さは、毎日大体同じである。			.477		TTS	2	*
11	朝、目覚める時刻は、毎日大体同じである。			.443		TTS	2	*
16	ウンチをする時刻は毎日大体同じである。			.395		TTS	2	*
86	食べている時は、他のことに気をそらさずに最後まで食べる。			.329		TBQ	2	*
46	一日の中で、一番活動的になる時間帯は、ほぼ決まっている。			.317		TTS	2	*
4	お話を聞いたり、絵本を見る間、落ち着きなく体を動かす。				.524	TTS	1	*

84	落ち着かず、じっと座っていることができない。	.523		ITSEA	1	*
34	あなたが何回注意しても、近寄っては行けないところに行こうとしたり、さわってはいけないものを取ろうとしたりする。	.467		TTS	4	*
82	「やめなさい」「おいで」「だめだめ」などと言われても、勝手にどこかに行こうとする。	.411		CCQ	3	*
81	次から次とオモチャをかえて遊ぶ。	.377		CCTI	4	*
53	扱いにくいオモチャは、すぐに手放す。	.230		CCTI	4	
70	他の子どもとくらべ、ケガをすることが多い。	.206		ITSEA	1	
78	髪をとかしたり、爪を切ったりしている間、じっとしている。	-.242		TTS	1	
10	あなたが絵本を読み聞かせると、しばらく聞いている。	-.433		TBQ	2	*
33	電話のベルやドアのチャイムがなると、遊びをやめて音がした方を見る。		.513	TTS	8	*
23	電話のベルやドアのチャイムがなると、食べるのをやめて音がした方を見る。		.464	TTS	8	*
54	あなたが部屋に入ってくると、遊びを中断して、あなたの方を見る。		.438	TTS	8	*
49	好きなテレビ番組を見ている時、あなたが呼びかけると、振り返ったり、テレビを見るのをやめる。		.406	TTS	8	*
26	誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。		.379	TTS	8	*
24	抱かれると、ぴったり寄り添ったり、すり寄ったりする。			CCQ	4	
43	お気に入りのオモチャで遊んでいる時は、声をかけられても、無視する(気がつかない)。		-.310	TTS	8	*

注1 a:項目収集のために採用した質問紙と尺度

注2 b:*の項目は調査1の結果より採用した60項目

注3 因子負荷量は .200以上のみ記載した。

調査 2　幼児気質質問紙の作成

1. 目的

調査 1 で得られた因子構造を手がかりに，因子的妥当性と信頼性を有した幼児気質質問紙を作成することを目的とした。

2. 方法

2.1　調査協力者

K 市が 2003 年 6 月から 11 月に実施した 1 歳 6 ヶ月児健診対象者 2,322 名の養育者である。健診を受診したのは 1,948 名で，うち，質問紙が回収できたのは 1,550 名（回収率 66.8 %）であった。回答者は 1,514 名（97.7%）が母親であった。対象幼児の年齢の範囲は 17 ヶ月から 22 ヶ月で，平均 18.2 ヶ月（*SD*=.67）であった。性別は男児 789 名（50.9%），女児 743 名（47.9%），不明 18 名（1.2%）であった。

2.2　調査方法

調査 1 と同様の手続きを用いた。なお，質問項目への回答が欠損している場合は分析対象から除外したため，最終的に分析に用いた対象者は 1,349 名であった。

2.3　質問紙

調査 1 で選定された 60 項目から成る質問紙を用いた。回答形式については，調査 1 と同じであった。

3. 結果と考察

調査 1 で 7 因子が抽出されたことをふまえ，抽出する因子数を 7 に指定し，共通性の反復推定による主因子法を用いて，Promax 回転による因子分析を行った。その結果，第 Ⅱ 因子と第 Ⅶ 因子は解釈が困難であった。さらに，第 Ⅶ 因子については .30 以上で負荷した項目数が 4 項目と少なかった。以上のことから，調査 1 で抽出した 7 因子の安定性は低いと判断した。

再度，抽出する因子数を 9，8，6，5 と変化させ，探索

的に因子分析を繰り返した。その結果，6 因子抽出した際に，因子の解釈が可能であり，各因子に負荷する項目数も十分に得られた。これら 6 因子は全分散の 92%を説明していた。また，調査 1 と同様，いずれかの因子に.30 以上の負荷量を示し，同時に他の因子には.30 以上の負荷量を示さないという基準を設け，50 項目を選定した。選定した 50 項目に対し，因子数を 6 に指定し，主因子法，Promax 回転による因子分析を再度行った。最終的に各因子に.30 以上の負荷量を示した項目を採用し，6 尺度 47 項目の質問紙を作成した（Table 2）。6 因子についての因子間の相関は.00 から.29 の範囲であり，因子間相関は比較的低いと判断した。

第Ⅰ因子は 9 項目から成り，TTS の“反応の強度”“気分の質”の否定的内容の 7 項目を中心に構成されていた。調査 1 の第Ⅰ因子に対応し，思い通りにならないと激しく感情を表す，大泣きするなどの内容から，否定的感情反応尺度と命名した。第Ⅱ因子は 10 項目から成り，TTS の“順応性”から 4 項目，“反応閾値”から 3 項目，“注意の範囲と持続性”や CCQ の“注意の持続”，ITSEA の“不適応”から各 1 項目と複数の尺度に属する項目で構成されていた。調査 1 の第Ⅵ因子の，「やめなさいと言われても勝手に行こうとする」といった項目（負に負荷）も含まれていたが，「強く叱られると同じ失敗をしない」といった調査 1 の第Ⅳ因子の項目が中心であった。つまり，調査 1 の第Ⅳ因子に対応すると考えられ，項目内容から神経質尺度と命名した。第Ⅲ因子は，6 項目から成り，TTS の“接近・回避”から 4 項目，TTS の“順応性”と ITSEA の“行動抑制・分離”の 1 項目から構成されていた。調査 1 の第Ⅲ因子に対応し，新しい環境や人への馴れにくさなどの内容を示すことから，順応性尺度と命名した。第Ⅳ因子は 8 項目から成り，TTS の“活動水準”，“気分の質”，“注意の範囲と持続性”など複数の尺度に属する 1 から 2 項目，ITSEA の“熟練欲求”に属する 2 項目，EAS の“社交性”からの 1 項目で構成されていた。

調査1の第Ⅱ因子に対応し，活発に遊ぶことや好奇心の強さといった内容から，外向性尺度と命名した。第Ⅴ因子は7項目から成り，TTSの“周期性”から6項目，TBQの“扱いやすさ”の1項目から構成され，調査1の第Ⅴ因子と対応していた。生理リズムが規則的か否かという内容から，規則性尺度と命名した。第Ⅵ因子は7項目から成り，TTSの“気の散りやすさ”，調査1の第Ⅶ因子に対応していた。刺激によって活動が中断されやすいか否かという内容から，注意の転導性尺度と命名した。以上，調査1の第Ⅵ因子（落ち着きのなさ）は同定できなかったが，その他の因子については再現性が確認された。

6尺度について内的整合性を検討するため，尺度ごとにα係数を算出したところ，.65から.80の範囲であり，内的整合性の低い尺度も含まれていた（Table 2）。.70以下の尺度は外向性尺度と注意の転導性尺度であったが，その他の尺度については.70以上を示しており，信頼性は満たしていた。

Table 2 幼児気質質問紙因子分析の結果

番号	項目内容	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	α係数	a		b
58	思いどおりにならないと、激しく感情を表す。	.668							TTS	5	Ⅰ
17	遊びがうまくいかないと、泣き出す、金切り声。	.627							TTS	5	Ⅰ
47	よくさわいで、大泣きする。	.622							CCTI	2	Ⅰ
5	短気で、怒りっぽい。	.604							ITSEA	2	Ⅰ
28	新しいことを覚える時、いらだつ、泣く。	.551							TTS	6	Ⅰ
42	遊びをあなたが妨げると、激しく嫌がる。	.546							TTS	5	Ⅰ
4	泣いたり、怒ったりした時、地団駄をふむ。	.520							TTS	5	Ⅰ
18	一日中ぐずっている不機嫌な日がある。	.478							TTS	6	Ⅰ
23	叱られたり、注意されると、不機嫌な状態が続く。	.476						.80	TTS	6	Ⅰ
59	1～2度強く叱られると、同じ失敗をしない。		.535						TTS	4	Ⅳ
53	物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。		.532						ITSEA	5	Ⅳ
55	服が濡れるとすぐ気づき、服をかえてもらいたがる。		.493						TTS	9	Ⅳ
13	してはいけないことを、言い聞かせるとやめる。		.430						TTS	4	Ⅳ
26	快・不快を問わず、においに敏感である。		.410						TTS	9	Ⅳ
35	あなたの髪型や服装の変化に気がつく。		.399						TTS	9	Ⅳ
50	何かをしてた時、中断しても、同じ活動を続ける。		.382						TTS	7	Ⅳ
38	欲しいものがすぐもらえなくても、我慢して待つ。		.346						TTS	4	Ⅰ
15	「やめなさい」と言われても、勝手に行こうとする。		-.362						CCQ	3	Ⅵ
1	何回注意しても、行ったり、さわったり。		-.407					.71	TTS	4	Ⅵ
24	初対面の人に体をさわられると、泣く、嫌がる。			.767					TTS	3	Ⅲ
29	他の人がそばにいると、しがみつく。			.658					ITSEA	4	Ⅲ
21	初めての場所で、最初数分間、不安そうにする。			.419					TTS	3	Ⅲ
43	あなたから離れる新環境に、比較的はやく慣れる。			-.430					TTS	4	Ⅲ
36	知らない人にも、すぐに話しかける。			-.576					TTS	3	Ⅲ
33	知らない人に遊んでもらっても、機嫌よくする。			-.666				.77	TTS	3	Ⅲ
6	座って遊ぶより、飛び跳ねたりする遊びを好む。				.515				TTS	1	Ⅱ
27	新しいことに対して好奇心が強い。				.505				EAS	3	Ⅱ
37	1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。				.504				ITSEA	8	Ⅱ
7	初めての場所を探索している時、活発に動き回る。				.473				TTS	1	Ⅱ
57	同一の子どもとしばらく遊びが続く。				.434				TTS	7	Ⅱ
48	他の子どもたちと一緒にいる時、機嫌よくしている。				.405				TTS	6	Ⅱ
40	初めて見る小動物に近寄り、遊ぼうとする。				.340				TTS	3	Ⅱ
56	自分一人でいろいろしたがる。				.328			.69	ITSEA	8	Ⅱ
25	夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。					.733			TTS	2	Ⅴ
31	朝食の時に食べる量は、毎日大体同じである。					.688			TTS	2	Ⅴ
2	ベッドに入ってから眠るまでの時間は、一定。					.450			TTS	2	Ⅴ
22	食べている時、気をそらさず最後まで食べる。					.442			TBQ	2	Ⅴ
8	朝、目覚める時刻は、毎日大体同じである。					.417			TTS	2	Ⅴ
39	昼寝の長さは、毎日大体同じである。					.383			TTS	2	Ⅴ
3	一日で、活動的になる時間帯は、ほぼ決まっている。					.381		.71	TTS	2	Ⅴ
30	電話のベルで、食べるのをやめ、音の方を見る。						.600		TTS	8	Ⅶ
16	電話のベルで、遊びをやめ、音の方を見る。						.581		TTS	8	Ⅶ
11	他の子どもたちの遊んでいる声で、そちらを見る。						.509		TTS	8	Ⅶ
10	誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。						.489		TTS	8	Ⅱ
46	あなたが部屋に入ると、遊びを中断、見る。						.371		TTS	8	Ⅶ
19	好きなテレビの時、呼びかけると、振り返る。						.352		TTS	8	Ⅶ
32	お気に入りのオモチャで遊んでいる時は、無視。						-.302	.65	TTS	8	Ⅶ

注1 項目内容は簡略化した

注2 a:項目収集のために採用した質問紙と尺度

注3 第Ⅰ因子:否定的感情反応尺度、第Ⅱ因子:神経質、第Ⅲ因子:順応性、第Ⅳ因子:外向性、第Ⅴ因子:規則性、第Ⅵ因子:注意の転導性

注4 b:調査1の因子

次に，各気質尺度得点の男女別および全体での平均値，標準偏差，分布の形状の指標として歪度を算出した（Table 3）。

Table 3 幼児気質質問紙各尺度の平均値および標準偏差

	否定的感情反応		神経質**		順応性**		外向性		規則性		注意の転導性	
平均値　男(n=691)・女(n=645)	2.40	2.42	2.24	2.36	2.51	2.70	3.29	3.30	3.13	3.12	3.20	3.23
標準偏差　男・女	.51	.51	.39	.42	.64	7.61	.38	.40	.49	.48	.37	.38
平均値 全体(n=1349)	2.41		2.30		2.60		3.30		3.12		3.21	
標準偏差　全体	.51		.41		.63		.39		.48		.37	
歪度	-.09		-.03		-.03		-.56		-.58		-.33	

** p<.01で有意差あり。
性別不明 n=13

各尺度は6から10項目で構成され，各尺度得点は個々の項目の粗点（1～4点）を合計，平均した得点で表した。性別によって，各気質尺度得点に差がみられるか否か，t検定を行ったところ，神経質尺度と順応性尺度については，女児の方が男児より有意に得点が高かった（神経質尺度；t(1306)＝5.54，p<.01，順応性尺度；t(1334)＝5.53，p<.01）。尺度得点の分布の形状に関しては，否定的感情反応尺度，神経質尺度，順応性尺度については比較的正規型に近い形状を示したが，その他の尺度については尺度得点が高い方に分布が偏る傾向が認められた。とくに外向性尺度，規則性尺度はこの傾向が著しかった。

調査3　幼児気質質問紙の因子的妥当性の検討

1．目的

調査対象サンプルを変えて質問紙調査を実施し，幼児気質質問紙の尺度の因子的妥当性について確認することを目的とした。

2．方法

2．1　調査協力者

幼児をもつ養育者393名である。対象幼児の年齢は平均22.5ヶ月（SD=3.3）であり，性別の内訳は男児181

（46.1％）名，女児207名（52.7％），不明5名（1.3％）であった。幼児気質質問紙の分析対象者は，尺度の質問項目への回答が欠損値となっている場合にのみ分析から除外したため，348名であった。

2.2　調査方法

総合病院産婦人科で出産した養育者に対し，対象幼児が1歳を過ぎた頃に幼児気質質問紙を郵送にて送付，回収した。

2.3　質問紙

調査2で作成された6尺度47項目からなる質問紙を用いた。回答形式については，調査1と同じであった。

3.結果と考察

47の質問項目への回答に対して，因子数を6に指定し，共通性の反復推定による主因子法を用いて因子分析を行い，その後Promax法による回転を実施した（Table 4）。

結果，抽出された6因子のうち，第Ⅰ因子は調査2で抽出された第1因子と全く同じ9項目から構成され，否定的感情反応尺度に対応した因子と考えられた。第Ⅱ因子は調査2で抽出された第3因子から6項目，第4因子から4項目で構成され，順応性尺度と外向性尺度に対応した因子と考えられた。第Ⅲ因子は調査2で抽出された第6因子から6項目，第4因子から2項目から構成され，注意の転導性尺度に対応すると考えられた。第Ⅳ因子は調査2で抽出された第5因子と全く同じ7項目から構成され，規則性尺度に対応した因子と考えられた。第Ⅴ因子は調査2で抽出された第2因子の7項目と第4因子の2項目から構成され，神経質尺度に対応した因子と考えられた。調査2で抽出された第4因子の残りの4項目については，3項目は第Ⅵ因子に，残る1項目はどの因子にも属していなかった。

以上のことから，調査2で作成された否定的感情反応尺度と規則性尺度については因子的妥当性の高い尺度と考えられた。残りの尺度のうち，神経質尺度および注意

の転導性尺度についても調査 2 で作成された質問紙とほぼ同じ項目からなる因子を示し，比較的因子的妥当性の高い尺度と考えられた。一方，順応性尺度と外向性尺度については項目が 1 つの因子にまとまり，それぞれに対応する因子が独立しては抽出されず，因子の安定性は高くないと考えられる。

Table 4　幼児気質質問紙確認的因子分析の結果

番号	項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	a
35	思いどおりにならないと、激しく感情を表す。	.780						1
27	遊びがうまくいかないと、泣き出す、金切り声。	.714						1
38	泣いたり、怒ったりした時、地団駄をふむ。	.635						1
32	よくさわいで、大泣きする。	.621						1
14	短気で、怒りっぽい。	.576						1
3	遊びをあなたが妨げると、激しく嫌がる。	.476						1
40	新しいことを覚える時、いらだつ、泣く。	.455						1
26	叱られたり、注意されると、不機嫌な状態が続く。	.452						1
9	一日中ぐずっている不機嫌な日がある。	.278				.219		1
29	知らない人にも、すぐに話しかける。		.756					3
36	知らない人に遊んでもらっても、機嫌よくする。		.719					3
41	他の人がそばにいると、しがみつく。		.713					3
20	初対面の人に体をさわられると、泣く、嫌がる。		.700					3
37	初めての場所で、最初数分間、不安そうにする。		.521					3
31	あなたから離れる新環境に、比較的はやく慣れる。		.475					3
44	初めて見る小動物に近寄り、遊ぼうとする。							4
28	座って遊ぶより、飛び跳ねたりする遊びを好む。		-.266	.262				4
17	他の子どもたちと一緒にいる時、機嫌よくしている。		-.329					4
33	初めての場所を探索している時、活発に動き回る。		-.381				-.373	4
25	電話のベルで、遊びをやめ、音の方を見る。			.627				6
30	誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。			.515				6
7	電話のベルで、食べるのをやめ、音の方を見る。			.488				6
2	他の子どもたちの遊んでいる声で、そちらを見る。			.442				6
10	あなたが部屋に入ると、遊びを中断、見る。			.425				6
19	1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。		-.296	.354				4
47	好きなテレビの時、呼びかけると、振り返る。			.318			.256	6
13	新しいことに対して好奇心が強い。			.280			-.214	4
8	夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。				.634			5
1	朝食の時に食べる量は、毎日大体同じである。				.601			5
39	ベッドに入ってから眠るまでの時間は、一定。				.565		.254	5
42	昼寝の長さは、毎日大体同じである。				.535			5
45	朝、目覚める時刻は、毎日大体同じである。			.275	.484			5
22	食べている時、気をそらさず最後まで食べる。				.423			5
43	一日で、活動的になる時間帯は、ほぼ決まっている。			.218	.380			5
11	服が濡れるとすぐ気づき、服をかえてもらいたがる。					.568		2
16	物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。					.476		2
24	何かをしてた時、中断しても、同じ活動を続ける。					.459		2
23	あなたの髪型や服装の変化に気がつく。					.440		2
46	快・不快を問わず、においに敏感である。					.420		2
18	1～2度強く叱られると、同じ失敗をしない。					.385		2
34	自分一人でいろいろしたがる。		-.231	.264		.305	-.235	4
12	欲しいものがすぐもらえなくても、我慢して待つ。	-.289				.305	.228	2
21	同一の子どもとしばらく遊びが続く。		-.204	.208		.295		4
4	「やめなさい」と言われても、勝手に行こうとする。						.556	2
15	何回注意しても、行ったり、さわったり。					.203	.536	2
5	お気に入りのオモチャで遊んでいる時は、無視。	-.291		.249	-.228		.436	2
6	してはいけないことを、言い聞かせるとやめる。							2

注1　項目内容は簡略化した。因子負荷量は.200以上を示した。
注2　a:調査2で作成した尺度を示す。1:否定的感情反応尺度、2:神経質、3:順応性、4:外向性、5:規則性、6:注意の転導性

調査 4　幼児気質質問紙の信頼性の検討

1. 目的

幼児気質質問紙の 6 尺度についての再検査信頼性を確認することを目的とした。

2. 方法

2.1　調査協力者

幼児をもつ養育者 104 名である。幼児気質質問紙の質問項目への回答が欠損値となっている場合は分析から除外したため，幼児気質質問紙を 2 回実施した養育者が 80 名であった。対象幼児の年齢は，幼児気質質問紙の 1 回目を実施した時点で平均 19.8 ヶ月（SD=1.8）であり，性別の内訳は男児 47 名，女児 41 名，不明 16 名であった。

2.2　調査方法

川崎医療福祉大学で実施された親子教室に参加した幼児の養育者とＫ市内の保育園に通う幼児の養育者に対し，対象幼児が 18 ヶ月を過ぎた頃に質問紙を配布した。1 名の養育者に対し，幼児気質質問紙を 2 回実施した。質問紙を配布する間隔は 1～2 週間とした。

2.3　質問紙

調査 2 で作成された幼児気質質問紙を用いた。回答形式については，調査 1 と同じであった。

3. 結果と考察

幼児気質質問紙の再検査信頼性を確認するために，1 回目と 2 回目で実施された質問紙の 6 尺度について尺度ごとの相関係数を求めた（Table 5）。その結果，6 尺度全てについて .67 から .77 の範囲で有意な正の相関が認められた。再検査信頼性を確認した先行研究では .70 以上で安定した結果とする報告が多いが（小田・大・丹羽・五百部・清成・武田・平石，2013，など），.64 でも十分としているものもある（小塩・阿部・ピノ，2012）。よって，作成した幼児気質質問紙の 6 尺度の再検査信頼性は

確認できたと考えられる。

Table 5 再検査信頼性

気質尺度	否定的感情反応	神経質	順応性	外向性	規則性	注意の転導性
相関係数	.70***	.67***	.67***	.72***	.72***	.77***

***p<.001

調査 5　幼児気質質問紙と養育者が認知した幼児の特徴との関連

1．問題と目的

養育者は，自身が認知した子どもの特徴に応じて育児行動を行っている。よって，養育者が日常の関わりを通じて子どもの特徴をどのように認知し，記述するのかを明らかにし，幼児気質質問紙で測定された気質特徴とどのように関連がみられるのかを明らかにすることで，幼児気質質問紙の各尺度の内容的妥当性や尺度の示す内容について明らかにできると考えられる。そこで，養育者が日常の関わりを通じて子どもの特徴をどのように認知しているのかを明らかにし，幼児気質質問紙の各尺度との関連性から各尺度の妥当性および各尺度が示す内容について確認することを目的とした。

2.養育者が認知する子どもの特徴

2.1　調査協力者

K市が2002年8～12月に実施した1歳6ヶ月児健診対象者1,972名のうち，受診者は1,620名であった。このなかで，質問紙が回収できた1,171名（回収率59.4%）を対象とした。回答者は1,143名（97.6%）が母親であった。対象幼児の年齢は12～23ヶ月，平均18.2ヶ月（SD=.8），性別は男児586名（50.0%），女児580名（49.5%），不明5名（.4%）であった。なお，分析に必要な回答項目に記述がない場合は分析対象から除外したところ，有効回答者数は970名となった。

2.2　調査方法

2002年7～11月にかけて，1歳6ヶ月児健診時に使用する問診票とともに，以下の質問票を健診受診月の約1ヶ月前に郵送し，2002年8～12月まで健診会場で回収した。なお，実施目的と分析方法，プライバシーの保護について説明し，同意が得られた場合に無記名での回答を依頼した。

2.3　質問紙

「お子さんは一言で言うと，どんなお子さんですか？」（性格・特徴）という質問に対し，自由記述での回答を求めた。また，対象幼児の生年月日，年齢，性別，対象幼児と記入者の関係を記入する欄を設けた。

2.4　分析方法

自由記述の内容から，子どもの特徴と考えられる内容を全て抜粋したところ，45の特徴がみられた。45の特徴ごとに記述あり群と記述なし群にわけ，人数を集計した。養育者が自身の子どもについて複数の特徴を記述している場合は，それぞれの特徴について記述あり群としてカウントした。

3．結果と考察

記述が多かった特徴から順にTable 6に示した。

第一に多くみられた記述内容は，“活発”，214件であった。ついで，活動の質に関する特徴である“明るい”が158件，“元気”142件，“人見知りがない”117件，“甘えん坊”103件であった。一方，“手がつけられない”が52件，“落ち着きがない”47件，“短気・癇癪もち”43件，“わがまま”41件，“よく泣く”33件，“頑固”28件であった。

養育者は，子どもの特徴を“活発”，“明るい”，“元気”など活動性や活動の質で認知する傾向が認められた。養育者の子どもの特徴に対する認知が活動性およびその質に偏って記述される理由として以下のように考えられる。今回対象となった子どもの年齢は，1歳半から2歳前で

ある。この頃の子どもは，歩き始めて，活発に動き回るようになることや，有意味語を話し始めるため，言葉を交えて自己表現をするようになる。その結果，この時期の子どもは積極的に人との関わりを求めるようになり，養育者は子どもの活動性およびその質についての記述が多くなると考えられる。

一方，件数としては少ないが，“手がつけられない”，“落ち着きがない”，“短気・癇癪もち”といった特徴も記述されていた。これらの特徴は，養育者に対応の困難さを感じさせる特徴と考えられる。特に，落ち着きのなさは養育者の不安との関連が指摘されている。これらの特徴が記述された場合，専門家は，養育者の不安を和らげるとともに，これらの特徴がどのような子どもの気質と関連があるかを確認し，適切な対応を助言していく必要があると考えられる。

Table 6　自由記述であげられた特徴の記述なし群・あり群の人数分布

子どもの特徴	活発		笑顔		わがまま		自分でやろうとする		利発	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	756	214	909	61	929	41	953	17	960	10
子どもの特徴	明るい		手がつけられない		優しい		感情の起伏が激しい		機嫌がよい	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	812	158	918	52	935	35	955	15	963	7
子どもの特徴	元気		面白い		よく泣く		好き嫌いがはっきりしている		素直	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	828	142	920	50	937	33	956	14	963	7
子どもの特徴	人見知りがない		負けん気が強い		積極的に手を出す		恥ずかしがり屋		辛抱強い	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	853	117	920	50	938	32	957	13	964	6
子どもの特徴	甘えん坊		マイペース		頑固		落ち着きがある		注意力がない	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	867	103	921	49	942	28	958	12	964	6
子どもの特徴	大人しい		腕白		可愛い		気が強い		自己中心的	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	895	75	922	48	947	23	958	12	966	4
子どもの特徴	好奇心旺盛		落ち着きがない		観察する		よく遊ぶ		清潔好き	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	896	74	923	47	943	27	958	12	968	2
子どもの特徴	人見知りがある		育てやすい		臆病		自由奔放		分かりやすい	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	904	66	924	46	947	23	959	11	968	2
子どもの特徴	自分の意志がはっきりている		短気・癇癪持ち		のんびり		よく気が付く		女の子らしい	
記述	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
n	906	64	927	43	952	18	959	11	969	1

4.養育者が記述した子どもの特徴と気質特徴との関連

4.1　調査協力者

K市が2003年6～11月にかけて実施した1歳6ヶ月児健診対象者2,322名のうち，受診者は1,948名であり，質問紙回収者1,550名（回収率66.8％）を対象とした。回答者は1,514名（97.7％）が母親であった。対象幼児の年齢は17～22ヶ月，平均18.2ヶ月（*SD*=.7），性別は男児789名（50.9％），女児743名（47.9％），不明18名（1.2％）であった。

4.2　調査方法

調査手続きについては，2.2と同様であった。有効回答者数は1,349名であった。

4.3　質問紙

自由記述で得られた45の幼児の特徴について，件数が多く，かつ，子どもの特徴として理解しやすい内容であることを基準に，心理学を専門とする大学教員3名，心理学専攻の大学院生1名が協議し，25の特徴を選択した。これらの25の特徴について，自身の子どもに該当するか否か，回答を求めた。対象幼児の生年月日，年齢，性別，対象幼児と記入者の関係を記入する欄を設けた。さらに，調査2で作成された6尺度47項目から成る気質質問紙を用いた。回答形式は，調査2と同様，1.“全くない”から4.“いつもある”の頻度による4段階とした。

4.4　分析方法

25の子どもの個々の特徴について，該当するとした群（以下，該当群）と該当しないとした群（以下，非該当群）で，各尺度平均得点の差について*t*検定をおこなった。

5　結果と考察

結果をTable 7に示した。

Table 7 各特徴の該当群・非該当群との気質尺度得点の差

幼児の特徴	該当・非該当	*n*	下位尺度名																							
			否定的感情反応				外向性				順応性				神経質				規則性				注意の転導性			
			平均値	標準偏差	*t*値	有意性	平均値	標準偏差	*t*値	有意性	平均値	標準偏差	*t*値	有意性	平均値	標準偏差	*t*値	有意性	平均値	標準偏差	*t*値	有意性	平均値	標準偏差	*t*値	有意性
活発	該当	926	2.4	.50	.58		3.3	.34	12.68	**	2.5	.55	−6.85	**	2.3	.41	.99		3.1	.48	1.53		3.2	.37	.64	
	非該当	423	2.4	.53			3.0	.41			2.8	.56			2.2	.42			3.0	.47			3.2	.36		
好奇心旺盛	該当	980	2.4	.50	−.05		3.3	.35	10.63	**	2.5	.56	−6.24	**	2.2	.41	−.19		3.1	.48	.45		3.2	.36	1.48	
	非該当	369	2.4	.52			3.1	.42			2.8	.54			2.3	.41			3.1	.47			3.1	.38		
甘えん坊	該当	786	2.4	.51	5.08	**	3.2	.39	−1.89		2.7	.55	4.68	**	2.2	.40	−.93		3.1	.48	−.90		3.2	.37	.31	
	非該当	563	2.3	.48			3.3	.38			2.5	.56			2.3	.42			3.1	.48			3.2	.37		
気が強い	該当	542	2.5	.48	6.61	**	3.3	.36	4.32	**	2.6	.55	−.35		2.3	.41	1.16		3.1	.49	−.45		3.2	.37	.79	
	非該当	807	2.3	.51			3.2	.39			2.6	.57			2.2	.41			3.1	.47			3.2	.37		
短気	該当	296	2.7	.47	12.23	**	3.3	.40	3.20	**	2.6	.56	−.79		2.2	.42	−3.86	**	3.0	.50	−3.15	**	3.2	.38	1.48	
	非該当	1053	2.3	.48			3.2	.38			2.6	.56			2.3	.40			3.1	.47			3.2	.36		
感情の起伏が激しい	該当	242	2.8	.42	15.51	**	3.3	.42	1.70		2.6	.55	.44		2.1	.41	−4.86	**	2.9	.49	−4.71	**	3.2	.39	−.31	
	非該当	1107	2.3	.48			3.2	.38			2.6	.57			2.3	.41			3.1	.47			3.2	.37		
わがまま	該当	329	2.6	.47	11.18	**	3.3	.41	1.65		2.6	.59	.73		2.1	.42	−5.59	**	2.9	.50	−5.74	**	3.1	.38	−.88	
	非該当	1020	2.3	.49			3.2	.38			2.6	.55			2.3	.40			3.1	.46			3.2	.36		
好き嫌いがはっきり	該当	461	2.5	.51	4.78	**	3.3	.38	1.20		2.7	.55	3.29	**	2.3	.42	.83		3.0	.49	−1.33		3.2	.38	−.25	
	非該当	888	2.3	.49			3.2	.39			2.6	.57			2.2	.41			3.1	.47			3.2	.36		
よく泣く	該当	313	2.7	.47	12.82	**	3.2	.41	−1.52		2.7	.59	3.82	**	2.1	.40	−5.60	**	3.0	.51	−3.71	**	3.2	.37	.64	
	非該当	1036	2.3	.48			3.3	.38			2.6	.55			2.3	.41			3.1	.47			3.2	.37		
頑固	該当	407	2.5	.47	8.80	**	3.3	.39	.79		2.6	.54	1.06		2.2	.42	−1.48		3.0	.48	−2.68	**	3.2	.37	−.62	
	非該当	942	2.3	.45			3.2	.38			2.6	.57			2.3	.41			3.1	.48			3.2	.37		

積極的	該当	378	2.4	.51	-.08		3.4	.33	10.60	**	2.4	.55	-7.77	**	2.3	.42	1.92		3.1	.50	-.28		3.2	.37	2.43	*
	非該当	971	2.4	.50			3.2	.39			2.7	.55			2.2	.41			3.1	.47			3.1	.37		
明るい	該当	778	2.3	.50	-3.24	**	3.3	.35	9.76	**	2.5	.56	-5.83	**	2.3	.41	4.05	**	3.1	.48	3.07	**	3.2	.36	4.94	*
	非該当	571	2.4	.50			3.1	.40			2.7	.55			2.2	.40			3.0	.48			3.1	.37		
のんびり	該当	107	2.2	.58	-3.80	**	3.0	.39	-6.44	**	2.8	.53	3.96	**	2.3	.40	.12		3.1	.50	.52		3.1	.39	-1.15	
	非該当	1242	2.4	.50			3.3	.38			2.6	.56			2.2	.41			3.1	.48			3.2	.37		
大人しい	該当	81	2.2	.51	-2.44	*	2.9	.44	-7.44	**	2.9	.57	5.01	**	2.4	.45	3.14	*	3.0	.50	-.51		3.2	.41	1.51	
	非該当	1268	2.4	.50			3.3	.37			2.6	.56			2.2	.41			3.1	.48			3.2	.36		
優しい	該当	311	2.2	.52	-4.55	**	3.3	.37	1.89		2.6	.57	.41		2.4	.39	8.94	**	3.1	.44	1.68		3.2	.37	3.11	**
	非該当	1038	2.4	.50			3.2	.39			2.6	.56			2.2	.40			3.1	.49			3.1	.37		
育てやすい	該当	467	2.1	.47	-11.86	**	3.2	.39	-.19		2.6	.56	-2.18	*	2.3	.41	6.08	**	3.2	.46	6.27	**	3.2	.36	3.08	**
	非該当	882	2.5	.49			3.3	.38			2.6	.56			2.2	.40			3.0	.48			3.1	.37		
素直	該当	212	2.1	.49	-6.95	**	3.3	.39	1.78		2.6	.60	.24		2.4	.39	7.22	**	3.2	.45	5.48	**	3.2	.38	2.29	*
	非該当	1137	2.4	.50			3.2	.38			2.6	.56			2.2	.40			3.0	.48			3.2	.37		
機嫌がよい	該当	365	2.1	.49	-10.78	**	3.3	.38	2.88	**	2.5	.58	-4.74	**	2.3	.42	4.42	**	3.2	.47	5.56	**	3.2	.36	2.45	*
	非該当	984	2.4	.48			3.2	.38			2.6	.55			2.2	.40			3.0	.48			3.1	.37		
人見知りがない	該当	403	2.3	.50	-2.15	*	3.4	.35	7.60	**	2.1	.44	-23.94	**	2.2	.40	-1.89		3.0	.49	-1.34		3.2	.36	-.12	
	非該当	946	2.4	.51			3.2	.39			2.8	.48			2.3	.41			3.1	.48			3.2	.37		
マイペース	該当	446	2.3	.48	-1.84		3.2	.38	-2.78	*	2.6	.57	-1.05		2.2	.41	-1.90		3.1	.48	-0.09		3.1	.36	-1.51	
	非該当	903	2.4	.52			3.3	.39			2.6	.56			2.3	.41			3.1	.48			3.2	.37		
落ち着きがない	該当	245	2.6	.53	7.16	**	3.4	.34	8.41	**	2.5	.61	-4.28	**	2.2	.41	-3.96	**	2.9	.49	-4.67	**	3.2	.35	3.16	**
	非該当	1104	2.3	.49			3.2	.38			2.6	.55			2.3	.41			3.1	.47			3.1	.37		
よく気が付く	該当	277	2.3	.55	-.43		3.3	.36	2.85	**	2.7	.57	1.63		2.4	.41	6.31	**	3.1	.49	.25		3.2	.36	3.32	**
	非該当	1072	2.4	.49			3.2	.39			2.6	.56			2.2	.40			3.1	.48			3.1	.37		
臆病	該当	187	2.5	.50	3.46	**	3.1	.42	-5.04	**	2.8	.56	5.13	**	2.2	.41	-2.28	*	3.0	.43	-1.09		3.2	.40	.52	
	非該当	1162	2.3	.50			3.3	.37			2.6	.56			2.3	.41			3.1	.49			3.2	.36		
辛抱強い	該当	104	2.3	.48	-1.25		3.3	.44	.44		2.6	.58	-.18		2.4	.44	2.78	**	3.2	.49	3.05	**	3.2	.38	.46	
	非該当	1245	2.4	.51			3.2	.38			2.6	.56			2.2	.41			3.1	.48			3.2	.37		
きれい好き	該当	212	2.3	.54	-.39		3.3	.38	2.55	*	2.7	.55	2.82	*	2.5	.40	9.44	**	3.1	.51	-.73		3.3	.37	3.68	**
	非該当	1137	2.4	.50			3.2	.38			2.6	.56			2.2	.40			3.1	.47			3.1	.36		

** $p<.01$　* $p<.05$

否定的感情反応尺度の得点は，“短気”，“感情の起伏が激しい”，“わがまま”などに該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に高いことが確認され，“明るい”，“優しい”，“素直”などに該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に低いことが確認された。

外向性尺度の得点は，“活発”，“好奇心旺盛”，“積極的”などに該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に高いことが確認された。

順応性尺度は，得点が高いほど順応性が低いことを示している。順応性尺度の得点は，“積極的”，“人見知りがない”など，環境への慣れやすさを予測させるような特徴に該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に低いことが確認され，“好き嫌いがはっきり”，“臆病”，“よく泣く”，“甘えん坊”など環境への慣れにくさを予測させるような特徴に該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に高いことが確認された。

神経質尺度の得点は，“素直”，“よく気がつく”，“育てやすい”などに該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に高いことが確認され，“短気”，“よく泣く”，“わがまま”などに該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に低いことが確認された。

規則性尺度の得点は，“素直”，“機嫌がよい”，“育てやすい”などに該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に高いことが確認され，“よく泣く”，“わがまま”，“頑固”などに該当する場合は，該当しない場合に比べ，得点が有意に低いことが確認された。

注意の転導性尺度の得点は，“優しい”，“よく気がつく”，“落ち着きがない”などに該当する場合は，該当しない場合に比べ，有意に得点が高いことが確認された。

否定的感情反応尺度で測定された気質特徴は，養育者が記述した対応の困難さを示す子どもの特徴との関連が認められた。一方，落ち着きがないという特徴と関連性が予測される注意の転導性尺度は，落ち着きのなさだけでなく，切り替えが早く，関わりやすい特徴として記述

された。注意の転導性尺度と養育者が育てやすい特徴として記述する規則性尺度は，子どもの問題行動に結びつきにくいことが指摘されている（武井・寺崎，2005）。よって，“落ち着きのなさ”として記述されても後の問題には発展せず，専門家の介入を必要としない気質特徴と考えられる。外向性尺度は，養育者が子どもの新しいことへの積極性をどのように認知するかということを示す特徴として記述され，順応性尺度は，養育者が子どもの環境への慣れをどのように認知するかという特徴で記述されていた。神経質尺度は，養育者が子どもの情緒面の育てやすさや育てにくさについて記述することと関連がみられた。これらの 3 つの尺度が示す気質特徴は，気質尺度が示す項目内容と同一の特徴を養育者が記述すると考えられる。

以上のことから，幼児気質質問紙で測定された気質特徴が示す内容と養育者が日常の関わりを通じて認知し，記述した子どもの特徴との間の関連性から，尺度の内容的妥当性が確認できた。しかし，“落ち着きがない”“明るい”“機嫌がよい”という特徴は 6 つの気質尺度の全ての尺度と関連が認められた。よって，養育者が記述する“落ち着きがない”“明るい”“機嫌がよい”といった特徴は，気質特徴と関連性がある特徴と考えられるが，気質特徴の違いにかかわらず，本調査の対象となった 1 歳半から 2 歳前の年齢において共通して見出される特徴と考えられる。

調査 6　幼児気質質問紙と観察された幼児の行動特徴との関連

1. 問題と目的

養育者が質問紙で評価した子どもの気質特徴は，直接子どもを検査することによって個人差を評価できる Brazelton の新生児行動評価法（Brazelton & Nugent（1995　穐山監訳　1998）の結果とはあまり高い相関関

係を示さず（Hubert,Theodore, Peters-Martin & Gandour,1982),養育者と同じレベルで子どもと関わる保育士による気質評価と不一致となること（武井,2001),実験室や家庭での観察で養育者以外の第三者によって評価された子どもの気質特徴とあまり高い相関を示さないこと（Bornstein, Gaughran & Segui, 1991; Kagan et al, 1984; Matheny, Willson & Nuss, 1984; 水野, 2002）が指摘されている。これらのことから，養育者が質問紙で評価した子どもの気質は，実際の子どもの気質を忠実に反映するのではなく，養育者のバイアスがかかった子どもの気質特徴が測定されている可能性がある。しかし，気質特徴が文脈や環境の変動と関連して変化する行動特徴として表現されるということを考慮すると，妥当な結果と考えることもできる。また，相談現場で子どもの気質を扱う場合，養育者が子どもの気質をどのように認知しているかを明らかにすることが，養育者が自身の子どもに気質と調和した環境（goodness of fit）を提供できるよう，専門家が適切な支援を行うことを可能にする。しかし，子どもの気質と調和したいろいろな側面からの条件を満たした環境（goodness of fit）を子どもに提供できるよう，専門家が養育者に助言していくためには，その前提として，養育者が認知した子どもの気質特徴が実際に観察される子どものどのような行動特徴と関連があるのかを理解しておく必要がある。

そこで,調査 2 で作成された 6 尺度 47 項目から成る気質質問紙と観察された幼児の行動との関連性から，尺度の示す内容が実際の行動のどのような面に表現されるのかを明らかにすることを目的とした。

2.方法

2.1 調査協力者

川崎医療福祉大学で実施された親子教室に参加した母子 24 組である。対象幼児の年齢は質問紙実施時に平均 20.0 ヶ月（*SD*=1.6）であった。性別内訳は男児 14 名，

女児10名であった。対象幼児には親子教室の期間中に個別に新版K式発達検査を実施した。全領域での平均発達指数は98.1（SD=9.4）であり，全員に発達面での遅れはみられなかった。

2.2　調査方法

参加者には教室がはじまる1，2ヶ月前に，個別に研究目的の説明を行い，調査2で作成された6尺度47項目から成る気質質問紙を実施した。親子教室は川崎医療福祉大学臨床心理学科の集団療法室で，1回2時間程度，2004年4～10月まで月2回，計10回（以下，#1～#10）開催された。参加した母子には親子教室への継続参加を依頼し，承諾を得た。親子教室は毎回，次の内容で行われた。

(1)参加者が来室してから15分程度の自由遊び，(2)15～20分程度の体を使った集団遊びや手遊び，(3)30～40分程度の毎回異なる内容で構成された設定遊び（七夕飾り作り，小麦粉粘土など），(4)20～30分程度の持参したおやつを食べる時間，(5)母親が座談会をし，子どもは少し離れて自由に遊ぶという，同室ではあるが母子分離を目的とした自由遊びの5つの内容で構成されていた。

毎回同じ保育士1名が全体の遊びを主導し，基本的には毎回同じ大学生5,6名が補助スタッフとして参加した。教室の活動は全て，天井設置のビデオカメラおよび部屋内設置ビデオカメラの計2台で録画した。

2.3　質問紙

調査2で作成された6尺度47項目から成る気質質問紙を用いた。回答形式は，調査1と同様に，1.“全くない”から4.“いつもある”の頻度による4段階とした。

2.4　観察場面

全10回のうち#1あるいは#2（初期），#5あるいは#6（中期），#9あるいは#10（後期）の3期を対象とした。観察時間は先行研究（武井・水子・清水・寺崎，2004；水子・武井・清水・寺崎，2004）に従い5分間とし，教室に母子が来室した直後の自由遊びにおける子どもの行動を分析対象とした。初期，中期，後期のそれぞれ2回

のうち，不参加あるいは参加してもビデオに全く録画されていない場合以外は，実施時期の早い回（初期は#1，中期は#5，後期は#9）を分析の対象とした。また，分析対象の5分間で対象児の観察が困難な場合は観察時間を延長し，積算で5分間にした。

2.5　観察行動カテゴリー

行動カテゴリーとして4つの内容を設定した。1つめは物への関わりであり，室内に準備された年齢に対応した玩具（ソフト積木，ままごとセット，チェーン落としなど）に自主的に関わったか否かを評定した（以下，物への関わり）。2つめは，位置移動であり，歩く，走る，這うなど1つの地点から他の地点への移動がみられたか否かを評定した（以下，位置移動）。3つめは，母親への能動的な関わりであり，手を出して抱かれる，手をつなぐ，玩具を渡す，手をさしのべるなど，自分から能動的に接触して関わったか否かを評定した（以下，母親への関わり）。4つめは，母親以外の他者への能動的な関わりであり，3つめの行動カテゴリーの内容が母親以外の他者（保育士，学生スタッフ，他児，他児の母親）にみられたか否かを評定した（以下，他者への関わり）。これらの行動カテゴリーについて，それぞれ，初期・中期・後期に分けて評定した。

2.6　評定方法

観察時間とした5分間について，5秒間を観察単位として60単位に分割した。4つの行動カテゴリーについて，生起したか否かの1/0サンプリング法により心理学を専攻する大学生4名が評定した。無作為に選んだ1名について，観察行動カテゴリー全ての一致率を求めたところ，92.9%であった。

2.7　分析方法

行動カテゴリー各々（物への関わり，位置移動，母親への関わり，他者への関わり）における行動の生起数をカテゴリーごとに合計し，初期・中期・後期の3期とも観察された場合は180単位，2期の場合は120単位，1

期の場合は60単位を分母とする比率（%）に修正した。さらに，時期別（初期，中期，後期）に算出し，60単位を分母とする比率（%）に修正した。これらの比率と気質質問紙6尺度の得点との間のSpearmanの順位相関係数を算出した。

3．結 果

各行動カテゴリーの生起比率について，初期・中期・後期の時期別，全体の平均および標準偏差を算出した（Table 8）。

Table 8 時期別、全体の各行動カテゴリーの生起比率平均および標準偏差

行動カテゴリー(%)		初期 n=23	中期 n=22	後期 n=19	全体 n=24
物への関わり	平均値	68.6	77.2	51.4	66.4
	標準偏差	25.6	24.1	34.0	18.6
位置移動	平均値	28.3	25.4	28.7	27.6
	標準偏差	16.2	17.0	17.5	12.1
母親への関わり	平均値	6.4	6.6	11.0	7.3
	標準偏差	7.8	7.7	14.7	6.3
他者への関わり	平均値	2.0	0.8	1.5	1.4
	標準偏差	3.4	1.4	4.0	1.7

物への関わりはどの時期も50%を超え，生起比率が少ない後期でも51.4%であった。他者への関わりの出現比率は全体的に低く，中期では1%以下であった。各気質尺度と全体の各行動カテゴリーとの間の相関係数を算出した（Table 9）。

Table 9 全体の気質尺度得点と各行動カテゴリーにおける行動生起比率との間の相関表

観察された行動	気質尺度					
	否定的感情反応	神経質	順応性	外向性	規則性	注意の転導性
物への関わり	.28	−.00	−.07	−.03	.09	.08
位置移動	.12	.02	.12	.05	.00	.05
母親への関わり	.09	−.20	.46*	−.40+	.13	.19
他者への関わり	−.31	−.34+	−.35+	.14	.11	.50*

* p<.05　+ p<.10

神経質尺度と他者への関わりとの間に負の相関傾向が認められた（r=−.34，p<.10）。つまり，よく気がつき，聞き分けがよいといった気質傾向が強くなる子どもほど，他者に自分から関わっていくことが減少する可能性が示唆された。順応性尺度と母親への関わりとの間に有意な正の相関（r=.46，p<.05），他者への関わりとの間に負の相関傾向（r=−.35，p<.10）が認められた。つまり，新しい環境に慣れにくい気質傾向が強くなる子どもほど，母親に自分から関わっていくことが増加し，他者に自分から関わっていくことが減少する可能性が示唆された。外向性尺度と母親への関わりとの間に負の相関傾向が認められた（r=−.40，p<.10）。つまり積極的に周囲に関わっていく気質傾向が強くなる子どもほど，母親に自分から関わることが減少する可能性が示唆された。また，注意の転導性尺度と他者への関わりとの間に有意な正の相関が認められた（r=.50，p<.05）。つまり，注意の切り替えが早く，刺激によく気付くといった気質傾向が強くなる子どもほど，他者に自分から関わっていくことが増加することが分かった。

時期別の結果に一貫した関連性が認められるか，あるいは時期によって変化が認められるかを検討するために，時期別に各気質尺度と各行動カテゴリーとの間の相関係数を算出した（Table 10）。

Table 10 時期別の気質尺度得点と各行動カテゴリーにおける行動生起比率との間の相関表

観察された行動	期	気質尺度					
		否定的感情反応	神経質	順応性	外向性	規則性	注意の転導性
物への関わり	初期	.16	−.18	.17	−.01	−.09	.22
	中期	.28	−.45*	−.12	−.22	−.06	−.32
	後期	−.03	.28	−.02	.01	.15	.09
位置移動	初期	.09	−.00	.14	−.01	−.15	.14
	中期	−.02	.05	.32	−.08	.07	.14
	後期	.29	.06	−.04	.10	.02	−.22
母親への関わり	初期	.04	−.09	−.12	−.11	.00	.25
	中期	−.10	.05	.38+	−.23	.12	.21
	後期	.02	−.36	.32	−.18	.20	−.13
他者への関わり	初期	−.45*	−.31	−.35	.15	−.07	.37+
	中期	.02	−.14	−.12	.17	.16	.14
	後期	−.02	−.26	−.09	−.26	−.06	.23

* p<.05　+ p<.10

結果，初期・中期・後期を全体としてまとめた際に関連性が認められた神経質尺度と他者への関わりとの間，順応性尺度と他者への関わりとの間，外向性尺度と母親への関わりとの間，注意の転導性尺度と他者への関わりとの間に一貫した関連性が推測された。神経質尺度と物への関わりとの間に中期のみ負の相関（r=−.45，p<.05），注意の転導性尺度と他者への関わりとの間に初期のみ正の相関傾向が認められた（r=.37，p<.10）。また，否定的感情反応尺度と初期における他者への関わりとの間に有意な負の相関が認められたが（r=−.45，p<.05），中期および後期には関連性が認められなかった。つまり，親子教室を実施して間もないまだ慣れていない状況においては，激しく感情をあらわしたり，大泣きするような気質傾向が強い子どもほど，他者に自分から関わっていくことが減少するが，回数を重ね，慣れた状況になってくると，そのような行動の差はみられなくなった。

4．考 察

初期・中期・後期をあわせた全体で関連性が確認された，神経質尺度と他者への関わり，順応性尺度と他者への関わり，外向性尺度と母親への関わりは，初期・中期・後期の時期ごとの分析では関連性は確認できなかった。これは，全ての参加者が継続的に参加することが困難であったために分析に用いられた対象数が十分でなかったことだけでなく，時期別といった限定された場面のみでは関連性をみいだすことが困難な場合も，観察場面数を増やす，すなわちサンプリング数を増やすことで，安定した結果を得ることができるためと考えられた。

今回の結果で確認された順応性尺度と母親への関わりとの間の関連性は，#1～#3のおやつのあと5分間という今回とは異なる観察場面を分析した水子他の報告（2004）でも同様の結果が得られている。観察評定で得られた結果は，限定的な場面における一定の方法によるため，その時点での個体内の環境状態が直接反映されやすく，養

育者が日々の日常生活の経験で評価する特徴とは内容が異なると指摘されている（上村，1992）。つまり，観察評定で得られた結果と，質問紙上で評価された気質評価とでは，その手法の違いから，得られる内容が異なり，一定の関係を見いだしにくいと考えられる。場面や状況が異なっても関連性が確認された順応性尺度と母親への関わりとの間の関連性は，個体内の要因はもちろん，個体外の要因，つまり環境からの関わりなどがあっても，影響を受けず，一貫した関連性がみられると考えられた。

一方，先行研究（武井他，2004；水子他，2004）で確認された規則性尺度と母親への関わり，規則性尺度と玩具への関わり，神経質尺度と母親への関わりとの間の関連性は，今回の結果では認められず，神経質尺度と物への関わりとの間に中期のみ関連性が認められた。また，時期別の気質尺度と行動カテゴリーの間の特徴的な変化では，初期の否定的感情反応尺度と他者への関わりの間にのみ関連性がみられ，中期および後期には認められなかった。つまり，激しく感情をあらわしたり，大泣きするような気質傾向が強い子どもは，初期という場面に慣れていない状況でのみ他者に自分から関わっていくことが少ないと考えられた。これらのことは，サンプリング数を増やすことで安定性のある結果か否かを確認していく必要がある。

水野（2002）は，Ainsworth の Strange Situation Procedure に即した実験観察場面を設定して個別に実施し，行動抑制傾向と母親に対する行動とは直接関連がみられないと指摘している。行動抑制傾向は，内容から検討すると，順応性尺度で評価される気質特徴と対応する。今回の結果では，順応性が低い，つまり新しい環境に慣れにくい子どもは，母親から離れようとしない行動を示す結果が得られ，水野の報告（2002）と異なる結果となった。水野（2002）は自身の結果について，強いストレス状態におかれた後の乳児が母親に対して示すコミュニケーションスタイルは，行動抑制傾向といった個人的特

性に影響されない関係性の質であると考察している。本研究での観察場面は，水野（2002）と異なり，個別ではなく複数の母子が参加した場面であり，操作的な実験場面ではなく，自由に遊ぶ親子教室といったストレス状況のない自然観察場面であった。つまり，より自然な母子の交流を観察することができたことで，水野（2002）の結果と異なる結果が得られたと考えられる。先行研究（水子他，2004）同様，今回の結果でも順応性尺度と母親への関わりについては関連性が見いだされたが，観察場面を多様にすることでさらに検討を進めていく必要があるであろう。

幼児気質質問紙の尺度と観察された行動カテゴリーとの間に一定の関係を見いだすことができた。気質の観察評価と母親による質問紙での評価は，単独で子どもの行動スタイルを理解するのには不十分であり，2つの方法を併用することが理解を深めると指摘されている（Karp, Serbin, Stack & Schwartzman, 2004）。本調査の結果から，母親による質問紙評価で評価される子どもの気質特徴のうち，観察評価による子どもの気質特徴との関連性が強い特徴もあったが，観察上は評価できない特徴もあることが示された。子どもに関わる母親が子どもの気質特徴に応じた環境を提供するためには，母親が日常の文脈のなかで子どもの気質特徴をどのように評価しているかということが重要である。したがって，母親による子どもの気質評価を第三者による観察による評価との関連で確認していくことで，より客観的に理解することができ，幼児気質質問紙を臨床的応用につなげるための示唆が得られる可能性があると考えられる。

第４節
幼児気質問紙簡易版の作成

調査７　幼児気質質問紙簡易版の作成

１．目的

調査２で作成された幼児気質質問紙を基に，因子的妥当性を保ちながらも，質問項目数の少ないスクリーニング用の幼児気質質問紙（以下，簡易版）を作成することを目的とした。

2．方法

調査２で作成した６尺度47項目の幼児気質質問紙を基に各尺度の項目を選定した。各尺度３項目を選定することを条件に，特定の因子に対する因子負荷量が高い項目から順に採用，内容が重複している項目を除外，因子に対する負荷量が同程度であり，かつ類似度の高い項目については，より理解しやすい内容の項目を採用という３つの基準に，心理学を専門とする教員３名で18項目を採用した。

3．結果と考察

採用された18項目に対し，抽出する因子数を６に指定し，主因子法，Promax回転による因子分析を行った。因子の出現順序は異なったが，研究１で得られた因子パターンと同じであった（Table 11）。

尺度の内的整合性を検討するため，尺度ごとにα係数を算出したところ，順応性尺度のα係数が.71であったが，その他の尺度については.45から.59の範囲であり，内的整合性は低かった（Table 11）。

Table 11 幼児気質質問紙簡易版の因子分析の結果

番号		第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	α係数
33	知らない人に遊んでもらっていても、機嫌よくしている。	.732						
36	知らない人にも、すぐに話しかける。	.589						
24	初めての人に抱かれたり、体をさわられたりすると、泣いたり、嫌がって母親にしがみついたりする。	−.700						.71
5	短気で、怒りっぽい。		.697					
58	自分の思いどおりにならないと、激しく感情を表す（泣き叫ぶ、金切り声をあげる、地団駄を踏む）。		.663					
18	一日中ぐずっている不機嫌な日がある。		.384					.59
11	他の子どもたちの遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらを見る。			.829				
10	誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。			.501				
16	電話のベルやドアのチャイムがなると、遊びをやめて音がした方を見る。			.332				.55
37	1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。				.554			
6	座って遊ぶよりも、走ったり、飛び跳ねたりする遊びの方を好む。				.545			
27	新しいことに対して好奇心が強い。				.431			.51
3	一日の中で、一番活動的になる時間帯は、ほぼ決まっている。					.549		
2	ベッド（または布団）に入ってから眠るまでの時間は、一定である。					.531		
25	夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。					.453		.52
55	服が濡れるとすぐに気づき、服をかえてもらいたがる。						.537	
26	快・不快を問わず、においに敏感である。						.450	
59	1～2度強く叱られると、同じ失敗をするのを避ける（過ちを繰り返さない）。						.387	.45

注1 a：調査2で作成した尺度を示す。1：否定的感情反応尺度、2：神経質、3：順応性、4：外向性、5：規則性、6：注意の転導性

次に，簡易版の妥当性を検討するために幼児気質質問紙の47項目から簡易版で用いた18項目を除いた29項目と簡易版の18項目について，各尺度得点間の相関を求めたところ，.45から.70の有意な正の相関が認められた（Table 12）。

Table 12　幼児気質質問紙の47項目から簡易版で用いた18項目を除いた29項目と簡易版の18項目各尺度得点間の相関

気質尺度	否定的感情反応	神経質	順応性	外向性	規則性	注意の転導性
相関係数	.70***	.53***	.62***	.55***	.58***	.45***

***p<.001

簡易版の各尺度の内的整合性が低くなった理由として，47項目から18項目（各尺度3項目）へと大幅に項目が減少しただけでなく，出来るだけ内容が重複しないよう項目を選定したためと考えられる。しかし，幼児気質質問紙と簡易版の各気質尺度間に中程度の相関関係が認められたことから，簡易版の6尺度は幼児気質質問紙の6尺度に相当するものと考えられる。

気質尺度得点の男女別および全体での平均値，標準偏差，分布の形状の指標として歪度を算出した（Table 13）。

Table 13 幼児気質質問紙簡易版各尺度の平均値および標準偏差

	否定的感情反応		神経質**		順応性**		外向性		規則性		注意の転導性	
平均値　男(n=691)・女(n=645)	2.38	2.43	2.12	2.27	2.56	2.34	3.42	3.39	3.17	3.15	3.37	3.38
標準偏差　男・女	.61	.58	.53	.58	7.75	.70	.46	.47	.60	.59	.41	.45
平均値　全体(n=1349)	2.40		2.19		2.45		3.41		3.16		3.37	
標準偏差　全体	.59		7.56		.73		.47		.59		.43	
歪度	-.08		.02		.02		-.60		-.66		-.48	

** p<.01
性別不明 n=13

調査2と同様に，各尺度得点は個々の項目の粗点（1～4点）を合計し，平均した得点で表している。性別によって，各気質尺度得点に差がみられるか否か，t検定を行ったところ，神経質尺度については女児の方が男児より，順応性尺度については男児の方が女児より有意に得点が高かった（神経質尺度；t(1305)＝4.88，p<.01，

順応性尺度；t(1334)＝5.43，p<.01)。尺度得点の分布の形状に関しては，調査2と同様に指標として歪度を示した。否定的感情反応尺度，神経質尺度，順応性尺度については比較的正規型に近い形状を示したが，その他の尺度については得点の高い方に分布が偏る傾向が認められた。とくに外向性尺度，規則性尺度はこの傾向が著しかった。

調査8　幼児気質質問紙簡易版の因子的妥当性の検討

1.目的

調査対象サンプルを変えて質問紙調査を実施し，簡易版幼児気質質問紙の尺度の因子的妥当性と内的整合性について確認することを目的とした。

2.方法

2.1　調査協力者

幼児をもつ養育者380名である。うち，簡易版質問紙への回答が欠損値となっている場合は分析から除外したため，有効数は355名（97%）となった。質問紙回答者は345名が母親であった。対象幼児の年齢は気質質問紙回答時に平均15.3ヶ月（SD=2.4）であり，性別の内訳は男児196名（55%），女児159名（45%）であった。

2.2　調査方法

K市内の保育園に通う幼児をもつ養育者には園を通じて配布，回収した。また総合病院産婦人科で出生した養育者に，対象幼児が1歳を過ぎた頃に郵送にて質問紙を配布，回答後，郵送にて回収した。

2.3　質問紙

調査7で作成された6尺度3項目ずつ選定された18項目からなる質問紙を用いた。回答形式については，調査1と同じであった。

3.結果と考察

18の質問項目への回答に対して，因子数を6に指定し，共通性の反復推定による主因子法を用いて因子分析を行い，その後Promax法による回転を実施した。結果，抽出された6因子の全ての因子は，選定された際に同じ尺度に属していた3項目から構成され，幼児気質質問紙の6尺度のいずれかと対応していた（Table 14）。

つまり，簡易版の6尺度についての因子的妥当性が確認できた。次に，6尺度についての内的整合性を検討するため，尺度ごとにα係数を算出した。結果，幼児気質質問紙の規則性尺度，外向性尺度と注意の転導性尺度に対応する因子については，それぞれα=.49，α=.48，α=.57と低かったが，その他の順応性尺度，神経質尺度，否定的感情反応尺度に対応する各因子についてはα=.60以上であった。以上のことから，3尺度については一応の内的整合性を満たした尺度と考えられる。

簡易版の6尺度のうち，3尺度について内的整合性が低かった理由として，幼児気質質問紙の47項目から18項目（各尺度3項目）へと大幅に項目を減少させたことがあげられる。しかし，得られた6因子は，全て幼児気質質問紙の6尺度に対応した尺度の項目群で構成され，簡易版の6尺度は幼児気質質問紙の尺度の因子的妥当性を有した尺度と考えられる。

しかしながら，尺度によっては内的整合性が低く，1項目ではあったが，属する因子に対し，.30以下の因子負荷量を示していた項目もあった。幼児気質質問紙からの項目選定についてさらに検討し直し，項目数を絞りながらも，より信頼性のあるスクリーニング用の気質質問紙の作成を試みる必要がある。

Table 14 幼児気質質問紙簡易版の確認的因子分析の結果

質 問 項 目	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	α係数	a
8. 知らない人に遊んでもらっていても、機嫌がよい。	.760							3
17. 知らない人にも、すぐに話しかける。	.486							3
6. 初めての人に抱かれたり、体をさわられると、泣く、母親にしがみつく。	−.759						.83	3
2. 服が濡れるとすぐに気づき、服をかえてもらいたがる。		.699						2
5. 快・不快を問わず、においに敏感。		.685						2
7. 1～2度強く叱られると、同じ失敗をするのを避ける。		.412					.63	2
14. 短気で、怒りっぽい。			.746					1
16. 自分の思いどおりにならないと、激しく感情を表す。			.663					1
13. 一日中ぐずっている不機嫌な日がある。			.385				.60	1
3. 誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。				.704				6
12. 他の子どもたちの遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらを見る。				.537				6
1. 電話のベルやドアのチャイムがなると、遊びをやめて音がした方を見る。				.473			.57	6
15. ベッド（または布団）に入ってから眠るまでの時間は、一定。					.566			5
4. 一日の中で、一番活動的になる時間帯は、ほぼ決まっている。					.523			5
9. 夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。					.383		.49	5
18. 座って遊ぶよりも、走ったり、飛び跳ねたりする遊びが好き。						.773		4
10. 1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好き。						.332		4
11. 新しいことに好奇心が強い。						.247	.48	4

注1 項目内容は簡略化した。

注2 a：調査2で作成した尺度を示す。1：否定的感情反応尺度、2：神経質、3：順応性、4：外向性、5：規則性、6：注意の転導性

調査 9　幼児気質質問紙簡易版の信頼性および妥当性の検討

1．目的

簡易版の 6 尺度についての信頼性を検討すること，幼児気質質問紙の 6 尺度と簡易版の 6 尺度との関連から簡易版のテスト妥当性について確認することを目的とした。

2．方法

2.1　調査協力者

幼児をもつ養育者 104 名である。尺度の質問項目への回答が欠損値となっている場合は分析から除外したため，幼児気質質問紙を 2 回実施した養育者が 80 名，簡易版を 2 回実施した養育者が 84 名，幼児気質質問紙と簡易版を実施した養育者が 82 名であった。対象幼児の年齢は，幼児気質質問紙の 1 回目を実施した時点で平均 19.8 ヶ月（SD=1.8）であり，性別の内訳は男児 47 名（45%），女児 41 名（39%），不明 16 名（15%）であった。

2.2　調査方法

川崎医療福祉大学で実施された親子教室に参加した幼児の養育者とＫ市内の保育園に通う幼児の養育者に対し，対象幼児が 18 ヶ月を過ぎた頃に質問紙を配布した。1 名の養育者に対し，幼児気質質問紙を 2 回，簡易版を 2 回，計 4 回実施した。幼児気質質問紙と簡易版を配布する順序についてはカウンターバランスをし，4 回の質問紙を配布する間隔はそれぞれ 1～2 週間とした。

2.3　質問紙

調査 2 で作成された幼児気質質問紙と調査 7 で作成された簡易版を用いた。回答形式については，調査 1 と同じであった。

3．結果と考察

簡易版の幼児気質質問紙の再検査信頼性を検討するために，質問紙の6尺度について尺度ごとの相関係数を求めた（Table 15）。

Table 15 幼児気質質問紙簡易版の再検査信頼性およびテスト妥当性

質問紙＼気質尺度	否定的感情反応	神経質	順応性	外向性	規則性	注意の転導性
簡易版(n=84)	.65***	.73***	.78***	.64***	.63***	.74***
標準版・簡易版(n=82)	.66***	.62***	.64***	.64***	.63***	.39***

***p<.001

結果，6尺度全てについて.63から.78の範囲で比較的強い有意な正の相関が認められた。これらのことから，簡易版の6尺度の再検査信頼性が確認できた。また，簡易版の6尺度の妥当性を検討するため幼児気質質問紙の6尺度と簡易版の6尺度間の相関係数を求めた。その結果，6尺度全てについて.39から.66の範囲で有意な正の相関が認められた。注意の転導性尺度が.39であったが，その他の5尺度は，.62～.66と比較的強い相関が認められた。簡易版の妥当性を検討するときに幼児気質質問紙と簡易版は同時に実施されているのではなく，1つの質問紙が実施されて1～2週間後に実施されている。その意味ではこれらの係数の値は，注意の転導性尺度を除き，各尺度の再検査信頼性係数の値とほぼ近似していると考えられる。

第5節
幼児気質質問紙短縮版の作成

調査10　幼児気質質問紙短縮版の作成

1．問題と目的

調査2で作成された幼児気質質問紙をもとに，調査7で6尺度18項目の簡易版を作成した。作成された簡易版

は，一応の信頼性が確認されたが，内的整合性については低いことが明らかとなった。そこで，簡易版よりも項目数を増やし，内的整合性を高めた幼児気質質問紙短縮版（以下，短縮版）を作成し，信頼性および妥当性を確認することを目的とした。

2. 方法

調査2で作成した6尺度47項目の幼児気質質問紙の作成の際の因子分析の結果をもとに，特定の因子に対する因子負荷量が高い項目から順に採用，内容が重複している項目を除外，因子に対する負荷量が同程度であり，かつ類似度の高い項目については，より理解しやすい内容の項目を採用という3つの基準で各尺度について4項目ずつ選定した。

3. 結果と考察

選定された24の質問項目への回答に対して，因子数を6に指定し，共通性の反復推定による主因子法を用いて，Promax回転による因子分析を実施した。結果，抽出された6因子の全ての因子は，因子の出現順序は幼児気質質問紙の場合と異なっていたが，幼児気質質問紙の6尺度のいずれかと対応していた（Table 16）。つまり，今回作成された短縮版の6尺度についての因子的妥当性が確認できたと考えられる。

次に，6尺度についての内的整合性を検討するため，尺度ごとにα係数を算出した。結果，短縮版の6尺度は，α=.54からα=.77の内的整合性を示していた。同じサンプルの結果をもとに作成された簡易版の尺度と比較すると，注意の転導性尺度のみ，α=.55からα=.54と低下したが，それ以外の5つの尺度については，全て内的整合性は高くなっていた。以上のことから，簡易版の尺度と比較して短縮版の尺度は，全体として尺度の信頼性は高くなったと考えられる。

Table 16　幼児気質質問紙短縮版の因子分析の結果

a	項目内容	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	寄与率	α係数	a
2	初対面の人に体をさわられると、泣く、嫌がる。	.778								3
23	他の人がそばにいると、しがみつく。	.650								3
17	知らない人にも、すぐに話しかける。	−.573								3
1	知らない人に遊んでもらっても、機嫌よくする。	−.653						.39	.77	3
13	思いどおりにならないと、激しく感情を表す。		.677							1
14	よくさわいで、大泣きする。		.649							1
4	短気で、怒りっぽい。		.640							1
9	新しいことを覚える時、いらだつ、泣く。		.452					.31	.68	1
6	初めての場所を探索している時、活発に動き回る。			.632						4
21	座って遊ぶより、飛び跳ねたりする遊びを好む。			.607						4
8	新しいことに対して好奇心が強い。			.508						4
7	1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。			.389				.27	.62	4
19	他の子どもたちの遊んでいる声で、そちらを見る。				.720					6
20	誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。				.577					6
11	電話のベルで、遊びをやめ、音の方を見る。				.343					6
18	好きなテレビの時、呼びかけると、振り返る。				.276			.13	.54	6
22	物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。					.567				2
5	服が濡れるとすぐ気づき、服をかえてもらいたがる。					.506				2
15	1～2度強く叱られると、同じ失敗をしない。					.446				2
16	快・不快を問わず、においに敏感である。					.437		.12	.56	2
12	夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。						.599			5
10	食べている時、気をそらさず最後まで食べる。						.505			5
3	ベッドに入ってから眠るまでの時間は、一定。						.478			5
24	朝、目覚める時刻は、毎日大体同じである。						.443	.09	.57	5

注1　項目内容は簡略化した

注2　寄与率は共通性の反復推定前のものを示す。

注3　a：調査2で作成した尺度を示す。1：否定的感情反応尺度、2：神経質、3：順応性、4：外向性、5：規則性、6：注意の転導性

調査 11　幼児気質質問紙短縮版の信頼性および妥当性の検討

1. 目的

短縮版の 6 尺度についての因子的妥当性，再検査信頼性，幼児気質質問紙の 6 尺度と短縮版の 6 尺度との関連から妥当性について確認することを目的とした。

2. 方法

2.1　調査協力者

幼児をもつ養育者 393 名である。対象幼児の年齢は平均 22.5 ヶ月（SD=3.3）であり，性別の内訳は男児 181 名（46%），女児 207 名（53%），不明 5 名（1%）であった。尺度の質問項目への回答が欠損値となっている場合および 2 回目の短縮版への記入が 2 週間前後（14±3 日）の間隔となっていなかった場合は分析から除外したため，短縮版の分析対象者は 223 名となった。一方，幼児気質質問紙と短縮版の分析対象者は，尺度の質問項目への回答が欠損値となっている場合にのみ分析から除外したため，348 名であった。

2.2　調査方法

総合病院産婦人科で出産した養育者に対し，対象幼児が 1 歳を過ぎた頃に郵送にて幼児気質質問紙と短縮版の質問紙（短縮版は 2 部）を郵送にて送付，回収した。短縮版への 2 回目の記入は，1 回目の記入後，2 週間後に行うよう求めた。

2.3　質問紙

調査 2 で作成された幼児気質質問紙と調査 10 で作成された短縮版を用いた。回答形式については，調査 1 と同じであった。

3. 結果と考察

24 の質問項目への回答に対して，因子数を 6 に指定し，共通性の反復推定による主因子法を用いて因子分析を行

い，その後 Promax 法による回転を実施した。結果，抽出された 6 因子の全ての因子は，選定された際に同じ尺度に属していた 4 項目から構成され，幼児気質質問紙の 6 尺度のいずれかと対応していた（Table 17）。

つまり，簡易版の 6 尺度についての因子的妥当性が確認できたと考えられる。次に，6 尺度についての内的整合性を検討するため，尺度ごとに α 係数を算出した。結果，α =.57～.81 であった。簡易版と比較すると，神経質尺度のみ α =.63 から α =.57 と低下したが，それ以外の 5 つの尺度については，全て内的整合性は高くなっていた。以上のことから，一応の内的整合性を満たした尺度が作成された。

Table 17　気質質問紙（短縮版）確認的因子分析の結果

a	項目内容	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	α係数	a
14	よくさわいで、大泣きする。	.767							1
13	思いどおりにならないと、激しく感情を表す。	.755							1
4	短気で、怒りっぽい。	.746							1
9	新しいことを覚える時、いらだつ、泣く。	.478					.245	.79	1
2	初対面の人に体をさわられると、泣く、嫌がる。		.802						3
1	知らない人に遊んでもらっても、機嫌よくする。		.676						3
23	他の人がそばにいると、しがみつく。		.668						3
17	知らない人にも、すぐに話しかける。		.619			−.285		.81	3
19	他の子どもたちの遊んでいる声で、そちらを見る。			.689					6
20	誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。			.596					6
18	好きなテレビの時、呼びかけると、振り返る。			.530					6
11	電話のベルで、遊びをやめ、音の方を見る。			.454				.68	6
3	ベッドに入ってから眠るまでの時間は、一定。				.673				5
12	夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。				.647				5
24	朝、目覚める時刻は、毎日大体同じである。				.602				5
10	食べている時、気をそらさず最後まで食べる。	−.204			.404			.69	5
6	初めての場所を探索している時、活発に動き回る。					.642			4
21	座って遊ぶより、飛び跳ねたりする遊びを好む。					.605			4
7	1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。					.473			4
8	新しいことに対して好奇心が強い。					.450		.66	4
5	服が濡れるとすぐ気づき、服をかえてもらいたがる。						.551		2
16	快・不快を問わず、においに敏感である。						.477		2
22	物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。						.462		2
15	１～２度強く叱られると、同じ失敗をしない。						.460	.57	2

注１　項目内容は簡略化した

注２　a：調査2で作成した尺度を示す。１：否定的感情反応尺度、２：神経質、３：順応性、４：外向性、５：規則性、６：注意の転導性

短縮版の6尺度について，再検査信頼性を確認するために2週間前後の間隔で実施した短縮版の各尺度得点間での相関係数，妥当性を確認するために短縮版と幼児気質質問紙の各尺度得点間の相関係数を求めた（Table 18）。

再検査信頼性については，6尺度全てについて.67～.83の範囲で有意な比較的強い正の相関が認められた。再検査信頼性において，簡易版と比較すると，注意の転導性尺度については若干低くなっていたが，他の5尺度においては，全て高い値を示していた。以上のことから，短縮版は簡易版よりも信頼性の高い尺度になった。

さらに，幼児気質質問紙の6尺度と短縮版の6尺度との関連から妥当性を確認したところ，6尺度全てについて.76～.89の範囲で有意な強い正の相関が認められた。簡易版と比較すると，短縮版の方が相関係数の値は高く，とくに，注意の転導性尺度については，簡易版が.39であったのに対し，短縮版は.76と高くなっていた。以上のことから，短縮版の尺度は，簡易版より信頼性および妥当性の高い尺度になった。

短縮版は幼児気質質問紙と比較し，項目数が47項目から24項目へと大幅に減少し，簡易版と比較すると，6項目の増加にとどまっている。信頼性および妥当性が高いことから，短時間で子どもの状態を評価する必要のある臨床現場においては，有効に活用可能な尺度が作成されたと考えられる。

Table 18 各気質質問紙の平均値（標準偏差）と，短縮版の再検査信頼性および短縮版のテスト妥当性

	内的整合性（α係数）	1回目短縮版（n=348）平均値（標準偏差）	2回目短縮版（n=223）平均値（標準偏差）	幼児気質質問紙（n=348）平均値（標準偏差）	相関係数	
					再検査信頼性	テスト妥当性
順応性	.81	2.66（.74）	2.66（.67）	2.65（.66）	.83***	.89***
否定的感情反応	.79	2.50（.63）	2.65（.60）	2.52（.49）	.79***	.86***
外向性	.66	3.27（.49）	3.30（.49）	3.26（.38）	.76***	.79***
注意の転導性	.68	3.33（.43）	3.32（.40）	3.28（.33）	.67***	.76***
神経質	.57	2.33（.58）	2.43（.50）	2.49（.41）	.77***	.77***
規則性	.69	2.95（.57）	2.99（.52）	3.09（.48）	.75***	.85***

***p＜.001

第６節
本章の総合考察

第２章では，幼児の気質を評価することが可能な気質質問紙の作成を目的に６つの基本方針を設定し，調査を実施した。まず，幼児の気質特徴を示すと考えられる内容を幅広く評価することができるように質問項目を収集し，NYLSによって導きだされた９つの特徴に対応させ，項目内容が日常の育児場面を反映するなど具体的であり，かつ回答者が理解しやすい項目であるということを基準に，質問紙作成のための項目を選定した。質問紙の内容面に関しては，予備調査で回答者にとって馴染んだ内容であるか，年齢的に適切であるかについて検討を行った結果，一部の項目を除き，とくに問題はないと判断された。また，質問紙の形式面では，項目数がTTSの97項目に対して47項目にまで減じ，回答に要する時間は５分程度に短縮された。

さらに，調査１でNYLSの９つの気質特徴に対応する９因子の抽出を試みたが，９因子構造を確認することは出来なかった。そこで，調査２と調査３での因子分析の結果より確認された６因子構造より，否定的感情反応尺度，神経質尺度，順応性尺度，外向性尺度，規則性尺度，注意の転導性尺度の６尺度から成る幼児気質質問紙が作成された。この６尺度のうち，NYLSの９つの気質特徴に対応していたのは，規則性尺度と注意の転導性尺度の２尺度のみであった。規則性尺度に対応する因子は，幼児期の気質構造を分析した研究（栗山，2000；菅原・島・戸田・佐藤・北村，1994）だけでなく，乳児期の気質構造を分析した研究（Sanson et al.，1987；菅原他，1988）でも確認されている。また，一部項目が欠落しているものの，注意の転導性尺度に対応する因子も報告されている（菅原他，1994）。以上のことから，NYLSで報告された“周期性”と“気の散りやすさ”は，安定して抽出できる再現性の高い気質因子であると考えられる。

9つの特徴に対応する因子が同定できなかった理由の1つとして，NYLSの9つの気質特徴のいくつかは互いに独立していないことが考えられる。本研究において作成した順応性尺度はNYLSの“接近・回避”と“順応性”に属する項目から構成され，否定的感情反応尺度はNYLSの“気分の質”と“反応の強度”に属する項目から構成されていた。乳児期の気質について扱った研究においても，“接近・回避”と“順応性”は1つの因子に収束することが指摘されている（Sanson et al., 1987）。一方，“気分の質”と“反応の強度”の関連性については先行研究では指摘されてはいない。しかし，新しい環境に慣れやすいことと積極的に新しい環境に近づくことが関連していることや，否定的な気分の質は強い反応を伴っていることが多いことは経験的にも推測できる。よって，これらの尺度については，NYLSの9つの気質特徴の複数の次元が1つの特性次元に収束したと考えられる。

また，9つの特徴に対応する因子が確認できなかった他の理由として，より高次な特性次元が同定された可能性が考えられる。今回作成された幼児気質質問紙では神経質尺度と外向性尺度が新たに作成されたが，これらの尺度はNYLSの複数の次元に属する項目を含んでおり，単に複数の次元がそのまま合成されたものとは考えにくい。神経質尺度はNYLSの”順応性”,”反応の閾値”,”注意の範囲と持続性”からの項目で構成されているが，刺激変化に対して敏感であり，周囲からの働きかけに対して気を配り，要求に対して従おうとする新たな特性として解釈した。また，外向性尺度はNYLSの”活動水準”,”気分の質”,”注意の範囲の持続性”の項目から構成されているが，活動的であることやポジティブな気分の質を特徴とし，さらに好奇心の強さや社交的な特徴を伴った新たな特性として解釈した。しかし，これら2因子の構成概念的妥当性に関しては，今後，検討していく必要があろう。

順応性尺度は，栗山（2000）の“環境馴化”や菅原他

(1994)の“見知らぬ人・場所への恐れ”の各因子に内容的に類似していた。この因子の内容は，行動抑制性（behavioral inhibition）（Kagan et al, 1984）の概念に近いと指摘されている（菅原他，1994)。行動抑制性は心拍数などの生理的レベルでの個人差と対応していることに加え，乳児期から成人期まで連続性のある安定した特徴として注目されている。よって，本研究で独立した１つの因子として見いだされたことは意義がある。

一方，否定的感情反応尺度，神経質尺度，外向性尺度については，先行研究のなかに対応する因子は報告されていない。これら３つの尺度のうち，否定的感情反応尺度はNYLSの“気分の質”と“反応の強度”に属する項目，神経質尺度は“順応性” や“反応閾値”に属する項目から構成されている。TTSの “気分の質”,“反応の強度”,“順応性”,“反応閾値”は，発達の遅れ（麻原他，1992；麻原・井桁，1993； Tassel, 1984）や問題行動（菅原他，1999）などの子どもの発達上の問題，さらに，育児不安（上村・田島，1988；奥石，2002a；奥石，2002b）や育児ストレス（水野，1998)，不適切な関わり（麻原他，1992；麻原・井桁，1993）などの養育者の心理的問題との関連が指摘されている。よって，否定的感情反応尺度と神経質尺度は育児不安や子どもの問題行動などの臨床的問題と関連性の高い尺度と予想され，臨床現場で有効に活用されうるために，幼児気質質問紙の各尺度と臨床的問題との関連性について調査を進めていく必要がある。

6尺度についての因子的妥当性および再検査信頼性を検討したところ，否定的感情反応尺度，規則性尺度，神経質尺度，注意の転導性尺度は因子的妥当性の高い尺度であったが，順応性尺度と外向性尺度については因子の再現性は認められなかった。また，6尺度についての信頼性を検討したところ，内的整合性の低い尺度も含まれていた。しかし，先行研究において，TTSの尺度についてはα=.53から.85（Fullard, et al., 1984），α=.56から.69(菅原他，1994)の内的整合性が報告されている。

また，Slabach, et al.(1991)はα=.60以上の内的整合性は受け入れられるレベルであると指摘している。本研究においては幼児気質質問紙の尺度について，α=.65以上の結果が得られており，既存の尺度と比較し，信頼性のある尺度が作成できたと考えられる。また，再検査信頼性についても一定の基準をクリアしており，安定性のある尺度と考えられる。

調査5において，作成した幼児気質質問紙の妥当性を養育者が日常の子どもとの関わりのなかで認知した子どもの特徴との関連から確認した。養育者が日常の子どもとの関わりのなかで認知した子どもの特徴と幼児気質質問紙で評価された気質特徴とでは，気質特徴の違いにかかわらず，1歳半から2歳前の年齢において共通して見出される特徴もみられたが，養育者が記述した対応の困難さを示す子どもの特徴と関連のある気質特徴や養育者が育てやすいと記述する気質特徴などが示された。つまり，気質尺度で測定された気質特徴と養育者が記述する子どもの特徴との間には一定の関連性が見いだされた。このことより，幼児気質質問紙を構成する各尺度の妥当性を確認でき，幼児気質質問紙を用いて養育者が認知した子どもの行動特徴を評価することで，子どもの発達にとって適切な関わりが検討できるだけでなく，養育者自身の心の安定をはかる助言も可能になると考えられる。

さらに，調査6では，作成した幼児気質質問紙の妥当性を観察された実際の行動特徴との関連から確認した。観察評定で得られた子どもの行動特徴と幼児気質質問紙で評価された気質特徴とでは，場面や状況が異なっても関連性が確認された内容もあったが，その手法の違いから，得られる内容が異なり，一定の関係を見いだしにくいことが示された。このことより，幼児気質質問紙によって評価できる養育者が認知する子どもの気質特徴のなかには，観察された実際の行動を反映したものがある一方で，幼児気質質問紙は実際の行動というよりも母親が認知し，記述する特徴を反映したものと考えて，活用していく必

要がある。つまり，母親による子どもの気質評価をより有効な臨床的応用につなげるためには，質問紙上での評価とともに，実際の行動観察をはじめとする他の指標との関連性を明らかにすることで，気質に調和した環境を提供するような適切な助言が可能になるであろう。

臨床現場でスクリーニング用に使用するには項目数を減らした質問紙を作成することも必要と考えられた。そこで，項目数を減らし，簡易版の作成を試みた。調査 7 から 9 で作成した簡易版は，幼児気質質問紙の因子パターンと同じであり，幼児気質質問紙の尺度との間に中程度の相関が認められた。これらのことから，項目数が大幅に減少した簡易版はスクリーニング用として，幼児気質質問紙よりも簡便に相談現場で活用できると考えられる。しかし，項目数を大幅に減少させたことや，項目内容の重複を避けて作成したため，順応性尺度以外の尺度については内的整合性が低く，さらに再検査信頼性が尺度によっては低い値となり，十分な信頼性を備えているとはいえなかった。そこで，幼児気質質問紙より少ない項目数で，かつ簡易版よりも信頼性および妥当性の高い尺度の作成を試みた。

調査 10 と 11 で作成した短縮版は，簡易版より項目数を各尺度 1 項目ずつ増やし，全体として 6 項目増えた。しかし，短縮版は 24 項目からなる質問紙であり，幼児気質質問紙の 47 項目より大幅に減少していた。また，6 尺度についての内的整合性を検討したところ，短縮版の 6 尺度は，同じサンプルの結果をもとに作成された簡易版の尺度と比較すると，注意の転導性尺度のみ低下していたが，それ以外の 5 つの尺度については，全て内的整合性は高くなっていた。また，再検査信頼性については，簡易版と比較すると，注意の転導性尺度については若干低くなっていたが，他の 5 尺度においては，全て高い値を示していた。つまり，短縮版は簡易版よりも信頼性の高い尺度となり，スクリーニング用としてより有効に使用可能な尺度と考えられる。

以上のように，質問紙作成の6つの基本方針を満たした臨床現場で利用可能な，有益性のある幼児の気質を評価することが可能な幼児気質質問紙が作成できた。

第３章
幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と発達的問題との関連

第１節
問題と目的

発達障がい児を育てる母親は育児不安が強く（刀根，2002），極低出生体重児の発達状態と母親の不安の高さとの間には関連がみられることが明らかとなっている（齋藤・川上・前川，2000）。養育者にとって子どもの発達上の問題と行動上の問題は，育児上の困難をもたらす。加えて，なんらかの発達上の問題や行動上の問題をもつ子どもが，養育者にとって扱いにくい，育てにくい気質特徴をもつ子どもである場合，それについてなんらかの支援を得られないと，養育者にとって育児はより困難になる。一方，抑うつ状態の母親に育てられた子どもは，大うつ病，注意欠陥・多動性障がいなど，なんらかの精神疾患をもつ割合が高い（菅原，1997）。このような子どもの発達上の問題は，親から子どもあるいは子どもから親への一方向的な因果関係にもとづくものではなく，発達初期から双方向に作用する（菅原，1997）。

以上のように，子どもの発達上の問題や行動上の問題は養育者の育児不安を高め，養育者の心の問題は子どもの発達上，精神上の問題をもたらす。しかし，子どもがなんらかの発達上の問題や行動上の問題を有していても，養育者が子どもの気質特徴を理解することで自身の関わりを調整し，育児上の困難さが軽減されることで子どもの発達上の問題や行動上の問題の悪化を予防するような環境が提供できるかもしれない。また，養育者になんらかの心の問題があっても，それに影響を受けて成長する子どもの気質特徴を知ることは，その後の子どもの発達上の問題を予防することにつながるかもしれない。つまり，子どもの発達上の問題と関連のある気質特徴，ある

いは子どもの行動上の問題と関連のある気質特徴を明らかにし，それを臨床場面で応用することで，子どもの発達上の問題の悪化を防ぐことにつながる可能性がある。

そこで第3章では，第2章で作成された幼児気質質問紙で評価される気質特徴と子どもの発達上の問題あるいは子どもの問題行動との関連性から，幼児気質質問紙を用いた子どもへの発達支援の可能性について検討する。

第2節

調査 12　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と乳児期までの発達的問題との関連

1.問題と目的

幼児気質質問紙で評価される子どもの気質特徴と乳児期までの発達上の問題の有無との関連性について明らかにすることを目的とした。

2　方法

2.1　調査協力者

1歳過ぎの幼児をもつ養育者584名である。回収された170部（回収率29%）について分析を行った。質問紙回答者は全員母親であり，対象幼児の年齢は平均14.5ヶ月（SD=2.0），性別の内訳は男児91名（53.5%），女児79名（46.5%）であった。

2.2　調査方法

総合病院産婦人科で出生した584名の養育者に対し，対象幼児が1歳を過ぎた頃に質問紙を郵送にて配布，回答後，郵送にて回収した。

2.3　質問紙

調査2で作成された6尺度47項目から成る幼児気質質問紙とともに，出生時体重および出生時の状況，乳児健康診査時に養育者自身が心配したことの有無や主治医からなんらかの問題を指摘されたか否かを尋ね，内容については自由記述で具体的に記述するよう求めた。

3　結果と考察

出生時および1ヶ月，3～4ヶ月，6～7ヶ月，9～10ヶ月，1歳の乳児健康診査時，回答時現在の各々の時点で，養育者自身が気にかかったことや主治医からなんらかの問題を指摘されたと記述した人を問題有群，記述しなかった人を問題無群として分類した。さらに，記述された問題は，6つの内容に分類された。各カテゴリーの人数をTable 19に示した。

Table 19　時期別にみた問題無群・問題有群の人数分布(n=170)

		出生時	1ヵ月	3－4ヵ月	6－7ヵ月	9－10ヵ月	1歳	現在
問題無群		129	146	150	149	111	130	106
問題有群		32	24	18	11	9	12	64
内容	仮死	8	0	0	0	0	0	0
	体の問題	24	22	12	7	6	9	22
	発達面	0	2	5	4	3	3	15
	くせ	0	0	0	0	0	0	7
	しつけ	0	0	1	0	0	0	14
	性格	0	0	0	0	0	0	6
記入なし(未受診を含む)		9	0	2	10	50	28	0

時期別では，現在の時点での問題を記述した人が最も多く，ついで出生時，1ヶ月の順となっていた。内容に関しては，どの時期においても「体の問題」が最も多かった。現在の時点の方が他の時期に比べて，「発達面」，「しつけ」のことが多く記述されていた。乳児期から幼児期になると，養育者の相談内容は子どもの発達上の問題となっていく（神庭・藤生，2003）。本調査でも，月齢があがるにつれ，記述される内容は，発達面やしつけなどの内容が増加していた。

出生時から回答時現在までのいづれかの時点で，養育者自身が気にかかったことや主治医からなんらかの問題を指摘されたと記述した問題有群は64名，記述しなかった問題無群は106名であった。問題有群と問題無群の2群間で，各気質尺度平均得点の差を検定した（Table 20）。

Table 20 問題無群と問題有群の各尺度得点平均およびt値

気質尺度		否定的感情反応		神経質		順応性		外向性		規則性		注意の転導性	
	n	平均値	*t*値	平均値	*t*値	平均値	*t*値	平均値	*t*値	平均値	*t*値	平均値	*t*値
問題無群	106	2.41	-1.82^{+}	2.12		2.75		3.17		3.19	2.31^{*}	3.31	
問題有群	64	2.54		2.11		2.76		3.26		3.02		3.26	

＊ $p<.05$　＋ $p<.10$

否定的感情反応尺度においては，問題有群は問題無群に比べ，統計的には有意ではないが，得点が高い傾向が認められた（$t(168)=-1.82$，$p<.10$）。すなわち，現時点までになんらかの問題が指摘された子どもは，指摘されなかった子どもに比べ，激しく感情をあらわしたり，大泣きするような気質傾向を示す可能性が示唆された。また，規則性尺度においては，問題有群は問題無群に比べ，有意に得点が低かった（$t(168)=2.31$，$p<.05$）。すなわち，なんらかの問題を指摘された子どもは，指摘されなかった子どもに比べ，食事や睡眠などの生理リズムが不規則であることが明らかになった。

以上のように，乳児期の発達期問題と，幼児期における気質傾向との間に関連があることが示された。乳児期までになんらかの発達的問題がある場合には，激しく感情をあらわしたり，大泣きするような気質傾向，食事や睡眠にリズムが安定しない気質傾向を示す可能性があることを養育者にあらかじめ伝えることは，養育者の子どもへの関わり方を工夫するきっかけを与えることになり，その後の養育者の育児不安や育児困難感を予防することになる。そしてそれが結果的に，子どもの健全な発達を支えるような環境を養育者が提供することを可能にし，子どものその後の発達上の問題や行動上の問題を予防することにつながる可能性があると考えられる。

第３節

調査13　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と幼児の問題行動との関連

1.目的

幼児気質質問紙で評価される子どもの気質特徴と幼児の問題行動，さらに発達障がいにみられる特徴との関連性について明らかにすることを目的とした。

2　方法

2.1　調査協力者

1歳6ヶ月児健診対象者500名の養育者である。うち，質問紙回収数は302部（回収率60.4%）であった。回答者は299名（99.0%）が母親であった。子どもの年齢は17ヶ月～21ヶ月で，18ヶ月が190名（62.9%）で最も多く，17ヶ月～19ヶ月を合計すると296名（98.0%）であった。性別は男児160名（53.0%），女児142名（47.0%）であった。質問紙項目への回答が1項目でも欠損の場合は分析対象より除外したため，有効数は252部であった。

2.2　調査方法

健診時に使用する問診票とともに，健診受診約1ヶ月前に郵送し，健診会場で回収した。

2.3　質問紙

調査2で作成された6尺度47項目から成る気質質問紙を用いた。回答形式は，調査1と同様に，1.“全くない”から4.“いつもある”の頻度による4段階とした。

多様な問題行動を呈する子どもの一般的臨床的評価手段としてAchenbach & Edelbrockによって開発された尺度，Child Behavior Checklist（以下，CBCL）を用いた。この尺度は，年齢に応じて3種類に分かれている。2～3歳用は発達状況や種々の習癖，心理的・身体的症状に関する項目から成っている。日本では1980年以降より注目されるようになり，日本語版の作成が進められている（中田・上林・福井・藤井・北・岡田・森岡，1999a）。今回

用いた質問紙は，反抗尺度，引きこもり尺度，攻撃尺度，分離不安尺度，不安神経質尺度，発達尺度，睡眠・食事尺度，注意集中尺度の8尺度について，中田・上林・福井・藤井・北・岡田・森岡（1999b）の因子分析の結果より因子負荷量が低い項目を省き，さらに年齢的に適当でないと考えられる内容の項目，類似した内容の項目を省いた8尺度27項目の質問紙である。回答は，1.当てはまらない～3.当てはまるの3段階評定とした。

3　結果

気質質問紙の各尺度とCBCLの各尺度との間の相関は，Table 21のとおりである。

Table 21 CBCLの各尺度と気質質問紙の各尺度との相関表

CBCL尺度(項目数) 気質尺度(項目数)	攻撃(3)	睡眠･食事(2)	注意集中(3)	発達(1)	反抗(7)	引きこもり(5)	不安神経質(3)	分離不安(3)
否定的感情反応(9)	.21**	.22**	.34**	.18**	.66**	.20**	.32**	.27**
神経質(10)	-.29**	-.26**	-.33**	-.19**	-.29**	-.12*		
順応性(6)					.22**	.17**	.23**	.45**
外向性(8)			.23**	-.15*		-.20**	-.11+	-.13*
規則性(7)		-.51**	-.22**		-.34**	-.16*	-.13*	-.15*
注意の転導性(7)						-.22**		

+ $p<.10$　* $p<.05$　** $p<.01$

気質質問紙の否定的感情反応尺度は，CBCLの尺度との間に有意な正の相関が認められ（攻撃尺度 $r=.22$，$p<.01$；睡眠・食事尺度 $r=.22$，$p<.01$；注意集中尺度 $r=.34$，$p<.01$；発達尺度 $r=.18$，$p<.01$；反抗尺度 $r=.66$，$p<.01$；引きこもり尺度 $r=.20$，$p<.01$；不安神経質尺度 $r=.32$，$p<.01$；分離不安尺度 $r=.27$，$p<.01$），否定的感情反応が高いほど，様々な問題行動を呈しやすいことが示された。とくに「癇癪を起こす」「よくすねる」「頑固である」などが含まれる反抗尺度と最も高い相関がみられた（$r=.66$，$p<.01$）。

神経質尺度は，CBCLの6尺度と有意な負の相関を示し（攻撃尺度 $r=-.29$，$p<.01$；睡眠・食事尺度 $r=-.26$，$p<.01$；注意集中尺度 $r=-.33$，$p<.01$；発達尺度 $r=-.187$，

$p<.01$; 反抗尺度 $r=-.29$, $p<.01$; 引きこもり尺度 $r=-.12$, $p<.01$), 几帳面さや敏感さ, 聞き分けのよさを示す神経質傾向が高いほど,問題行動が少ない傾向が認められた。

順応性尺度（得点が高いほど順応性が低いことを意味する）は, CBCL の 4 尺度と有意な正の相関が認められた（反抗尺度 $r=.22$, $p<.01$; 引きこもり尺度 $r=.17$, $p<.01$; 不安神経質尺度 $r=.23$, $p<.01$; 分離不安尺度 $r=.45$, $p<.01$)。新しい環境や見知らぬ人への順応性が低いほど, 問題行動が多いことが示された。

外向性尺度は, CBCL の 4 尺度と有意な負の相関が認められ（発達尺度 $r=-.15$, $p<.05$; 引きこもり尺度 $r=-.20$, $p<.01$; 分離不安尺度 $r=-.13$, $p<.05$), 注意・集中尺度と有意な正の相関が認められた（注意集中尺度 $r=.23$, $p<.01$)。外向的であるほど, 引きこもりや不安傾向は低くなるが,注意・集中に問題がみられることが示された。

規則性尺度は, CBCL の 6 尺度と有意な負の相関が認められ（睡眠・食事尺度 $r=-.51$, $p<.01$; 注意集中尺度 $r=-.22$, $p<.01$; 反抗尺度 $r=-.34$, $p<.01$; 引きこもり尺度 $r=-.16$, $p<.05$; 不安神経質尺度 $r=-.13$ $p<.05$; 分離不安尺度 $r=-.15$, $p<.05$), 規則的であるほど問題行動が少ない傾向が認められた。

注意の転導性尺度は, CBCL の引きこもり尺度と有意な負の相関が認められ（引きこもり尺度 $r=-.22$, $p<.01$), 注意の切り替えが早いほど, 引きこもりという問題行動につながらないことが示された。

4 考察

気質特徴と CBCL で評価できる問題行動との間に一定の関係が認められた。

否定的感情反応尺度と問題行動との関係については,「思い通りにならないと激しく感情を表す」「よくさわいで大泣きする」などの内容を含む否定的感情反応尺度得点が高いほど, 様々な問題行動が生じやすく, なかでも「癇癪を起こす」「頑固である」に代表される反抗的な

面との関連が強かった。否定的感情反応で示される気質特徴は，幼児の様々な問題行動と関連の強い気質特徴であると考えられる。

神経質尺度と問題行動との関係については，神経質尺度の得点が高いほど，問題行動が少ない傾向が認められた。神経質尺度は，内容的には「同じ失敗を繰り返さない」「物を整えたり，きれいにしたりすることにこだわる」といった几帳面さや敏感さ，聞き分けのよさを示す項目から成り立っている。これらのことから，神経質な気質特徴は，人や状況への適応性のよさを示す可能性が示唆される。

順応性尺度と問題行動との関係については，順応性尺度の得点が高いほど，分離不安や不安傾向を示す問題行動と関連が認められた。順応性尺度は新しい状況や知らない人への慣れにくさを示す項目から成っている。このような気質は，不安が高く内向的で，親しい人となかなか離れられないといった非社会的な問題行動と関連が強いと考えられる。

外向性尺度と問題行動との関係については，外向性尺度の得点が高いほど，つまり外向的であるほど引きこもりや不安傾向など非社会的な問題行動が少ない傾向，集中することが出来なかったり，落ち着きがないといった，注意集中の欠如といった問題行動が多い傾向が示された。外向性尺度には「座って遊ぶよりも，走ったり，飛び跳ねたりする遊びの方を好む」「初めての場所を探索している時，活発に動き回る」といった，気の散りやすさや活動の多さを表している内容が含まれている。よって，集中力の問題との関係が強くなったと考えられる。

規則性尺度と問題行動との関係については，規則性尺度の得点が高いと，つまり生理リズムが規則的であるほど，様々な問題行動がみられないという結果が得られた。とくに規則的であるほど，睡眠・食事尺度の得点が低くなっていた。つまり規則的であるほど，寝付きの悪さや食事面の問題が生じにくいと考えられる。菅原他（1999）

は規則性と問題行動との関係を報告している。今回の結果を合わせて考えると，規則性尺度によって，子どもの現在および後の問題行動の予測が可能になると考えられる。

注意の転導性尺度と問題行動との関係については，引きこもり尺度をのぞいて関連が認められなかった。CBCLの注意・集中尺度との間に関連は認められなかったことから，気質尺度の注意の転導性尺度で測定される内容とCBCLの注意・集中尺度で測定される内容は異なると考えられた。つまり，気質尺度の示す内容は，注意・集中の欠如の意味ではなく，注意の切り替えが早く，１つのことにこだわらずに状況に柔軟に対応していくことと関連し，その結果，１つのことにこだわり，周囲に関心を向けにくいといったような引きこもり行動が生じにくくなると考えられる。

Thomasらの気質類型の「扱いにくい」気質タイプを分類する際に基準となる特徴は，周期性，接近性，順応性，反応強度，気分の質の5つの特徴である。本研究においても，特に否定的感情反応尺度，順応性尺度，規則性尺度は反抗的な問題行動，分離不安，不安が高いといった問題行動と関連することが示された。この様な問題行動が養育者の育児不安や育児ストレスを引き起こす可能性が示唆された。

坂野・佐藤・佐々木・久保・坂爪・土肥・市井（1995）は，自閉性障がいの診断を受けた幼児・児童と健常な幼児・児童について，CBCLの尺度得点の差異を検討した結果，自閉性障がい児では注意集中尺度と発達尺度の得点が健常児に比べ高くなることを示している。今回の結果では，これら2つの尺度得点が高いほど，気質尺度の中で，否定的感情反応尺度得点が高くなり，神経質尺度得点が低くなる傾向が認められた。よって自閉性障がいのような発達障がいを疑う場合は，否定的感情反応尺度や神経質尺度にまず注目することが重要ではないかと考えられる。

以上，幼児気質質問紙の各尺度と幼児の問題行動とのとの間に一定の関連性があることか示された。また，自閉性障がいなどの発達障がいを疑う場合に注目すべき気質尺度が明らかになった。よって，幼児の問題行動が明らかになった際には，その問題行動と関連性の強い気質特徴について養育者に伝えることが，養育者の子どもへの関わり方を工夫するきっかけを与えることになり，その後の養育者の育児不安や育児困難感を予防することになる。そしてそれが結果的に，子どもの健全な発達を支えるような環境を養育者が提供することを可能にし，子どものその後の発達上の問題や行動上の問題を予防することにつながる可能性がある。

第４節
本章の総合考察
幼児気質質問紙を用いた子どもへの発達支援の可能性

第３章では，第２章で作成された幼児気質質問紙と子どもの発達上の問題や子どもが示す問題行動との関連から，子どもの臨床的問題と関連のある幼児の気質特徴を明らかにし，作成された幼児気質質問紙を用いた子どもへの発達支援の可能性について検討した。

幼児気質質問紙で評価された気質特徴と子どもの発達上の問題との関連については，乳児期までになんらかの問題がある場合には，幼児期に激しく感情をあらわしたり，大泣きするような気質傾向，食事や睡眠リズムが安定しない気質傾向を示すようになることが示された。また，幼児気質質問紙で評価された気質特徴と子どもが示す問題行動との関連では，自閉性障がいなどの発達障がいの子どもにみられる問題行動の特徴と関連する気質特徴だけでなく，それ以外の問題行動の特徴と関連する気質特徴が示された。一方で，問題行動と関連の認められない気質特徴があることも示された。

養育者に子どもの発達上の問題や行動上の問題と関連のある気質特徴をあらかじめ伝えることは，養育者の子どもへの関わり方を工夫するきっかけを与えることになり，その後の養育者の育児不安や育児困難感を予防することになる。つまり，子どもの気質特徴を評価することで，問題行動の悪化を防ぐような関わりや環境調整が可能となり，結果的に養育者が子どもの発達にとって適合のよい（goodness of fit）環境を提供することが可能になるのではないかと考えられる。

子どもの発達上の問題や行動上の問題は，それが治療できない場合や養育者の関わりのみでは変容させることが困難な場合，養育者は解決策が見いだせず，子どもの発達上の問題や行動上の問題といった特徴は育児上の負担となる可能性がとても高い。しかし，環境との相互作用によって変容する行動特徴が示す気質特徴の場合，子どもの気質特徴を養育者が知ることは，たとえ扱いにくい，育てにくい気質特徴であっても，関わり方の工夫や子どもへの適切な関わりへと調整をはかることが可能となる。子どもの気質と発達上の問題，あるいは子どもの気質と行動上の問題がどのように関連するのかを明らかにすることが，将来の子どもの問題行動の予測や母親が育児において感じるであろう困難や不安を理解していくことを可能にする。よって，発達上の問題や行動上の問題をもつ子どもを育てる養育者にとって，子どもの気質特徴を理解することは，育児上の困難を軽減することにつながり，結果的に問題行動の悪化を防ぐような関わりや環境を調整するなど，養育者が子どもの発達にとって適合のよい（goodness of fit）環境を提供することが可能になるのではないかと考えられる。

以上のことから，幼児気質質問紙を用いることで，子どもへの発達支援の臨床的応用の可能性があることが確認された。しかし，幼児気質質問紙を臨床的に応用していくためには，発達上の問題や行動上の問題と関連のある子どもの気質特徴を明らかにするだけでなく，そのよう

な気質特徴を示す子どもに対して，発達上望ましい効果をもたらす環境や具体的な育児行動の内容を提案することが必要である。

第４章
幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と養育者の育児不安との関連

第１節
問題と目的

「癇癪」や「人見知り」,「激しく泣く」などの子どもの行動特徴が養育者の抑うつ重症度に影響すること（佐藤・菅原・戸田・島・北村,1994）から，このような子どもの行動特徴は養育者の育児不安や育児ストレスの程度をより強める可能性がある。対応が難しい気質の子どもは，対応が楽な気質の子どもにくらべると母親の注意を多く求めるため，母親の負担感が大きくなり，虐待されることも起こりうる。しかし，気むずかしく世話をしにくい気質と認知されても，養育者が積極的に周囲に育児支援を求めると肯定的な方向へ変化する（栗山・前川・蓮見・秦野・星・瀬戸・星・小田切・奥平・若葉・大伴・庄司，2001）。よって，子どもの健全な発達を保障し，養育者の育児上の負担感を軽減するためには，早期に幼児の気質特徴を評価し，どのような関わりや環境が子どもにとって適合のよい（goodness of fit）環境なのか積極的に養育者に助言していくことが必要である。

養育者の育児ストレスや育児不安と子どもの気質特徴との関連性については，いくつかの先行研究で指摘されている（奥石，2002a；奥石，2002b；上村，1989；水野，1998）。しかし，従来の研究では，育児不安と子どもの気質を同時期に調査し，両者の関連性を検討することにより，養育者の育児不安と関連のある気質特徴を明らかにしようとするものであった。しかし，養育者の育児不安を予防する，あるいは養育者の育児不安を低減するような相談現場での対応を明らかにするためには，子どもの気質特徴と養育者の育児不安との関連性を同時期に測り，検討するだけでは十分とはいえない。つまり，ある時期

の子どもの気質特徴が，養育者の将来の育児不安をどの程度予測するのか，すなわち，養育者の将来の育児不安に影響を及ぼす子どもの気質特徴を明らかにすることが，養育者の育児不安を引き起こす，あるいは育児不安の程度を悪化させるリスクの評価を可能にし，適切な介入の方法を示すであろう。

そこで第4章では，第2章で作成された気質質問紙で評価される気質特徴と養育者の育児不安との関連性を明らかにすることで，幼児気質質問紙を用いた養育者への育児支援の可能性について検討する。

第2節

調査14　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と養育者の育児不安（量的分析）との関連

1.問題と目的

幼児気質質問紙で評価されるどのような子どもの気質特徴が養育者の将来の育児不安に影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。

2.方法

2.1　調査協力者

1歳代の幼児をもつ養育者158名である。質問項目への回答が欠損となっている場合は分析から除外したため，有効回答者数は124名となった。回答者の属性は，124名中122名が母親であった。対象幼児の年齢は，気質質問紙回答時に平均13.9ヶ月（SD=1.2）であり，性別の内訳は男児67名（54.0%），女児57名（46.0%）であった。

2.2　調査方法

総合病院産婦人科で出産した養育者に対し，対象幼児が1歳を過ぎた頃に郵送にて幼児気質質問紙を配布，回答後，郵送にて回収した。回答が得られた対象者に郵送にて6ヶ月～1年後に育児不安質問紙を配布，回答後，郵送にて回収した。

2.3　質問紙

調査2で作成された6尺度47項目から成る幼児気質質問紙を用いた。回答形式は，調査1と同様に，1.“全くない”から4.“いつもある”の頻度による4段階とした。

育児不安については，“中核的育児不安”，“育児感情”，“育児時間”の3尺度24項目から成る質問紙（手島・原口，2003）を用いた。この質問紙は，相談現場で容易に用いることができるよう作成されており，子どもの発達過程に応じた養育者の育児ストレスや育児不安を短時間に評価できる質問項目から成っている。“中核的育児不安”は，「子育てに失敗するのではないかと思うことがある」「母としての能力に自信がない」などの項目にみられるように，自分が育児をすることに対する不安を測る尺度である。“育児感情”は，「子どもをわずらわしいと思うことがある」「子どもを育てることに負担を感じる」など，子どもあるいは子育てに対する否定的な感情を中心とした不安を測る尺度である。“育児時間”は，「自分の時間がない」「一人になれる時間がない」など，育児のために養育者が自分の行動や時間に制限を感じるといった時間に関する不安を測る尺度である。回答形式は1.“全くあてはまらない”から4.“非常にあてはまる”の4段階とした。

3.結果

気質質問紙および育児不安質問紙について，それぞれの尺度ごとに平均値および，標準偏差を求めた。気質質問紙の各尺度についての平均値と標準偏差は Table 22，育児不安質問紙の各尺度についての平均値と標準偏差は Table 23に示した。

Table 22 気質尺度得点の平均と標準偏差

気質尺度(項目数)	否定的感情反応(9)	神経質(10)	順応性(6)	外向性(8)	規則性(7)	注意の転導性(7)
平 均	2.46	2.08	2.72	3.20	3.04	3.33
標準偏差	.48	.36	.61	.40	.48	.33

Table 23 各育児不安尺度得点の平均と標準偏差

育児不安尺度(項目数)	中核的育児不安(9)	育児感情(10)	育児時間(6)
平 均	2.25	1.62	2.94
標準偏差	.54	.46	.49

幼児の気質特徴と育児不安との関連を明らかにするため，幼児の各気質尺度得点と育児不安下位尺度得点との間の相関係数を算出した（Table 24）。

Table 24 気質尺度と育児不安下位尺度の相関

	中核的育児不安	育児感情	育児時間
否定的感情反応	.29**	.27**	.20*
神経質	−.14	−.17+	−.23**
順応性	.08	.02	.14
外向性	02	−.08	.07
規則性	−.16+	−.21*	−.24**
注意の転導性	−.12	−.14	−.01

**p <.01 * p <.05 + p <.10

結果，幼児気質質問紙の“否定的感情反応”と，育児不安質問紙の全ての下位尺度，つまり，“中核的育児不安”（r=.29，p<.01），“育児感情”（r=.27，p<.01），“育児時間”（r=.20，p<.05）との間に正の相関が認められた。また，幼児気質質問紙の“神経質”と，育児不安質問紙の“育児時間”との間に負の相関が認められた（r=−.23，p<.01）。さらに，幼児気質質問紙の“規則性”と，育児不安質問紙の“育児感情”（r=−.21，p<.05）と“育児時間”（r=−.24，p<.01）との間に負の相関が認められた。

養育者の将来の育児不安に対して説明力をもつ幼児の気質特徴を明らかにするために，育児不安尺度の各下位尺度を目的変数，幼児気質質問紙の各尺度を説明変数として重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。なお，幼児気質質問紙を実施時の養育者の育児不安については測定できていなかったため，説明変数に加えることができなかった。

育児不安質問紙の“中核的育児不安”に対しては，幼児気質質問紙の“否定的感情反応”のみがモデルにくみ

いれられていた（β =.29, p<.01, 累積 R^2=.09）（Table 25）。最終モデルの R^2 値は.09で，説明率はそれほど高くないが，回帰性の有意性を検討するための分散分析の結果，F 値が 11.31で，有意確率が.001であったため，求められた回帰式には意味があると考えられた。

Table 25 中核的不安育児不安尺度を目的変数とした重回帰分析

モデル	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率	共線性の統計量 許容度	VIF
1 （定数）	1.50	.24		5.97	00		
否定的感情反応	.33	.10	.29	3.36	00	1.00	1.00

また，育児不安質問紙の“育児感情”に対しては，幼児気質質問紙の“否定的感情反応”と“注意の転導性”がモデルにくみいれられていた（“否定的感情反応” β =.27, p<.01;“注意の転導性” β =-.14, p<.10, 累積 R^2=.10）（Table 26）。最終モデルの R^2 値は.10で，説明率はそれほど高くないが，回帰性の有意性を検討するための分散分析の結果，F 値が 6.31で，有意確率が.002であったため，求められた回帰式には意味があると考えられた。

Table 26 育児感情尺度を目的変数とした重回帰分析

モデル	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率	共線性の統計量 許容度	VIF
1 （定数）	.98	.21		4.73	.00		
否定的感情反応	.26	.08	.27	3.13	.00	1.00	1.00
2 （定数）	1.65	.45		3.63	.00		
否定的感情反応	.26	.08	.27	3.16	.00	1.00	1.00
注意の転導性	-.20	.12	-.14	-1.64	.00	1.00	1.00

また，育児不安質問紙の“育児時間”に対しては，幼児気質質問紙の“規則性”,“神経質”,“外向性”,“順応性”がモデルにくみいれられていた（“規則性” β =-.19, p<.05;“神経質” β =-.20, p<.05;“外向性” β =.16, p<.10“順応性” β =.16, p<.10 累積 R^2=.13）（Table 27）。最終モデルの R^2 値は.13で，説明率はそれほど高くない

が，回帰性の有意性を検討するための分散分析の結果，F 値が 4.29 で，有意確率が .003 であったため，求められた回帰式には意味があると考えられた。

Table 27 育児時間尺度を目的変数とした重回帰分析

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	（定数）	3.68	.27		13.52	.00		
	規則性	−.24	.09	−.24	−2.75	.01	1.00	1.00
2	（定数）	4.01	.32		12.51	.00		
	規則性	−.19	.09	−.19	−2.06	.04	.91	1.10
	神経質	−.24	.13	−.17	−1.90	.06	.91	1.10
3	（定数）	3.71	.38		9.76	.00		
	規則性	−.18	.10	−.18	−2.00	.05	.90	1.11
	神経質	−.23	.12	−.17	−1.89	.06	.90	1.10
	順応性	.10	.07	.13	1.47	7.15	1.00	1.00
4	（定数）	3.10	.50		6.19	0.00		
	規則性	−.19	.10	−.19	−2.07	.04	.90	1.11
	神経質	−.28	.13	−.20	−2.22	.03	.87	1.15
	順応性	.13	.07	.16	1.83	.07	.95	1.05
	外向性	.20	.10	.16	1.82	.07	.91	1.10

“中核的育児不安”，“育児感情”，“育児時間”の 3 つの目的変数に対して，気質質問紙の気質特徴を説明変数として得られたモデルの説明率は低かった。しかし，“否定的感情反応”であらわされる気質特徴を強く示す子どもの養育者は，“中核的育児不安”や“育児感情”で示される育児不安が高いこと，“神経質”や“規則性”であらわされる気質特徴を示さない子どもの養育者は，“育児時間”で示される育児不安が高くなることが示された。

4．考 察

育児不安のなかでも“中核的育児不安”および“育児感情”については，子どもの気質の“否定的感情反応”が影響を及ぼしていた。“中核的育児不安”は，自分が育児をすることに対する不安である。一方，“育児感情”は，子どもあるいは子育てに対する否定的な感情を中心とした不安である。これらの育児不安に影響を及ぼしていた子どもの気質特徴である“否定的感情反応”は，「思い通

りにならないと激しく感情を表す」「よくさわいで大泣きする」など，育児をする上での扱いにくさを示すような内容から構成されている。このような気質特徴を示す子どもは様々な問題行動を示すことが先行研究で指摘されている（武井・寺崎，2005）。養育者は，日々の育児のなかで，子どもの様々な問題行動や扱いにくい行動に適切に対処できないために，子育てそのものに対して自信をなくし，挫折感や育児への否定的な感情が高まっていくと予想される。子どもの気質特徴と養育者の育児不安を同時期に測った先行研究でも，子どもが“否定的感情反応”であらわされる気質特徴を示すことと養育者が育児困難感や不安・抑うつ気分といった育児不安を抱くこととの関連性が指摘されている（堀・武井・寺崎，2004）。子どもの気質傾向は一過性のものではなく，変化しにくいことを考えると，このような気質特徴をもつ子どもの養育者の訴えを，できるだけ早期に専門家が受けとめていくことが，養育者の育児不安を低減していくことにつながるであろう。

一方，今回の結果から，育児不安のなかでも“育児時間”については，幼児の気質の“神経質”と“規則性”が影響を及ぼしていた。育児不安質問紙の“育児時間”は，育児のために養育者が自分の行動や時間に制限を感じるといった時間に関する不安である。この育児不安に影響を与えていた“神経質”は，几帳面さや敏感さ，聞き分けのよさを示す内容から構成され，“規則性”は，食事や睡眠のリズムが規則的かどうかという内容から構成されている。これらの気質特徴のうち，“規則性”は，子どもの気質特徴と養育者の育児不安を同時期に測った先行研究で，養育者の育児不安と関連性があることが指摘されている（堀他，2004；上村・田島，1988）。睡眠や食事のリズムが安定しない気質傾向の子どもをもつ養育者は，常に子どもに対応しないといけなくなるため，育児に費やす時間が増え，自分の行動や時間の制限を感じるといった不安が高まっていくと考えられる。よって，養

育者の育児不安を低減，予防するためには，できるだけ早期に養育者の訴えを評価したうえで，時間的な余裕のなさが中心的問題となる育児不安を抱きやすくなることを考慮し，時間の使い方や，場合によっては養育者が子どもから離れて時間的な余裕を持つことができるような環境設定を助言していくことが必要である。

また，先行研究では関連性が指摘されていなかった（堀他，2004）“神経質”でない気質傾向が，自分の行動や時間が制限されるといった養育者の将来の育児不安を高めることが，今回の結果より示された。“神経質”でない気質傾向は，几帳面さがなく，周囲の変化などに鈍感で，聞き分けがよくないことを示している。このような気質傾向をもつ子どもは，養育者が望んでいることに気づきにくく，マイペースで行動しやすいと考えられる。また，養育者の意図に反して子どもが自分本位で行動することは，養育者が子どもの行動をコントロールしたり，環境調整をしないといけなくなることにつながっていくであろう。そのため，自分の行動や時間が制限されるといった養育者の将来の育児不安を高めるのではないかと考えられる。子どもが“神経質”でない気質傾向を示した時点で，養育者の育児不安がどのような状態であるかは明らかになっていないが，養育者の将来の育児不安を予防するためには，早い段階で子どもが“神経質”であらわされる気質傾向を示さないことを評価し，時間の使い方や養育者が子どもから離れられるような環境設定を専門家が助言していくことが必要であろう。

育児不安と関連性があることが明らかになった気質特徴をもつ子どもの養育者には，可能な限り早期の段階で養育者の育児上の悩みや困難感によりそうことが必要である。以上のことから，幼児気質質問紙を用いることで，養育者への育児支援の臨床的応用の可能性があることが確認された。しかし，幼児気質質問紙を臨床的に応用していくためには，育児不安と関連のある子どもの気質特徴を明らかにするだけでなく，そのような気質特徴を示す

子どもに対して，子どもの発達にとって適合のよい（goodness of fit）環境に養育者が調整できるような日常生活上での対応の工夫，子どもの気質特徴と関連がみられた育児不安の内容を低減できるような対処方法を専門家が相談現場などで助言していくことが必要である。

第３節

調査 15　幼児気質質問紙で測定した子どもの気質と養育者の育児不安（質的分析）との関連

1.問題と目的

子どもの気質特徴と養育者の育児不安との関連性について確認した調査 14 では，“思い通りにならないと激しく感情を表す”“よくさわいで大泣きする”などの“否定的感情反応”で記述される気質特徴は育児不安を高めることが確認された。また，几帳面さや敏感さ，聞き分けのよさを示す“神経質”や食事，睡眠のリズムが規則的かどうかを示す“規則性”においては，神経質傾向が低いほど，規則的でないほど養育者の育児不安が高くなることが示された。しかし，これらの気質特徴の養育者の育児不安への影響力は必ずしも強くないことから，子どもの気質特徴と養育者の育児不安をつなぐメカニズムについてのより詳細な検討が必要性である。そこで，子どもの気質特徴と育児不安との関係について検討を加えるために，以下の三点について明らかにする。第一点として，養育者はどのような子どもの気質特徴に起因して育児不安を感じるのかを明らかにする（以下，目的 1）。第二点として，どのような状況で育児不安を感じるのかを明らかにすることにより，子どもの気質特徴がどのような状況と重なると，養育者の育児不安を生起させるのかを知る手がかりを得る（以下，目的 2）。第三点として，養育者が育児不安を感じる理由と育児不安を感じる状況

を回避する方法を問うことで，育児不安に関する養育者の認知，とくに原因帰属と対処方法を特定する（以下，目的 3）。なお，育児不安の定義は，研究者の方法論および母親の個別性のために表現内容が研究者によって一貫していないと指摘されている（恵良，1994）。よって，本調査では同様の概念として扱われている育児ストレスや育児の悩み（渡辺・石井，2005）など，子どもや育児に対する母親の不安や苛立ちなどを含める。

本調査では，養育者の日頃の育児に対する率直な考えを抽出するため，育児不安の分析で一般的に用いられる質問紙法ではなく面接法を採用した。育児不安の規定因を定量的に分析することにも意義があるが，現象をよりよく理解することを可能にするとされている質的研究法（下山，2007）を採用することにより，子どもの気質特徴と養育者の育児不安との関係について詳細に検討することができると考えられる。そこで，本調査では対象者個別に半構造化インタビューによって検討する。

2. 方法

2.1 調査協力者

1 歳を過ぎた幼児をもつ養育者 477 名を対象とした。対象者全員に対して，本調査の目的について書面で説明した。参加協力の承諾が得られた養育者は 76 名であった。このうち，あらためて口頭で調査目的および手続きを説明し，承諾が得られた 12 名（男児 6 名，女児 6 名，平均年齢 23.9 ヶ月）を調査協力者として依頼した。養育者はすべて母親であった。

2.2 調査方法

最初に，対象者に対して調査者がインタビュー内容を IC レコーダに録音することに対する許可を得た。そのうえで，半構造化インタビューを進めた。半構造化インタビューでは，まず調査者が対象者に対して，「あなたの子どもの特徴のうち，あなた自身がストレスやつらさ，育児上の不安を感じる特徴はどのような特徴ですか」（目

的 1）と問いかけた。その問いかけに対する対象者の回答を踏まえたうえで，育児上の不安に結びつく要因に関する聞き取りを進めた。聞き取りの内容は，育児不安を感じる状況について（目的 2），育児不安を感じる理由，育児不安を感じないようにするためにどのようにすればよいか（目的 3）の三点であった。所要時間は 1 名につき 1 時間程度であった。

3．結 果

IC レコーダに録音された調査者と調査協力者の会話のやりとりのうち，育児不安と関連がある子どもの気質特徴（目的 1），どのような状況で育児不安を感じやすいか（目的 2），そのように感じる理由，そのように感じないようにするためにどのようにすればよいか（目的 3）についての問いかけに対して，対象者が述べた発言を抽出し，Table 28 を作成した。

3．1　子どもの気質特徴と養育者の育児不安について（目的 1）

育児不安を感じる子どもの気質特徴を，「ない」あるいは「すぐに思いつかない」「手がかからない」とした養育者は，12 事例中 3 事例であった（事例 3，6，12）。残る 9 事例は，育児不安を感じる特徴として，「…気性が激しい」（事例 7），「癇癪がすごい…」（事例 10）といった気性の激しさや，「…髪の毛をひっぱる…」（事例 4）といった乱暴さ，「自分の思うように動かそうとする…」（事例 1），「頑固」（事例 2），「…服を着ない…」（事例 5），「言っても聞かない時とか，物を投げるんですよ…」（事例 8），「買い物行ったら走り回ったりとか，動かないとか」（事例 9）といった養育者に反抗的な特徴，「敏感というか…」（事例 11）といった過敏な特徴を報告した。

3．2　養育者が育児不安を感じる状況について（目的 2）

養育者が挙げた育児不安を感じる状況については，「…もうすごく機嫌が悪くって，…グズグズ言って…」（事例

5）や「…食べる時もあり食べないときもありだから，遊び食べとかしだしたら，…せっかく作ったのにみたいな…」（事例 12）というように，子どもの特徴や行動そのものに育児不安を感じるとした事例は12事例中2事例であった。事例5においては，「…ものすごい（子どもの）機嫌が悪くなって…，こっちも気が狂いそうになって…」しまい，その困難な状況を解決するために試みたことによって，「…余計仕事が増えて」しまうために育児不安を感じると報告し，事例12では，自分なりに考えて，子どもの特徴に応じて働きかけをするものの，「…余計に子どもも思ったように動かなくって」，そのことで，「…ちゃんとまわせていない自分にも腹がたつみたいな…」と，自身の育児に対する不安を感じていた。一方，12事例中7事例において，「…家事をしようとしていてもちょっと立ち上がったら嫌だとか…」（事例 1），「自分がちょっとしたいことが・…邪魔してきて出来ないときとか」（事例 2），「…しなくちゃいけないことがあるのに，ぐずられると…」（事例 3），「…出かけるといっても出かけないとか…」（事例 6），「…ちょっと待ってというのを聞いて欲しいのに，聞いてくれない」（事例 7），「…何時までに寝かせようと思っても，それが上手くいかないと，どんどんイライラしてきて」（事例 9），「自分で考えて…，それにそってやっぱしてくれなかったら，ちょっとイライラしたり…」（事例 11）というように，子どもの特徴が直接に育児不安を高めるのではなく，子どもの特徴によって養育者が何か予定していたことが出来なくなる状況で，育児不安を感じると報告されていた。

3.3 養育者の育児不安に関する認知，原因帰属と対処方法（目的 3）

育児不安を感じる理由については，子どもの特徴としてとらえていたのは1事例のみであった（事例 1）。12事例中 8 事例は，「私自身」（事例 2），「それはもう自分中心に考えているから…」（事例 3），「自分の置く場所が悪いとか思うんですけど…」「今はしんどいから…普段

はできることが…」（事例 5），「（原因は）自分でしょうね…」（事例 6），「自分の精神状態によって違うんですけど…」「私の（状況によるんだと）思うんです」（事例 7），「自分のせいと…」（事例 9），「自分の都合ですよね…」（事例 11），「わたしが自分を中心に考えているから…」（事例 12）というように，自分の考え方や体調に原因があるとしていた。一方，12 事例中 4 事例が，「大変な気持ちを同感して欲しいというのがあります…」（事例 8），「…パパのせい」（事例 9），「…（夫に）良い様に良い様に言われてきたけど，実際は違っていた」（事例 10），「…口で言わなくてもわかってくれるだろう…」（事例 11）というように，夫の育児への協力や精神的なサポートが得られないために育児不安が高まると報告していた。さらに，育児不安を感じる状況を回避するために，12 事例中 3 事例が，「寝ている間にすべてが終われば…」（事例 1），「私がそういうことを思ってなかったらならないと思います」（事例 3），「物事に追われていない状況」（事例 12）というように，養育者自身の対処の仕方や考え方を変えることによって，育児不安を感じる状況を回避しようとしていた。また，「連れ出してくれたときに自分の思い通りに事が運ぶのがすごいストレス解消」（事例 9）と，子どもに妨げられることなく，自身の思うように状況をコントロールできることがストレス解消になるとしていた事例もみられた。周囲からサポートを得ることについては，「…お父さんがこうちょこっと帰ってきてくれて…」（事例 2）と夫からのサポートを得ることをあげた事例もみられたが，12 事例中 7 事例において，「…外出かけんとなって。私の気分を変えようって。近所のおばちゃんたちと話したり…」（事例 2），「…友達がいるのと，ママ友がいると，しゃべったり，関わったりすることで」（事例 5），「友達とかもできるだけ一緒に遊んだりして…」（事例 6），「…よそでストレス発散…，聞いてもらってストレス発散（事例 10），「友達と遊ぶことかな…」（事例 12）と同じ子どもをもつ母親との交流や誰かに話を聞

いてもらうこと,「…趣味というか,…海に行くのが趣味で。海に行って潮風にあたって…」(事例7),「自分の好きなテレビ,ビデオとか…」(事例 11)など,何か自身が好きなことに取り組むことによって,育児不安を感じる状況を回避できることがうかがえた。

Table28 事例1～12の子どもの特徴と養育者の育児不安に関わる語りの内容

	事例1	事例2	事例3	事例4
性別	女児	女児	女児	男児
年齢	2歳3ヶ月	2歳1ヶ月	2歳3ヶ月	1歳11ヶ月
育児不安を感じる子どもの気質特徴	「自分の思うように動かそうとするというか、そういうの強いような気がします。子どもだからまあ、いいかなあと・・・。ただ、周りからは我が儘なんじゃないとか、甘やかしているんじゃないと人から言われるから、いいのかなあと」	「頑固」「頑固というか、最近。2歳になった、この1ヶ月、2ヶ月くらい、頑固というか。私は多少怒ったりするから、ちょっとしたら言うことは聞くんですけど。お父さんとか、おじいちゃんとか、おばあちゃんとか、これをして、あれをしてとか命令するんですよ」	「・・・いや、ないですね」「夜中のほ乳瓶でジュース飲んでいる。それくらい。ちょっとまた話は外れてると思うんですけど」	「やっぱりその、遊びに行って、仲良く遊んでいたのにいきなり髪の毛を引っ張りだすんです」「何をしに行くかなという時に、えって。何を思って何だろうって感じで」
育児不安を感じる状況	「たまに苛っとするのは、やっぱり家事をしようとしていても、ちょっと立ち上がったら嫌だ嫌だとか、ここに座っておいてとか寝とってとか、抱っこしてとか。でちょっと洗濯もの干すからとか言っても、抱っこしてからしてとか、抱っこしたまま干せんという感じで。ちょっと、その時にどういう状態なのか分からないけど、じっとしておかないといけなかったりとか。ぱーっと言われたら」「あ、お父さんが側にいるときに、嫌だってなっている時に、そんな嫌がっているのにやめとか、でもしなきゃでやっているのに、もういいよとか、トラウマになるからとか、かわいそうなとか。そう言っている言葉がきついというか。きつく言っているつもりはないのに、そんなに言うなとか。そう言われると、そのことに対して苛っとしているかもしれない。なんか横やりを入れられるというか」	「自分がちょっとしたいことが、家事、これはしないといけないのに、やっぱ、うまく邪魔してきて、できないとか」「体調が悪い時とか、我が儘じゃないけど、あれしてこれしてとかなったらやっぱ、してあげんといけんというのはあるけど、気持ち的にできないなというのは。できない状況とか」「いつつも気分がいい、悪い時もある。そういう時とかに、何か、ぐずぐず言ったりすると」	「やっぱり、仕方がないんですけど、しなくちゃいけないことがあるのに、ぐずられると。くらいですかね」「家事とか、あと、なんだろう、この時間までに例えば、どっか行かないといけなくて、朝準備をしているのに、お昼から準備しているのに、なんかぐずぐず、抱っこ、抱っことかって。あ～って」	「怖いもの知らずだから、何に対しても、虫とかでも、興味があるんだったら、区別がつかないじゃないですか、触っていい虫と触っちゃいけない虫、区別つかないから。「あと、道路の飛び出しですね」「生活のなかでは、とくに感じないですね。お兄ちゃんと遊んだりしているんで」

育児不安を感じる理由	「結構そっちを今、自分は今しなきゃという気持ちがある時にそう言われると、進まないし、ある程度、する時間というのがあるから、もう全然、いつでも何でもいいというだったらいいんですけど。火をつけて料理している時に抱っことかさばりついてこれると、もうちょっとやめてとかなりますね。余裕がちょっとがないというか。行かないといけない時に、嫌だ嫌だと言われると、ちょっと。思いたくないけど、Aちゃんのせいにしちゃってる」	「私自身」「私自身に何かがあって、子どもはいつもと変わらないことをしていて、ちょっとぐずぐず言ってもそれは、気分がいい時にそういう風にされても別に何ともないけど、ちょっと自分がへこんでる時とかにされると、今たぶん私が悪いから、この子はいつもと一緒なんだけど、分かってても。なんか」	「それはもう自分中心に考えているから、煩わしいと思ってしまうと思うんですよ。自分がやりたいことをしようとしているところに横から。で、この年齢なんで聞き分けないのが分かってるんですけども、分かってても、分かってても（イライラ）」「もしも、私が、出かける用がないとか、そういうことがなければ、同じことをされても、ちょっと大丈夫だと思うんですよ。そういう気持ちにはならないと思うんですよ。忙しいのにとか思ってなかったら、同じことを言われても、そこまでにはならないから」「私の気持ち次第」	「興味津々だから」
育児不安を感じないようにするためには？	「寝ている間に全てが終われば。やるべきことが終わっちゃっていて、起きている時は嫌ってあげられる時は、全然。している最中に言い出したらもうちょっとになるけど、やめてもいい状態なら、構ってあげてるので。状況がかみあげば。きっちしていていないから、ちゃっちゃっとできれば。だらしない、ずぼらなところがあるから」	「そういう時に誰か、お父さんがこうちょっと早く帰ってきてくれて、いてくれたりとか。私以外の所に行ってくれてるところがあれば、ちょっと」「その日はだんなは出張で今日は帰って来ないことが分かったりすると、今日は帰ってこないんだって思うと、家にいたらいけんなって思う、外出かけんとなって。私の気分を変えようって。近所のおばちゃんと話したりとか。距離をおけたら」「近所の小学生くらいのお姉ちゃんが遊んでくれたら。ちょっと落ち着いたらおうち入ろうかって」	「私がそういうことを思ってなかったらならないと思います」	

事例５	事例６	事例７	事例８
男児	男児	女児	男児
１歳11ヶ月	２歳０ヶ月	1歳8ヶ月	1歳8ヶ月
「そう言われたら、歯磨きもできるようになったから、変わってきたのかな」「困った・・・、服を着ないことがあったり。着替えるのとかがすごく嫌いみたいで。それも変わってきたかな。公園に行こうって言ったら何をおいても喜んで言ってタンですよ、それが着替えてからなって言ったらいかんって。最終手段だったのに。行ったらいいんですけど。着替えるのが嫌なのか」「買い物とか行ったら歩かないですよ。それも変わってきたかな。それは困りますね」	「すぐに思いつかないですから、困らせるという、ないんかなあ」「手がかからないって言われます」	「気性は激しい」「癇癪かもしれない。癇癪もちというか、拝んでもらおうかとか…」	「言っても聞かない時とか、ものを投げるんですよ。やっちゃだめと言っても何回もするんですよ」
「フェンスをしたんですよ。台所に入れないように。それを取ったんですよね、この夏。もう外に出れないから、６畳２部屋じゃ狭くって。もうすごい機嫌悪くって、毎日機嫌悪くって、こっちも気が狂いそうになって。もうグズグズ言って。自分のしたいことを私にもやってやってってずっと言ってるんで、もうできんって。なったりして、で、取ったんですよ、ファンスを。やっぱりね、台所に真新しい物というか、寄ってきて。コーヒーをこぼしたんですよ。器用なんですよ。固いのを（あけれるんです）。もう普通の家事だけでも、台所に立つだけでも嫌なんですけど（つわりで）。余計仕事が増えて」	「めちゃくちゃしんどいというのはないかもしれないですね。同居しているから、ほんとに晩ご飯つくる時には見てあげるよとか言ってるくれるから、助かってる部分がすごいあるんで、私が熱出したらといってかも寝ときなって言ってくれて、何時間かみてくれたりとかするから、それで助かってる部分もあるし」「すごい、落ち込んで育児が嫌というのはない。多少は（イライラは）あるけど、つらいというのはない。イライラというのはあるけど」「言うことを聞かない、出かけるといっても出かけないとか、お片づけしようといってもしないとか。でもまあそれはまだできんかなと。つらいというのは（ない）。ないことはないんだろうけど、あんまし、ここが嫌だったとかない。仕方ない、ちっちゃいし、という感じ」	「二人が泣いて…同時にっそれぞれはなんとか対応できるんですけど、一度に同じことを…おんぶしてくれってゆうのを同時に言われたりとかぁ…」「ちょっと待ってってゆうのを聞いて欲しいのに、聞いてくれない。」	「自分がしたいことができなくなりますよねぇ…。家事有り育児有りで、自分の時間がなくなるんですよ」「旦那さんの帰るのが遅いもんで周りと比較してしまって、あそこの家はいいなぁ…と思ってしまうんですよ。お父さん早く帰ってきて面倒見てくれて、夕ご飯はゆっくり作れるし…みたいなかんじで」「なんで協力してくれないんだろうって気持ちが湧いてくるんですよ。でも向こうは向こうで、それが君の仕事だろってゆう風に思ってるから」

「自分の置く場所が悪いとか思うんですけど。手の届かない所に。でもそこまでは至らないですよね、その時は考えが。今は、しんどいから（身体が・気持ちに余裕がない）。ママ、あれ取って、あれ取って。普段は普通にできることが・・・」	「（原因は）自分でしょうね、たぶん。自分がストレスとか疲れとかがたまっていて、イライラしている時に、言うことを聞いてくれないとか、あたるじゃないけど、たぶん。あとで、今のは私が悪いのよなっていう感じで」	「自分の精神状態によって違うんですけどちょっと睡眠不足だったりしたら、腹が立ったり」「そうですねぇ。私の(状況によるんだと)思うんですけど…。許せる時と、今受け入れられない、疲れてる時とか(ありま)すねぇ…。」	「休みの日はもちろん協力はしてくれるんですけど、協力をやっぱり…平日にね！平日に手を差し伸べてくれる何かがあればいんですけど。(思いやりが)欲しいというかね」「「毎日の生活の中で？」大変な気持ちを同感して欲しいのがすごいあります。大変じゃろうけどってゆうようなことを言って欲しい。確かに大変よなってゆうのを分かって欲しい。」
	「友達とかも、できるだけ一緒に遊んだりして。なるべく生まれてから情報交換するようにしてるんで。それでストレス発散じゃないけど、聞いてもらったり、聞いたりとかして、みんなそうなんだって」「友達と話したりとかすると、その日の、今までの。友達の話を聞くと、あ、かわいいんだまだこの子のすることはってなるから」		「それはないですね。だから時間的に、その余裕がない。面倒を見てくれる人がいないから。」

事例９	事例10	事例11	事例12
女児	女児	男児	男児
２歳1ヶ月	2歳1ヶ月	3歳0ヶ月	２歳０ヶ月
「買い物いったら走り回ったりとか、動かないとか」	「癇癪がすごいです」「夜泣きもすごかったです」	「敏感というか、いい人とダメな人がいて…」「ご飯食べなかったり」	「周りみたら親の能力に合わせて育てやすくできてるのかな。グジグジ言うことはあるけれど」「手がかからない子。我があまり強くないので、外に出たとき楽ですね」
「早く出たいときに限って、服を着替えるのを嫌がるとか。買い物行ったときは、一人走り回ったりとか。思うように動かない時ですよねぇ」「あたしが神経質なのかなぁ…、部屋とか片付いてないと駄目とか、何時までに寝かせようと思っても、それが上手くいかないと、どんどんイライラしてきて。」「(夫が)中途半端な時に帰ってきたりするんですよぉ。」	「育児を中心に動きたいんだけど、家事をしなくちゃいけない。夫の世話をしなくちゃいけない隣に気を使わなくちゃいけないが周りにあるんでそっちをメインにしないといけない時が辛いですね。」「言われるから気になるんですね。主人とか主人のお母さんに言われる言葉が…自分の親だと言い返せるから気が楽なんですけど…言い返せない相手に言われると気になるんです。その言葉が。」	「自分で考えて、ご飯食べさせてお風呂入れて…って…それにそってやっぱしてくれなかったら、ちょっとイライラしたりとかぁ～」「最初は主人とかでも、なかなか協力的でなかったりとかしたら、そのぶんイライラが、なんであたし一人でってゆうのがあるじゃないですか」	「朝出るときに時間が決まってでる時はやっぱり早くしろ！って。テレビ見ながら服を着替えてみたりとか。食べる時もあり食べないときもありだから、遊び食べとかしだしたら…せっかく作ったのにみたいな…」「夫が思うように動かなかったりとか、で、余計に子供も思ったように動かなくって、で、ちゃんとまわせていけない自分にも腹が立つしみたいな？些細なことに腹が立ってる自分にもさらに(腹が立つ)」「 家に一人でいてもあんまり…家にいたらそれはそれで気楽でいいけど旦那が帰ってきたらイライラします。」

「なるべくもう買い物には行かないようにしてる。一人走り回ったりとかするから２人では…」「時間に規制がなければ」「子供のせい…とは思わない…。自分のせいと、あとパパのせい」	「あぁ、でもそれは主人と結婚したとかってとこまでさかのぼる…」「そうゆうのを見越して最初いろいろ言ってたんですが、付き合ってるときに。で、そうゆうことに対して良い様に良い様に言われてたけど、実際は違ってた」	「(子供自身が)言ったらだいぶ分かってくれるようにもなってきたから、だいぶあれなんですけどねぇ…」「自分の都合ですよね…やっぱりイライラする時は…たとえば忙しいのに…その時の感情とゆうか…。いけんなって分かるんですけどね…」「(夫)にあたしが口で言わなくても分かってくれるだろうってゆう部分があったから、忙しそうじゃなぁって察知して、手伝ってくれんかなぁ～って…分かってくれたんだなぁ～ってゆうのがあればあれなんですけどねぇ…でもそれがなかったから、」	「わたしが自分を中心に考えてるから…それでキーってなりますねぇ…あたしのほうに原因が…」「気がもう、短くなってるような気がしますね。日々、毎日毎日腹が立つことがあっていくとやっぱストレスじゃないけど溜まっていって些細なことでもプチって…」「物事に追われてない状況…」
「いる時になると逆に、すごいストレスを感じる。連れ出してくれてる時に自分の思いどおりに事が運ぶのがすごいストレス解消。」	「主人のことで腹が立っても、よそでストレス発散しようとかってことを考える。だからちょっと時間はかかるけど、聞いてもらって自分の中ではストレス発散。」	「自分の好きなテレビ、ビデオとか録ってあるんで、ビデオ録ったの見たりとか、ダラダラと…」	「友達と遊ぶことかなぁ…子供連れて…出かけることでストレス解消してる。」

4. 考 察

子どもの特徴に対して育児不安を感じたと報告した事例は 12 事例中 9 事例であった。報告された子どもの特徴は，癇癪などの気性の激しさや，乱暴さ，反抗的などであった。これらの特徴は，子どもへの対応が難しいと指摘される特徴であり，「思い通りにならないと激しく感情をあらわす」といった，“否定的感情反応”で示される特徴に対応している。12 事例中 9 事例で子どもの特徴に対して育児不安を感じるという報告をしている一方で，育児不安を感じる状況について尋ねると，子どもの特徴そのものをあげたのは 2 事例であった。12 事例中 7 事例

において，子どもの特徴そのものではなく，子どもの特徴や行動によって，養育者自身の行動が中断したり，予定していた状況を妨げられると，育児不安を感じると報告していた。

輿石（2005）は，子どもに対する統制不能感が高まると育児不安が高まること，一方で母親が子どもに主導権を与えず自らが場面を統制しようとする様な不適切な育児行動が，母子間に強い葛藤を生じさせ，母親の育児不安を増強させると指摘している。つまり，養育者は子どもの特徴そのものに育児不安を感じるというより，子どもと関わるなかで，子どもの特徴を起因として生じる行動や反応に養育者が対処できなくなると，養育者の行動が中断し，物事が予定通りに進まなくなるため，養育者の育児行動に対する自己効力感が低下し，育児不安が高まるのではないかと考えられる。Figure 2に，これら諸要因の関連を示す。

また，子どもの特徴に育児不安を感じるとした2事例においても，1事例は子どもの特徴に育児不安を感じつつも，その状況を改善するために試みたことがうまくいかなかった時に，また，もう1つの事例においては，子どもに働きかけたことがうまくいかず，適切に対処できなかった時に育児不安が高まっていた。石山（2004）は，養育者の育児不安は，理想とする対応と実際の対応の不一致と関連があると指摘している。本調査で得られた結果をあわせて考えると，自身の考えや行動を理想とする方向に変えることによって，対処を試みる傾向が強い場合には，理想とする方向に現実の状況が改善されていかないと，より養育者の育児行動に対する自己効力感が低下し，育児不安が強まるのではないかと考えられる。

育児不安を感じる理由については，12事例中8事例が自分の考え方や体調に原因があるとしていた。輿石（2002c）は，養育者が自己の感情に注目しやすいと対処不能感が高まり，育児不安が高まることを指摘している。本調査で得られたように，養育者が育児不安を抱く理由

を自身の考え方や体調と認知し，それに固執することは，育児に対しての対処不能感を高め，結果として，育児行動に対する自己効力感が低下し，養育者の育児不安が高まるのではないかと考えられる（Figure 2）。

12事例中6事例において，育児不安を感じる理由を身近な育児への協力者である夫の協力が得られないことや育児の大変さへの共感といった精神的なサポートが得られないことと報告していた。また，育児不安を感じる状況を回避する方法として，夫からのサポートを得たり，同じ子どもを育てる母親とのつながり，近所の人のサポート，夫の両親からの援助だけでなく，自身の趣味や好きなことをして過ごすことが，育児不安を低下させるとした事例が8事例みられた。育児不安を低下させる要因として，加藤・小林（2001）は家族や社会が養育者をサポートすることと指摘している。本研究において，育児不安が生じる理由を自身の考え方や対処能力とした事例においても，育児不安を回避する方法として，自身の考え方や対処能力を高めるよりも夫や友人からのサポートを得ることと認知している養育者がみられた。つまり，育児不安に対処するために養育者が選択する方法は，必ずしも育児不安が生起する原因として養育者が認知している内容を改善することとは限らないと考えられる。

本調査では，7事例において，子どもの特徴を起因として生じた行動に対して自身が適切に対応できない状況に育児不安を感じ，8事例において，育児不安を感じる理由として，自身の考え方や対処に対しての自信のなさをあげていることが明らかになった。一方，8事例において，夫や友人など周囲からサポートを得ることや何か自身が好きなことに取り組むことによって，育児不安を感じる状況を回避するとしていた。つまり，養育者の育児不安を規定する大きな要因は，子どもの特徴や行動への養育者の対処能力の不備であり，自身の育児能力への自信のなさが育児不安を高めるが，養育者は育児不安が生起する理由として認知している育児能力への自信のな

さなどを解消することで対処するのではなく，自身の趣味や周囲からのサポートを得ることで育児不安を解消していくことが示された（Figure 2）。

櫻谷（2004）は，育児場面における支援には，親の育ちを支え，自信の回復につながるような支援が不可欠であると指摘している。本研究では，養育者自身は自分の育児能力の不備や育児能力への自信のなさを訴えながらも，そのこと自体に対処することで育児不安を解消するという事例は3事例であった。しかし，養育者の育児不安を低減していくためには，夫や育児仲間からのサポートも必要な一方で，養育者の対処不能感を低減することによって育児行動に対する自己効力感を高め，養育者が選択した育児行動を認めることも重要である。乳幼児健康診査などの相談現場で，このような支援を専門家から得られることが，養育者の育児行動に対する自己効力感の低下を防ぎ，育児不安を低下させ，養育者が自信をもって育児にのぞむことができるサポートとなっていくであろう。

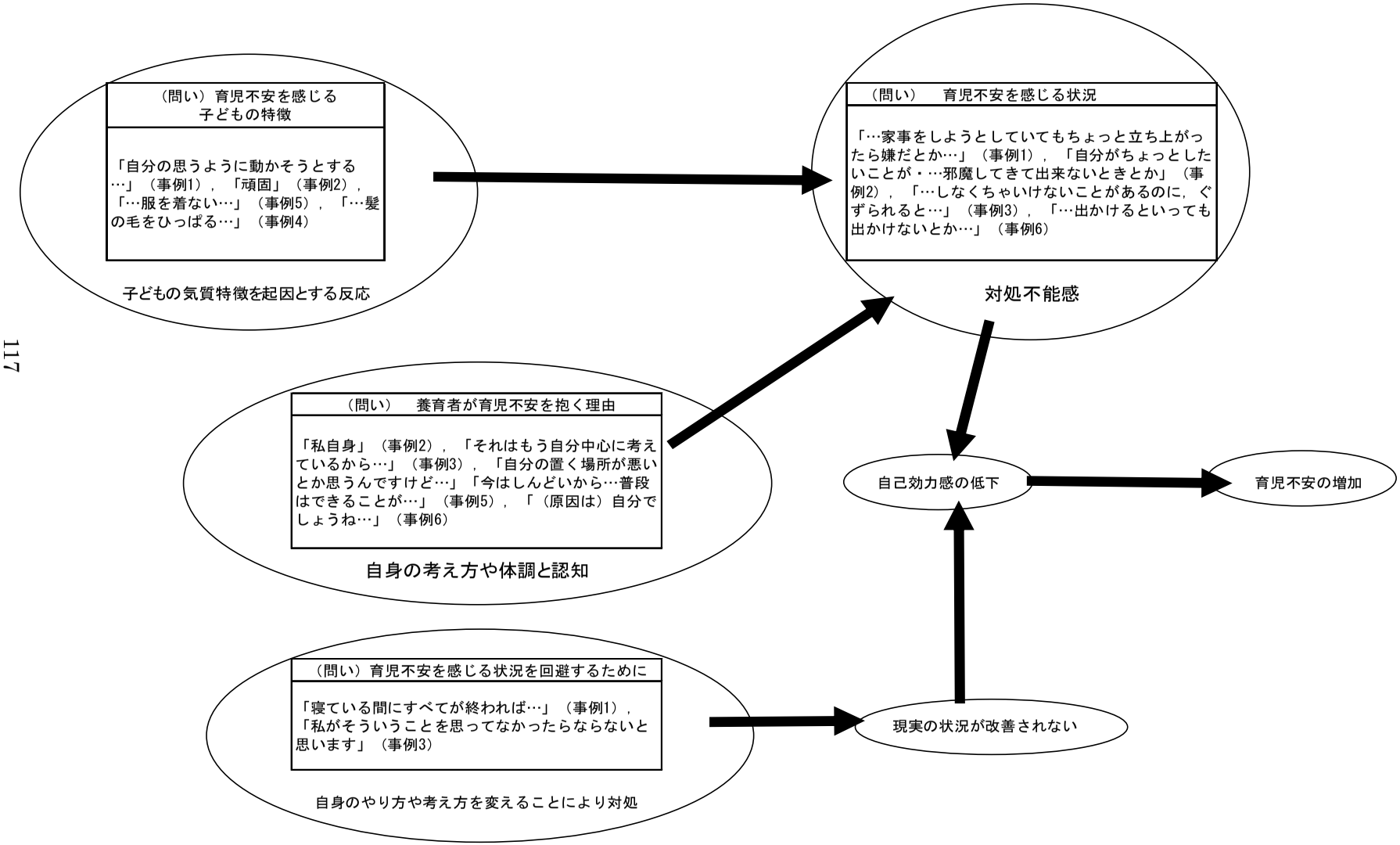

Figure 2　育児不安に関わる諸要因の相互関係

第４節
本章の総合考察
幼児気質質問紙を用いた養育者への育児支援の可能性

第４章では，第２章で作成された幼児気質質問紙と養育者の育児不安との関連から，養育者の育児不安を予測する幼児の気質特徴を明らかにするとともに，養育者の育児不安について，内容や状況，対処方法などに焦点をあてて整理し，幼児気質質問紙を用いた養育者への育児支援の可能性について検討した。

幼児気質質問紙で評価された気質特徴と養育者の育児不安との関連については，育児をする上での扱いにくさを示すような気質特徴を示す子どもであると，養育者は，日々の育児のなかで，子どもの様々な問題行動や扱いにくい行動に適切に対処できないために，子育てそのものに対して自信をなくし，挫折感や育児への否定的な感情が高まっていくこと，睡眠や食事のリズムが安定しない気質傾向の子どもをもつ養育者は，常に子どもに対応しないといけなくなるため，育児に費やす時間が増え，自分の行動や時間の制限を感じるといった不安が高まっていくことが示された。養育者になんらかの育児不安を高める気質特徴を子どもが示していた場合，その気質特徴をあらかじめ養育者に伝えることは，養育者の子どもへの関わり方を工夫するきっかけを与えることになり，その後の養育者の育児不安や育児困難感を予防することになる。つまり，子どもの気質特徴を評価することで，養育者の育児不安を予防するような関わりや環境調整が可能となり，結果的に養育者が子どもの発達にとって適合のよい（goodness of fit）環境を提供することが可能になるのではないかと考えられる。

しかし，子どもの気質特徴が養育者の育児不安を予測することは示されたが，その影響力はそれほど大きいとは言えなかった。養育者の育児不安と関連する要因には，

自分の内面に目を向けやすい自己注目傾向や心配性傾向，自尊心（奥石，2002c；奥石，2002d；田中・尾添，1996；奥石，2005）などの養育者のパーソナリティ，夫からの実際的あるいは精神的サポートの有無といった援助体制（田中・尾添，1996；宮本・舟越・中添・時岡・森・渋谷，2002）などのソーシャルサポート，周囲に悩みを共有したり，情報交換が出来る交流の場があるか否か（宮本他，2002；加藤・小林，2001）などの育児環境などがあげられている。また，子ども側の要因として，子どもの発達に不安を抱いていると養育者の QOL が下がることや（刀根，2000），子どもに発達上の問題がみられた場合はそうでない場合よりも養育者の育児ストレスが高いこと（刀根，2002），運動障がいよりも対人関係や知的障がいなどの問題をもつ子どもの養育者の育児ストレスが高いことが報告されている（渡部他，2002）。

養育者の育児不安と関連する子ども側の要因は，子どもの発達状態だけではない。本研究の調査 14 において，子どもの気質特徴のうち，否定的感情反応尺度や規則性尺度，神経質尺度で記述される気質特徴は育児不安と関連があることが示された。つまり，養育者の育児不安と関連があることが明らかとなった否定的感情反応尺度，規則性尺度，神経質尺度の 3 つの尺度は，幼児気質質問紙を用いた養育者への育児支援という臨床的応用の可能性という視点からは，注目すべき尺度と考えられる。さらに，育児不安に影響を与える気質特徴のなかでも否定的感情反応尺度で記述される気質特徴は，否定的な育児態度（中山，2003）や育児不安（堀，2003），母性意識の低さ（野田，2003）とも関連すると報告されている。一方，Thomas らの気質類型の「扱いにくい」気質タイプは，養育者の育児不安，育児ストレスと関連があるとされている（上村・田島，1988；水野，1998）。「扱いにくい」気質タイプを分類する際に基準となる特徴は，周期性，接近・回避，順応性，反応の強度，気分の質の 5 つの特徴である。このなかで，本研究で作成された幼児気質質

問紙の規則性尺度は“周期性”に対応している。以上のことから，否定的感情反応尺度と規則性尺度は，養育者の育児不安や育児ストレスと関連が認められる尺度であり，これらの尺度に注目することが養育者の育児ストレスや育児不安に対する支援のきっかけとなり，幼児気質質問紙をを用いた養育者への育児支援という臨床的応用の可能性も広がるであろう。

調査 14 において，幼児気質質問紙で評価される子どもの気質特徴のうち，育児不安と関連の認められる気質特徴が示された。しかしその一方で，これらの気質特徴の養育者の育児不安への影響力は必ずしも強くなく，子どもの気質特徴と養育者の育児不安をつなぐメカニズムについてのより詳細な検討の必要性が示唆された。

そこで子どもの特徴と養育者の育児不安との関連，内容や状況，対処方法などに焦点をあてて検討したところ，子どもの特徴に対して育児不安を感じると報告する養育者は多い一方で，育児不安を感じる状況について尋ねると，子どもの特徴自体をあげないということが示された。多くの養育者は，子どもの特徴を起因として生じた行動に対して自身が適切に対応できない状況に育児不安を感じ，育児不安を感じる理由として，自身の考え方や対処に対しての自信のなさをあげていた。つまり，養育者の育児不安を規定する大きな要因は，子どもの特徴や行動への養育者の対処能力の不備であり，自身の育児能力への自信のなさが育児不安を高めるが，養育者は育児不安が生起する理由として認知している育児能力への自信のなさなどを解消することで対処するのではなく，自身の趣味や周囲からのサポートを得ることで育児不安を解消していくことが示唆された。このことより，養育者の育児不安を低減していくためには，夫や育児仲間からのサポートも必要な一方で，子どもの特徴に対する養育者の対処不能感を低減することによって育児行動に対する自己効力感を高め，養育者が選択した育児行動を認めることが重要となる。よって，養育者が，子どもの気質特徴

を理解し，その特徴への対応が可能となれば，育児上の困難を軽減することにつながり，子どもの特徴に対する養育者の対処不能感を低減することが可能となるだろう。

以上のことから，幼児気質質問紙を用いることで，養育者への育児支援についての臨床的応用の可能性があることが確認された。しかし，幼児気質質問紙を臨床的に応用していくためには，養育者の育児不安を高める子どもの気質特徴を明らかにするだけでなく，そのような気質特徴を示す子どもに対して，育児上の困難を軽減することにつながり，子どもの特徴に対する養育者の対処不能感を低減する環境や具体的な育児行動の内容を提案することが必要である。

第５章
本研究の総括と今後の課題

第１節
幼児気質質問紙作成の試み

日本において，1990年代，今から20年以上前からすでに子どもの気質を扱う研究は増加してきていると指摘されていた（陳・星・草薙，1992）。しかし，その一方で，日本の気質研究のほとんどは欧米の気質検査尺度をそのまま用いて行われ，臨床現場での問題とのかかわりについては，研究上，ほとんど取り扱われてこなかったという問題点も指摘されていた（陳他，1992）。そこで，本論文において，あらたに1歳代の幼児を対象とした，因子構造などの構造面，日本の文化にあった内容面，項目数などの形式面の問題点について十分に考慮し，日常生活を通して子どもと過ごす時間の多い養育者（主に母親）が子どもの日常の行動特徴を容易に評価でき，その結果にもとづいて子どもの気質特徴が測定される幼児気質質問紙を開発した。さらに，開発した幼児気質質問紙と様々な臨床的問題との関連性を明らかにすることで，臨床的応用の可能性をもつ気質質問紙であることを確認した。

本論文の第2章では，従来指摘されてきた問題点を改善し，臨床現場での活用，有益性の高い幼児気質質問紙の作成を試みた。気質と環境との相互作用の重要性を実証したNYLSの膨大な面接調査のデータから得られた9つの気質特徴に対応する9因子構造を確認することは出来なかったが，数回実施した因子分析の結果により6因子構造を確認し，否定的感情反応尺度，神経質尺度，順応性尺度，外向性尺度，規則性尺度，注意の転導性尺度の6尺度47項目の幼児気質質問紙を作成した。6つの尺度のうち，規則性尺度と注意の転導性尺度は，NYLSで報告された“周期性”と“気の散りやすさ”に対応していた。一方，否定的感情反応尺度，神経質尺度，外向性尺

度については，先行研究のなかに対応する因子は報告されていないが，その内容から育児不安や子どもの問題行動などの臨床的問題と関連性の高い尺度と予想された。

作成された幼児気質質問紙の再検査信頼性，養育者が日常の子どもとの関わりのなかで認知した子どもの特徴との関連性から尺度の内容的妥当性が確認できた。さらに，観察評価との関連を確認したところ，幼児気質質問紙の順応性尺度で評価される気質特徴が観察された実際の行動を反映した内容と確認され，順応性尺度についての妥当性が確認できた。しかしその一方で，観察評定で得られた結果と質問紙上で評価された気質特徴とでは一定の関係を見いだしにくいことも確認された。

質問紙による気質評価は，母親が日常生活のなかで，ある文脈において知覚する子どもの行動特徴である。気質を日常生活のなかでの文脈や環境のなかで評価していると考えると，評価される気質特徴は文脈の変動と関連して変化する現象となる。よって，観察評定による特徴との一致が低いとしてもその不一致を必ずしも否定的な結果として考える必要はないといえる。つまり，本研究で作成された幼児気質質問紙には，本研究の目的の１つであり，質問紙作成の基本方針としていた，日常の育児場面などの生活のなかでの文脈や環境との関係で気質特徴を評価する質問項目が採用されたと考えることができる。

さらに，臨床現場でより広い活用を進めていくために，項目数を減らした幼児気質質問紙の簡易版を作成した。作成された 6 尺度 18 項目の簡易版は，因子的妥当性が確認され，幼児気質質問紙よりも簡便にスクリーニング用として臨床現場で活用できると考えられたが，内的整合性や再検査信頼性が尺度によっては低い値となっており，十分な信頼性を備えているとはいえなかった。そこで，幼児気質質問紙より少ない項目数でありながら，簡易版よりも信頼性の高い短縮版の作成を試みた。

作成された幼児気質質問紙の短縮版は，簡易版より 6

項目増えた24項目から構成されたが，幼児気質質問紙の47項目より大幅に項目数は減少し，かつ簡易版よりも信頼性の高い尺度となり，スクリーニング用としてより有効に使用可能な質問紙となった。

以上のように，臨床現場で簡便にかつ有益に利用することが可能な幼児気質質問紙が作成できた。

第２節
幼児気質質問紙の臨床的応用の可能性

幼児気質質問紙を臨床的に活用するためには，幼児気質質問紙で評価される気質特徴が，相談現場などで問題となるどのような臨床的問題と関連があるのか確認する必要がある。そこで作成された幼児気質質問紙と子どもの発達上の問題や行動上の問題との関連，作成された幼児気質質問紙と養育者の育児不安との関連から，気質質問紙の臨床的応用の可能性について検討した。

第３章では，第２章で作成された幼児気質質問紙で評価される気質特徴と子どもの発達上の問題あるいは子どもの行動上の問題との関連性から，幼児気質質問紙を用いた子どもへの発達支援の可能性について検討した。その結果，子どもになんらかの発達上の問題や行動上の問題と関連のある気質特徴だけでなく，行動上との問題と関連が認められない気質特徴があることが示された。

本研究において，乳児期までになんらかの発達上の問題がある場合には，否定的感情反応尺度と規則性尺度で記述される気質特徴を示すことが示された。また，否定的感情反応尺度，順応性尺度，規則性尺度は反抗的な問題行動，分離不安，不安が高いといった行動上の問題と関連することが示された。否定的感情反応尺度と規則性尺度で記述される気質特徴は，乳児期までの発達上の問題や幼児の様々な行動上の問題と関連が深く，よって幼児気質質問紙の否定的感情反応尺度と規則性尺度は，幼児気質質問紙を用いた子どもへの発達支援という臨床的

応用の可能性という視点からは，注目すべき尺度である。以上のことから，作成された幼児気質質問紙を用いることにより，子どもに発達上の問題や行動上の問題がみられる際に示す気質特徴を理解することが可能となり，子どもの発達上の問題が悪化しないよう，養育者の関わりや環境調整を検討していくことが可能になるのではないかと考えられる。

第4章では，第2章で作成された気質質問紙で評価される気質特徴と養育者の育児不安との関連性から，幼児気質質問紙を用いた養育者への育児支援の可能性について検討した。その結果，子どもの気質特徴のうち，否定的感情反応尺度や規則性尺度，神経質尺度で記述される気質特徴は育児不安と関連があることが示された。つまり，養育者の育児不安と関連がある否定的感情反応尺度，規則性尺度，神経質尺度の3つの尺度は，幼児気質質問紙を用いた養育者への育児支援という臨床的応用の可能性という視点からは，注目すべき尺度である。先行研究（上村・田島，1988；水野，1998）での指摘からも，否定的感情反応尺度，規則性尺度，神経質尺度の3つの尺度のうち，否定的感情反応尺度と規則性尺度は，養育者の育児不安や育児ストレスと関連が認められる尺度と考えられる。これらの尺度に注目することで，養育者への育児支援といった臨床的応用の可能性も広がると考えられる。

しかし，幼児気質質問紙で評価される子どもの気質特徴のうち，養育者の育児不安を高める気質特徴が認められる一方で，これらの気質特徴の養育者の育児不安への影響力は必ずしも強くなかった。よって，子どもの気質特徴と養育者の育児不安をつなぐメカニズムについてのより詳細な検討を行った。その結果，養育者の育児不安を規定する大きな要因は，子どもの特徴や行動への養育者の対処能力の不備であること，自身の育児能力への自信のなさが育児不安を高めることが明らかとなった。このことより，養育者の育児不安に関連の認められる子ど

もの気質特徴が評価された際には，子どもの特徴に対する養育者の対処不能感を低減することによって育児行動に対する自己効力感を高め，養育者が選択した育児行動を認めることが重要と考えられた。

以上のことから，本論文で開発された幼児気質質問紙を用いることで，日常生活を通して子どもと過ごす時間の多い養育者（主に母親）が評価する子どもの気質特徴を理解することができるだけでなく，子どもに発達上の問題や行動上の問題がある場合に示す気質特徴や，養育者の育児不安を高める子どもの気質特徴を理解することも可能となった。さらに，幼児気質質問紙を用いることで，子どもに発達上の問題や行動上の問題がある場合や養育者が育児不安を感じている際に，日常での関わりの工夫や環境調整について具体的な内容を検討するなど臨床的に応用していくことが可能になるのではないかと考えられる。

第３節
幼児気質質問紙を用いて気質特徴を評価することの臨床的意義

Sameroff（1993）は，養育者からの働きかけに関わる養育者側の要因と子どもが養育者に及ぼす影響といった子ども側の要因の両方向の影響が時間の経過のなかで相互に作用し合う過程を示し，相乗的相互作用モデルを提唱している。とくに，母親の健康状態がよくないなどの養育者側の否定的な要因と子どもが扱いにくい気質を示すといった子ども側の否定的な要因が相互に影響し合う場合，母子相互作用がうまくいかずに否定的な方向に変化し，発達的悪循環にいたることが指摘されている。しかし，否定的な要因があったとしても，全てが発達的問題をひきおこすとは限らず，様々な要因との相互作用的な関係のなかでリスクが軽減されることもあり得る。将来の臨床的問題を回避するためには，発達初期に子ども

のリスク要因を適切に評価し，相互作用という視点から子どもに対する働きかけを調整しながら関わっていくことが重要である。

子どもの気質特徴自体はその後の発達自体に違いをもたらすことが明らかとなっている。水野（2002）は，行動抑制傾向は，行動基準の内面化よりはむしろ行動統制の過程で関わってくると考え，行動の統制過程においては，子どもの気質によって容易に統制できる行動とそうでない行動があるのではないかと指摘している。さらに，質問紙を使った5年間の縦断研究の結果から，自己制御機能の主張面と抑制面のともに発達していた子どもは，気質的に扱いやすい子どもであり，母親から説明によるしつけ方略を多く受けていたことを明らかにしている。つまり，子どもの気質特徴は母親の育児方略を規定し，結果的に子どもの発達過程に影響を与えることになる。

子どもが扱いにくい気質特徴を示すと，その子どもの養育者は子どもに関わることに不安を覚え，ストレスを感じることが多くなる。そのことは養育者の育児などの子どもへの関わりに影響を与え，子どもの健全な発達にはマイナスに働くであろう。しかし，発達初期に子どものリスク要因を適切に評価し，相互作用という視点から子どもに対する働きかけを調整することが可能であれば，その後の子どもの発達は変化しうる。よって，子どもの健全な発達のために，働きかけや環境を調整することを考えると，早期に子どもの気質特徴を評価することの臨床的意義は高い。

本研究では，従来の気質質問紙の問題点をふまえ，新たに気質質問紙を作成し，作成された気質質問紙と子どもの発達上の問題や行動上の問題，養育者の育児不安との関連性を確認した。子どもの気質特徴を評価し，その気質特徴を明らかにすることで，子どもの発達を促す環境を調整することや，養育者の関わりを検討することが可能となる。本研究で作成された幼児気質質問紙を用いて，早期に子どもの気質特徴を評価することは，子ども

の発達上の問題を軽減し，養育者の育児上の不安やストレスを軽減し，臨床的問題の悪化を防ぐことにつながるであろう。つまり，本研究で作成された幼児気質質問紙を用いることで，子どもの健全な発達を支えるような「適合のよい（goodness of fit）」環境を養育者が準備することを可能にするのでないかと考えられる。よって，本研究で作成された幼児気質質問紙を用いて子どもの気質特徴を客観的に評価することの臨床的意義は高いと考えられる。

第４節
今後の課題

子どもの問題行動は養育者の養育態度が適切でないことによるのではないかと考えられていた時代がある。実際に，養育者がうつ病の子どもにはうつ病をはじめとする様々な問題が早い年齢であらわれやすいと指摘されている（Schaffer，1998　無藤・佐藤　訳　2001）。扱いにくい気質をもつ子どもの養育者は，自身の子どもの扱いにくさは，自身が子どもに対して拒否的な態度をするためではないかと考え，子どもからの要求に際限なく応じようと努力することもある（Thomas，Chess & Birch，1968）。養育者が子どもの要求に応じられる状況であれば問題行動は表面化しないが，養育者が子どもからの要求に応じきれなくなったり，子どもが社会に出て集団生活を経験するなど養育者のみでは対応できない環境で過ごすようになると，子どもの問題行動が表面化することもあるだろう。

子どもの気質特徴が養育者からの働きかけをはじめとする環境に影響を与え，それが結果的に子どもの発達に影響を与える。養育者にとって，子どもが扱いにくい気質特徴をもつと，その養育者は育児を通じて不安を高め，そのことが子どもに悪影響を及ぼすという発達的な悪循環が生じる。よって，子どもが扱いにくい気質特徴を示

すのであれば，可能な限り早期の段階で子どもの気質特徴を評価し，養育者が対応可能なレベルで，かつ後に続く集団生活のなかで子どもが破綻しないよう，気質特徴に調和した日常での関わりや環境を専門家が相談現場などで助言していくことが，子どもの特徴に対する養育者の対処不能感を低減することにもつながるだろう。

本論文で開発された幼児気質質問紙を用いて幼児の気質を評価する場合，調査のなかで確認された臨床的問題と関連のある気質特徴をもつ子どもの養育者においては，可能な限り早期の段階で子どもの気質特徴を評価し，気質特徴に調和した日常での関わりや環境を専門家が相談現場などで助言していくことは，たとえ扱いにくい気質特徴であっても，育児不安を高めることなく，子どもの特徴に対する養育者の対処不能感を低減することにもつながるだろう。

本論文で得られた知見により，子どもが発達的な問題や問題行動，養育者の育児不安と関連のある気質特徴と評価された場合，そのこと自体を養育者に助言していくことは可能となった。しかし，子どもの特徴に対する養育者の対処不能感を低減するような，気質特徴に調和した日常での関わりや環境の具体的な内容については明らかとなっていない。幼児気質質問紙の臨床的応用を考えるでのあれば，子どもへの発達支援，養育者の育児不安への支援のために，どのような関わりや環境が子どもの健全な発達を支えるような「適合のよい（goodness of fit）」環境となるのか，具体的な内容の提案が養育者にできるよう，さらに検討をすすめていく必要があるだろう。

引用文献

麻原きよみ・井桁しげ子（1993）．幼児の発達状態と気質に関する研究－1歳6ヶ月と3歳児時点の比較－　小児保健研究，**52**，347-353．

麻原きよみ・村嶋幸代・飯田澄美子（1992）．幼児の気質と発達に関する研究（第2報）　発達の遅れと「気質」の関連性　日本公衛誌，**39**，839-847．

Bates,J.E.,Freeland,C.A.B. & Lounsbury,M.L.（1979）. Measurement of infant difficultness. *Child Development*, **50**, 794-803.

Bornstein,M.H.,Gaughran,J.M & Segui,I.（1991）. Multimethod assessment of infant temperament: mother questionnaire and mother and observer reports evaluated and compared at five months using the infant temperament measure. *International Journal of Behavioral Development*, **14**, 131-151.

Brazelton,T.B.& Nugent,J.K.（1995）. *Neonatal behavioral assessment scale. 3rd editon.* Mac Keith Press.

（ブラゼルトン，T.B.穐山富太郎監訳・大城昌平・川崎千里・鶴崎俊哉訳（1998）．ブラゼルトン新生児行動評価　原著第3版，医歯薬出版）

Briggs-Gowan,M.J.,& Carter,A.S.（1998）. Preliminary acceptability and psychometrics of the infant-toddler social and emotional assessment (ITSEA) a new adult-report questionnaire. *Infant mental health journal*, **19**, 442-445.

Buss,A.H. & Plomin,R.（1984）. *Temperament: early developing personality traits.* Lawsence Erlbaum Associates, News Jersey, 84-104.

Campos, J.J.（1976）　In Lipsitt,L.P.（Ed.）*Developmental psychology:the significance of infancy*.Hillsdale,N.J.,New York

（キャンポス J.J.　内藤徹他訳（1982）．心拍：乳児の情動発達研究のためのすぐれた指標　リプシット編　乳児の可能性：発達の精神生物学，ナカニシヤ出版，pp.9-38.）

Carey,W.B.(1972). Clinical applications of infant temperament measuremens. *The Journal of Pediatrics*, **81**, 823-828.

Carey, W. B., & McDevitt, S. C. (1978). Revision of the infant temperament questionnaire. *Pediatrics*, **61**, 735-739.

Caspi,A & Silva,P.A.(1995) Temperament qualitities at age three predict personality traits in young adulthood:Longitudinal evidence from a birth cohort. *Child Development*,**66**,486-498.

陳省仁・星信子・草薙恵美子（1992）．　乳幼児期の気質と発達．児童心理学の進歩，**31**,31-57.

恵良恵子（1994）．　育児不安の概念定義の再検討　日本女子大学人間社会研究科紀要，**4**，61-70.

Fullard,W., McDevitt, S.C. & Carey, W.B.（1984）Assessing temperament in one-to three-year-old children. *Journal of Pediatric Psychology*, **9**(2), 205-217.

福井聖子（2002）．「子どもが病気のとき家庭でどうする？」　子育て支援の観点にたつ，親への啓発活動の検討　小児保健研究，**61**，782－787.

Goldsmith,H.H.& Campos,J.J.(1982). Toward a theory of infant temperament. In R.N.Emde & R.Harmon (Eds.), *The development of attachment and affiliative systems.* New York: Plenum, pp.161-193.

Hagekull, B., Lindhagen, K., & Bohlin, G.（1980）. Behavioral dimensions in one-year-olds and dimensional stability in infancy. *International Journal of Behavioral Development*, **3**, 351-364.

堀寛子（2003）．　幼児の気質が育児不安に及ぼす影響

平成15年度卒業論文集.
堀寛子・武井祐子・寺崎正治（2004）. 母親の育児不安と幼児の気質との関連について　中国四国心理学会第60回大会発表論文集, 29.
星野美穂子・富永由佳（2013）. 育児に対する感情と子育て支援に求めるニーズとの関係－未就学児の母親を対象として－　聖徳大学幼児教育専門学校研究紀要, **5**, 33-39.
Hubert, N.C., Theodore, D.W., Peters-Martin, P. & Gandour, M.J.（1982）: The study of early temperament : Measurement and conceptual issues. *Child Development*, **53**, 571-600.
石山ゐづ美（2004）.　母親の幼児への対応における理想と実際の相違およびその育児不安との関連　山梨学院短期大学研究紀要, **25**, 109-114.
Kagan, J. & Moss, H.A.（1962）. *Birth to maturity:A study in psychological development.* New York, John Wiley & Sons.
Kagan, J., Reznick, J.S., Clarke, C., Sidman, N. & Garcia-Coll, C.G.（1984）. Behavioral inhibition in children. *Child Development*, **55**, 2212-2225.
角田和也（2007）.　1章　発達の原理　5節　発達を研究する方法　4.自然観察法と実験的観察法　小林芳郎編　子どもを育む心理学　保育出版社, 27-28.
神庭純子・藤生君江（2003）.　乳幼児をもつ母親の育児上の心配事－（第1報）1ヵ月から3歳の縦断的傾向－　小児保健研究, **62**, 504-510.
Karp, J., Serbin, L.A., Stack, D.M. & Schwartzman, A.E.（2004）.　An observation measure of children behavioral style:evidence supporting a multi-method approach to studying temperament. *Infant and child development*, **13**, 135-158.
加藤恵子・小林真（2001）.　母親の育児不安とソーシャルサポート　富山大学教育実践総合センター紀要, **2**,

45-50.
小関圭子・森岡由起子（2002）．1歳6ヶ月健康診査における発達障害のスクリーニングに関する研究　小児の精神と神経，**42**，301-319.
輿石薫（2002a）．　母子相互交渉の質と母親の育児不安及び子どもの言語発達との関連性について　小児保健研究，**61**，584-592.
輿石薫（2002b）．　新生児期から生後4ヶ月までの子どもの気質の安定性と母親の育児不安ー母親の自己注目傾向の違いからー．小児保健研究，**61**，482-488.
輿石薫（2002c）．　母親の自己注目傾向と育児不安について．小児保健研究，**61**，475-481.
輿石薫（2002d）．　育児不安に影響を与える要因いついて縦断的研究ー予期不安尺度と期待感尺度の作成ー．小児保健研究，**61**，686-691.
輿石薫（2005）．　育児不安の発生機序．日本小児科学会雑誌，**109**，337-345.
厚生労働省大臣官房統計情報部（2013）．平成24年度厚生統計要覧　35-36.
草薙恵美子・星信子（2005）．子どもの気質的行動特徴の変化ー1992年と2002年の比較ー　國學院短期大学紀要，**22**，145-162.
Lerner,J.V. & Lerner,R.M.(1983).Temperament and adaptation across life:Theoretical and empirical issues. . In Baltes,P.B.,& Brim,Jr.O.G. (Eds.), *Life-Span Development and Behavior.* Vol.5 Academic Press,pp.197-231.
（ラーナーJ.V.・ラーナーR.M.遠藤利彦（訳）（1993）．1章　生涯にわたる気質と適応　理論的・実証的研究上の問題　東洋・柏木惠子・高橋惠子（編・監）　生涯発達の心理学　2巻　気質・自己・パーソナリティ　初版　新曜社）
栗山容子（2000）．　乳幼児の気質構造の分析　小児保健研究，**59**，417-423.

栗山容子，前川喜平，蓮見元子，秦野悦子，星三和子，瀬戸淳子，星永，小田切房子，奥平洋子，若葉陽子，大伴潔，庄司順一（2001）．　低出生体重児の気質と母親の意識・感情の発達的変化と相互関連性．小児保健研究，**60**，511-518．

Matheny,A.P.，Willson，R.S. & Nuss，S.M.（1984）．Toddler temperament：Stability across settings and over ages. *Child Development*，**55**，1200-1211．

松石豊次郎（2002）．　乳幼児健診の意義とその必要性について　小児保健研究，**61**，247-250．

水子学・武井祐子・清水光弘・寺崎正治（2004）．幼児の行動特徴に関する研究Ⅱ－気質質問紙と観察データの比較－　中国四国心理学会論文集，第37巻，27．

宮本政子・舟越和代・中添和代・時岡絵美・森美代子・渋谷幸彦（2002）．　乳幼児を，持つ母親の育児不安の現状とその要因　香川県立医療短期大学紀要，**2**，115-121．

宮下一博（1998）．序章　質問紙法による人間理解　鎌原雅彦，宮下一博，大野木裕明，中澤潤（編著）心理学マニュアル　質問紙法　北大路書房 pp.1-8．

水野里恵（1998）．乳児期の子どもの気質・母親の分離不安とのちの育児ストレスとの関係：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究　発達心理学研究，**9**，56-65．

水野里恵（2002）．　母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質　風間書房．

水野里恵（2003）．乳幼児の気質研究の動向と展望　愛知江南短期大学紀要，**32**，109-123．

中田洋二郎・上林靖子・福井知美・藤井浩子・北道子・岡田愛香・森岡由起子（1999a）．　幼児の行動チェックリスト（CBCL/2-3）の日本語版作成に関する研究　小児の精神と神経，**39**，305-316．

中田洋二郎・上林靖子・福井知美・藤井浩子・北道子・岡田愛香・森岡由起子（1999b）．　幼児の行動チェックリスト（CBCL/2-3）の標準化の試み　小児の精神と神

経，**39**，317-322.
中山理恵(2003). 幼児の気質と親の養育態度との関連. 平成15年度卒業論文集.
野田由紀恵(2003). 母親の母性意識に関する一研究－子どもの気質認知および養育態度への影響－. 平成15年度卒業論文集.
小田亮・大めぐみ・丹羽雄輝・五百部裕・清成透子・武田美亜・平石界(2013). 対象別利他行動尺度の作成と妥当性・信頼性の検討 心理学研究，**84**,28-36.
大日向雅美(2002). 育児不安とは何か－その定義と背景 発達心理学の立場から 大日向雅美編，こころの科学，**103**，育児不安，10-15.
小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ(2012). 日本語版 Ten Personality Inventory(TIPI-J) パーソナリティ研究，**21**(1)，40-52.
Rothbart,M.K.(1981). Measurement of temperament in infancy. *Child Development*, **52**, 569-578.
Rothbart,M.K.(1986). Longitudinal observation of infant temperament. *Developmental Psychology*, **22**, 356-365.
Rothbart,M.K. & Derryberry,D.(1994). Development of individual differences in temperament. In M.E.Lamb & A.L.Brown(Eds.), Advances in developmental psychology.Vol1 Hillsdale,NJ: lLawrence Erlbaum Asocciates, pp.37-86.
Rothbart,M.K. & Mauro,J.A.(1990). Questionnaire approaches to the study of infant temperament. In J.Colombo & J.Fagen(Ed.), *Individualdifferences in infancy: Reliability, stability, prediction.* Hillsdale.NJ:Erlbaum. pp.411-429.
Rowe, D. C. & Plomin, R.(1977). Temperament in early childhood. *Journal of personality assessment*, **41**, 150-156.

斎藤和恵・川上義・前川喜平（2000）．極低出生体重児の乳児期における発達的特徴と育児支援について－第 2 報－．小児保健研究，**59**，688-696．

櫻谷眞理子（2004）．　今日の子育て不安・子育て支援を考える～乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて～．立命館人間科学研究，**7**，75-86．

坂野雄二，佐藤健二，佐々木和義，久保義郎，坂爪一幸，土肥夕美子，市井雅哉（1995）．－Child Behavior Checklist(CBCL)日本版による自閉性障害の診断と評価：CBCL の臨床的応用可能性の検討．安田生命社会事業団研究助成論文集，**31**，32-41，1995．

Sameroff,A.J.（1993）．Models of development and developmental risk.In C.Zeanah（Ed.），*Handbook of infant mental health.*New York/London:Guilford Press.

Sanson，A.，Prior，M. & Garino E.（1987）．The structure of infant temperament：Factor analysis of the Revised Infant Temperament Questionnaire. *Infant Behavior and Development*，**10**，97-104．

佐藤俊昭（1985）．子どもの気質の追跡研究－序報－東北大学教養部紀要，43，171(1)-151(21)．

佐藤俊昭（1988）．子どもの気質の追跡研究：第２報・日本語版 ITQ-R とその使用経験　東北大学教養部紀要，196-175．

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則（1994）．育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連．心理学研究，**64**，409-416．

Schaffer,H.R.（1998）．*Making decisions about children second edition.* Blackwell Publishers limited, Oxford,England

（シャーファー,H.R.無藤隆・佐藤恵理子（訳）（2001）．子どもの養育に心理学がいえること－発達と家族環境，新曜社．）

下山晴彦監修　McLeod J 著　谷口明子・原田杏子訳

（2007）．臨床実践のための質的研究法入門　金剛出版，東京．

Slabach, E. H., Morrow, J., & Wachs, T. D.（1991）. Questionnaire measurement of infant and child temperment. In J. Strelau & A. Angleitner(Eds.), *Explorations in temperament : Internationl perspectives on theory and measurement.* New York Plenum,pp. 205-234.

菅原ますみ（1997）．養育者の精神的健康と子どものパーソナリティの発達．性格心理学研究，**5**(1),38-55.

菅原ますみ・青木まり・北村俊則・島悟（1988）．乳児期の気質的特徴の構造:日本語版 RITQの検討　湘北紀要，**9**，157-163.

菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達哉・向井隆代（1999）．子どもの問題行動の発達：Externalizingな問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から　発達心理学研究，**10**，21-45.

菅原ますみ・島悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則（1994）．乳幼児期にみられる行動特徴ー日本語版 RITQ および TTSの検討ー　教育心理学研究，**42**，315-323

諏訪宏恵・加藤則子・山田和子（2007）．親の育児感情に影響を及ぼす乳幼児の年齢別要因の検討ーPSI概念モデルをもとにした児の年齢別比較ー　小児保健研究，**66**，402-411.

庄司順一．行動様式質問紙・1～3歳児用（JTTS），未公刊．

庄司順一（1984）．乳児の気質と発達に関する研究 1）1～２ヶ月児用行動様式質問紙の標準化　慈恵医大誌，**99**，709-715.

庄司順一（1999）．子どもの気質と発達について．気質概念とその小児科臨床への適用，小児科，**40**(8)，995-1000.

庄司順一（2000）．乳幼児の気質と発達　ぐんま小児保健，**58**，58-68.

庄司順一・副田敦裕・恒次欽也・前川喜平（1995）．子どもの気質に関する研究（1）－乳児気質質問紙（R-ITQ日本語版）の因子分析による検討－　日本総合愛育研究所紀要，**31**，163-168．

高濱裕子・渡辺利子（2006）．母親が認知する歩行開始期の子どもの扱いにくさ－1歳から3歳までの横断研究－　お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，**3**，1-7．

武井祐子（2001）．乳幼児の気質について　中国四国心理学会論文集，34，31．

武井祐子・水子学・清水光弘・寺崎正治（2004）．幼児の行動特徴に関する研究Ⅰ－気質質問紙と観察データの比較－　中国四国心理学会論文集，37，26．

武井祐子・寺崎正治（2005）．　養育者がとらえる幼児の行動特徴に関する研究－1歳6ヶ月健診用気質質問紙とCBCLの関係－　川崎医療福祉学会誌，**14**，261-266．

田中昭夫・尾添真希子（1996）．　幼児を保育する母親の育児不安を軽減する要因の検討　家庭教育研究所紀要，**18**，61-68．

田中千穂子（1993）．　母と子のこころの相談室　“関係”を育てる心理臨床　医学書院，pp.93-131．

Tassel, E. V.（1984）. Temperament characteristics of mildly developmentally delayed infants. *Developmental Behavior Pediatry*, **4**(1), 11-14.

田島信元（2000）．　気質の人格発達への影響　詫間武俊，鈴木乙史，清水弘司，松井豊　編，シリーズ・人間と性格　第2巻　性格の発達，65-80．

手島聖子・原口雅治（2003）．　乳幼児健康診査を通した育児支援：育児ストレス尺度の開発　福岡県立大学看護学部紀要，**1**，15-27．

Thomas, A.,Chess,S. & Birch,H.G.（1968）. *Temperament and behavior disorders in children.* New York, New York University Press.

Thomas, A., & Chess, S.（1986）. *Temperament in*

clinical practice. New York:The Guilford Press.
Thomas, A.,Chess,S.,Birch,H.G.,Hertzig,M.E. & Korn, S.(1963). *Behavioral individuality in early childhood.* New York, New York University Press.
Thomas, A., & Chess, S.(1980). *The dynamics of psychological development.* New York:Bruner/Mazel.（林雅次（監訳）(1981). 子どもの気質と心理的発達，星和書店.）
刀根洋子（2000). 保育園児を持つ親のQOL－発達不安との関係 小児保健研究，**4**，493-499.
刀根洋子（2002). 発達障害児の母親のQOLと育児ストレス－健常児の母親との比較－ 日本赤十字武蔵野短期大学紀要，**15**，17-23.
上村佳世子(1989).子どもの気質と母子関係 小児看護，**12**，465-469.
上村佳代子（1992). 4節 気質的特徴の安定性と変化. 42章 気質. 東洋，繁多進，田島信元編，発達心理学ハンドブック，初版，福村出版，東京，pp.731-734.
上村佳世子（2002). 1 気質の個人差と関係の危機 須田治・別府哲（編）社会・情動発達とその支援 ミネルヴァ書房 pp.45-54.
上村佳世子・田島信元(1988). 発達初期の母子関係と子どもの発達＜その２＞：子どもの気質と母子関係形成との関連 日本教育心理学会第30回総会発表論文集，180-181.
渡辺弥生・石井睦子（2005). 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について 法政大学文学部紀要，**51**，35-46.
渡部菜緒・岩永竜一郎・鷲田孝保（2002). 発達障害幼児の母親の育児ストレスおよび疲労感－運動発達障害児と対人・知的障害児の比較－ 小児保健研究，**61**，553-560.
Worobey, J.（2000). Assessment of temperament in infancy. Osofsky JD, In Fitzgerald HE（Ed)., WAIMH

HANDBOOK of Infant Mental Health, Vol. 2, Early intervention, evaluation, and assessment. Canada, John Wiley & Sons, pp. 477-514.
吉田友子（2003）.高機能自閉症・アスペルガー症候群「その子らしさ」を生かす子育て．初版，中央法規，東京．

謝 辞

本博士論文執筆におきましては，たいへん多くの方々から多大なサポートをうけました。

研究を実施するにあたり，質問紙調査および面接調査に協力してくださった調査協力者，研究参加者の皆様に感謝いたします。協力者の方のなかには長期にわたって，ご協力いただいた方もおられました。貴重な時間と回答をいただいたこと，本当に感謝しています。

研究のフィールドを提供してくださり，時に貴重な助言をくださった倉敷市保健所の職員の皆様，倉敷成人病センター小児科医師の御牧信義先生，スタッフの皆様，若竹の園保育園の職員の皆様に感謝いたします。皆様の協力があり，多くの調査が可能となりました。

共同研究者として実験や調査を行い，データの整理，分析をサポートしてくれた当時の学部生の皆さんに感謝します。とくに，面接調査の逐語録作成には渡邉沙也香さんに多大なサポートをうけました。渡邉さんがいなければ，面接調査で得られた結果を研究としてまとめることは困難でした。

学部生および大学院生として一緒に研究をしてくれた中塚（堀）寛子さん，大学院生として一緒に研究をしてくれた秋山（井元）友貴さん，白神裕子さんに感謝いたします。一緒に調査や実験，研究ができて心強く思い，また，多くの面で助けていただきました。皆さんの研究結果から，私自身新たな発見が得られて，とても勉強になりました。

研究をともに実施し，ときに貴重な意見をいただき，サポートいただきました川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科の水子学准教授，高尾堅司准教授，倉敷市立短期大学の門田昌子講師に感謝いたします。とくに門田先生には本博士論文執筆にあたって，多大なサポートを受けました。門田先生とはこれからも多くの研究で共同研究者として一緒に学んでいけることを心から願って

います。

本博士論文をまとめるにあたって，川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科永田博教授からは多くの貴重な助言をいただきました。深く感謝しております。

本研究のスタートから，共同研究者としてそして指導者として，常にサポートしてくださった川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科寺嵜正治教授に心より感謝します。10年以上前に，児童相談所という心理臨床の現場から大学という教育・研究機関に籍を移した私が，臨床現場で日頃感じていた疑問のみで研究を実施し，得られたデータから研究論文としてまとめることは，力量的に大変未熟で難しいことでした。寺嵜先生には研究をすすめる上での必要な視点や考え方，研究論文の書き方にいたるまで細かくご指導いただきました。寺嵜先生がいなければ，研究者としての今の私はいなかったと確信しています。

そして心理学という領域で一生仕事をしていきたいという気持ちを人生の節目でいつもサポートしていただき，厳しいだけでなく，くじけそうになったときにいろいろな面で，陰に日向に救っていただきました金光義弘特任教授に心より深く感謝いたします。金光先生には本博士論文執筆においてもたいへん多くの助言とサポートをいただきました。金光先生がいなければ，教育者としても，研究者としても，家庭人としても，今の私はいませんでした。

最後に，いつも忙しくしていて，妻として母親として役目を果たせない私であっても，見捨てず，一緒にいて支え続けてくれている家族に心より感謝いたします。

平成27年1月8日

武井祐子

付　　録

付録 1

本論文と関連する論文

本論文には，以下の論文を加筆修正したものが含まれている。

第 1 章

武井祐子，寺崎正治：乳児期における「気質」研究の動向．川崎医療福祉学会誌，13(2)，2003，Pp.209-216.

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児気質質問紙作成の試み．パーソナリティ研究，16(1)，2007，Pp.80-91.

第 2 章　第 2 節および第 3 節

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児気質質問紙作成の試み．パーソナリティ研究，16(1)，2007，Pp.80-91.

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児気質質問紙標準版と簡易版の信頼性の検討．日本発達心理学会第 18 回大会発表論文集，2007，p. 662.

第 2 章　第 4 節

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児気質質問紙作成の試み．パーソナリティ研究，16(1)，2007，Pp.80-91.

武井祐子：養育者が認知する幼児の特徴と質問紙による気質評価の関連．小児保健研究，65(6)，2006，Pp.791-798.

武井祐子，寺崎正治，水子学：養育者がとらえる幼児の行動様式に関する研究－幼児気質質問紙と観察された行動との関係－．川崎医療福祉学会誌，15(1)，2006，Pp.377-383.

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：簡易版幼児気質質問紙の因子的妥当性の検討．日本心理学会第 71 回大会発表論文集，2007，p.1094.

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児気質質問紙標準版と簡易版の信頼性の検討．日本発達心理学会第 18 回大会発表論文集，2007，p. 662.

第 2 章　第 5 節

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児気質質問紙短縮版の作成の試み．日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会発表論文集，2007，Pp. 48-49.

武井祐子，寺崎正治：幼児気質質問紙短縮版の信頼性についての検討．日本心理学会第 73 回大会発表論文集，2009，p.1161.

Yuko TAKEI，Masaharu TERASAKI，Masato ANDO and Masako KADOTA：Construction of a Short Form Toddler Temperament Questionnaire．Kawasaki Journal of Medical Welfare，20(1)，2014，Pp. 25-30.

第 3 章　第 1 節

武井祐子，寺崎正治，御牧信義：幼児期の気質特徴と乳児期までの発達的問題の有無との関連．保健の科学，48(8)，2006，Pp.625-629.

武井祐子，寺崎正治：養育者がとらえる幼児の行動特徴に関する研究－1歳 6ヶ月健診用気質質問紙と CBCL の関係－．川崎医療福祉学会誌，14(1)，2005，Pp. 261-266.

第 3 章　第 2 節

武井祐子，寺崎正治，御牧信義：幼児期の気質特徴と乳児期までの発達的問題の有無との関連．保健の科学，48(8)，2006，Pp.625-629.

第 3 章　第 3 節

武井祐子，寺崎正治：養育者がとらえる幼児の行動特徴に関する研究－1歳 6ヶ月健診用気質質問紙と CBCL の関係－．川崎医療福祉学会誌，14(1)，2005，Pp. 261-266.

第 4 章　第 1 節

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響．川崎医療福祉学会誌，16(2)，2007，Pp.221-227.

武井祐子，寺崎正治，高尾堅司，門田昌子：養育者との面接からとらえた育児不安についての質的研究．川崎医療福祉学会誌，18(1)，2008，Pp.219-225.

第 4 章　第 2 節

武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響．川崎医療福祉学会誌，16(2)，2007，Pp.221-227.

第 4 章　第 3 節

武井祐子，寺崎正治，高尾堅司，門田昌子：養育者との面接からとらえた育児不安についての質的研究．川崎医療福祉学会誌，18(1)，2008，Pp.219-225.

付 録 2

幼 児 気 質 質 問 紙

子どもの気質質問紙

●記入日　　月　　日
●記入者は、お子さんにとって・・（○をして下さい）　母親 ・ 父親 ・ 祖母 ・ その他（　　）
●以下、お子さんについてお答え下さい。
お子さんの生年月日　平成　年　月　日　現在の年齢　　歳　ヵ月　性別　男 ・ 女
お子さんは何番目の子どもですか？　　第　　子
●お子さんは一言で言うと、どんなお子さんですか？あてはまるもの全てに○をつけて下さい。

活発　好奇心旺盛　甘えん坊　気が強い　短気　感情の起伏が激しい　わがまま　好き嫌いがはっきり
よく泣く　頑固　積極的　明るい　のんびり　大人しい　優しい　育てやすい　素直　機嫌がよい
人見知りがない　マイペース　落ち着きがない　よく気が付く　臆病　辛抱強い　きれい好き

●あなた自身の印象や観察にもとづいて答えて下さい。あまり深く考えこむ必要はありません。
●似たような項目がありますが、まったく同じではないので、項目ごとに考えて答えて下さい。
●１つでも答えていただいてない項目がありますと、回答結果が無効になりますので、記入もれのないようにご回答ください。

記入の仕方

お子さんの最近の状態（この1ヶ月）を考えて、以下の質問項目（1～47）にお答え下さい。質問に書いてあることについて、全くみられない場合は「1」、ほとんどみられない場合は「2」、時々みられる場合は「3」、いつもみられる場合は「4」のうち、最もあてはまる番号1つに○をつけて下さい。

		全くない	ほとんどない	時々ある	いつもある
1.	朝食の時に食べる量は、毎日大体同じである。	1	2	3	4
2.	他の子どもたちの遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらを見る。	1	2	3	4
3.	遊びをあなたが妨げると、激しく嫌がる（怒る、泣きわめく）。	1	2	3	4
4.	「やめなさい」「おいで」「だめだめ」などと言われても、勝手にどこかに行こうとする。	1	2	3	4
5.	お気に入りのオモチャで遊んでいる時は、声をかけられても、無視する（気がつかない）。	1	2	3	4
6.	してはいけないことをしようとした時、言い聞かせるとやめる。	1	2	3	4
7.	電話のベルやドアのチャイムがなると、食べるのをやめて音がした方を見る。	1	2	3	4
8.	夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。	1	2	3	4
9.	一日中ぐずっている不機嫌な日がある。	1	2	3	4
10.	あなたが部屋に入ってくると、遊びを中断して、あなたの方を見る。	1	2	3	4
11.	服が濡れるとすぐに気づき、服をかえてもらいたがる。	1	2	3	4
12.	欲しいもの（お菓子、ごちそう、プレゼントなど）がすぐにもらえなくても、我慢して待てる。	1	2	3	4
13.	新しいことに対して好奇心が強い。	1	2	3	4
14.	短気で、怒りっぽい。	1	2	3	4
15.	あなたが何回注意しても、近寄っては行けないところに行こうとしたり、さわってはいけないものを取ろうとしたりする。	1	2	3	4
16.	物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。	1	2	3	4
17.	他の子どもたちと一緒にいる時、機嫌よくしている。	1	2	3	4

裏 に 続 く

	全くない	ほとんどない	時々ある	いつもある
18. １～２度強く叱られると、同じ失敗をするのを避ける（過ちを繰り返さない）。	1	2	3	4
19. 1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。	1	2	3	4
20. 初めての人に抱かれたり、体をさわられたりすると、泣いたり、嫌がって母親にしがみついたりする。	1	2	3	4
21. 同一の子どもとしばらく遊びが続く。	1	2	3	4
22. 食べている時は、他のことに気をそらさずに最後まで食べる。	1	2	3	4
23. あなたの髪型や服装の変化に気がつく。	1	2	3	4
24. 何かをしていた時、おやつを食べるとか、トイレへ行くなどで中断しても、また同じ活動を続ける。	1	2	3	4
25. 電話のベルやドアのチャイムがなると、遊びをやめて音がした方を見る。	1	2	3	4
26. 叱られたり、注意されたりすると、不機嫌な状態が続く。	1	2	3	4
27. 遊びがうまくいかないと、泣き出したり、金切り声をあげたりする。	1	2	3	4
28. 座って遊ぶよりも、走ったり、飛び跳ねたりする遊びの方を好む。	1	2	3	4
29. 知らない人にも、すぐに話しかける。	1	2	3	4
30. 誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。	1	2	3	4
31. あなたから離れる新しい環境（保育園、ベビーシッターなど）に、比較的はやく慣れる。	1	2	3	4
32. よくさわいで、大泣きする。	1	2	3	4
33. 初めての場所を探索している時、活発に動き回る（走る、飛び跳ねる、よじのぼる）。	1	2	3	4
34. 自分一人でいろいろしたがる。	1	2	3	4
35. 自分の思いどおりにならないと、激しく感情を表す（泣き叫ぶ、金切り声をあげる、地団駄を踏む）。	1	2	3	4
36. 知らない人に遊んでもらっていても、機嫌よくしている。	1	2	3	4
37. 初めての場所（初めていく家、お店、旅行先）で、最初の数分間、不安そうにしている。	1	2	3	4
38. 泣いたり、怒ったりした時、手足をバタバタさせたり、地団駄を踏んだりする。	1	2	3	4
39. ベッド（または布団）に入ってから眠るまでの時間は、一定である。	1	2	3	4
40. 新しいこと（自分で服を着る、オモチャを片づけるなど）を覚える時、いらだったり、泣いたりする。	1	2	3	4
41. 他の人がそばにいると、あなたにしがみついたり、膝の上に乗りたがる。	1	2	3	4
42. 昼寝の長さは、毎日大体同じである。	1	2	3	4
43. 一日の中で、一番活動的になる時間帯は、ほぼ決まっている。	1	2	3	4
44. 初めて見る小動物（小さな犬や猫）に近寄って行き、遊ぼうとする。	1	2	3	4
45. 朝、目覚める時刻は、毎日大体同じである。	1	2	3	4
46. 快・不快を問わず、においに敏感である。	1	2	3	4
47. 好きなテレビ番組を見ている時、あなたが呼びかけると、振り返ったり、テレビを見るのをやめる。	1	2	3	4

付 録 3

幼 児 気 質 質 問 紙 （ 簡 易 版 ）

子どもの気質質問紙(簡易版)

●記入日　　月　　日
●記入者は、お子さんにとって・・（○をして下さい）　母親 ・ 父親 ・ 祖母 ・ その他（　　）
●以下、お子さんについてお答え下さい。
お子さんの生年月日　平成　年　月　日　現在の年齢　　歳　ヵ月　性別　男 ・ 女
お子さんは何番目の子どもですか?　　第　　子
●お子さんは一言で言うと、どんなお子さんですか？あてはまるもの全てに○をつけて下さい。

活発　好奇心旺盛　甘えん坊　気が強い　短気　感情の起伏が激しい　わがまま　好き嫌いがはっきり
よく泣く　頑固　積極的　明るい　のんびり　大人しい　優しい　育てやすい　素直　機嫌がよい
人見知りがない　マイペース　落ち着きがない　よく気が付く　臆病　辛抱強い　きれい好き

●あなた自身の印象や観察にもとづいて答えて下さい。あまり深く考えこむ必要はありません。
●似たような項目がありますが、まったく同じではないので、項目ごとに考えて答えて下さい。
●**１つでも答えていただいてない項目がありますと、回答結果が無効になりますので、記入もれのないようにご回答ください。**

記入の仕方

お子さんの最近の状態(この1ヶ月)を考えて、以下の質問項目(1～18)にお答え下さい。質問に書いてあることについて、全くみられない場合は「1」、ほとんどみられない場合は「2」、時々みられる場合は「3」、いつもみられる場合は「4」のうち、最もあてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	全くない	ほとんどない	時々ある	いつもある
1. 電話のベルやドアのチャイムがなると、遊びをやめて音がした方を見る。	1	2	3	4
2. 服が濡れるとすぐに気づき、服をかえてもらいたがる。	1	2	3	4
3. 誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。	1	2	3	4
4. 一日の中で、一番活動的になる時間帯は、ほぼ決まっている。	1	2	3	4
5. 快・不快を問わず、においに敏感である。	1	2	3	4
6. 初めての人に抱かれたり、体をさわられたりすると、泣いたり、嫌がって母親にしがみついたりする。	1	2	3	4
7. １～２度強く叱られると、同じ失敗をするのを避ける（過ちを繰り返さない）。	1	2	3	4
8. 知らない人に遊んでもらっていても、機嫌よくしている。	1	2	3	4
9. 夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。	1	2	3	4
10. 1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。	1	2	3	4
11. 新しいことに対して好奇心が強い。	1	2	3	4
12. 他の子どもたちの遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらを見る。	1	2	3	4
13. 一日中ぐずっている不機嫌な日がある。	1	2	3	4
14. 短気で、怒りっぽい。	1	2	3	4
15. ベッド（または布団）に入ってから眠るまでの時間は、一定である。	1	2	3	4
16. 自分の思いどおりにならないと、激しく感情を表す（泣き叫ぶ、金切り声をあげる、地団駄を踏む）。	1	2	3	4
17. 知らない人にも、すぐに話しかける。	1	2	3	4
18. 座って遊ぶよりも、走ったり、飛び跳ねたりする遊びの方を好む。	1	2	3	4

付 録 4

幼 児 気 質 質 問 紙 （ 短 縮 版 ）

子どもの気質質問紙

●記入日　　月　　日
●記入者は、お子さんにとって・・（○をして下さい）　母親 ・ 父親 ・ 祖母 ・ その他（　　）
●以下、お子さんについてお答え下さい。
お子さんの生年月日　平成　年　月　日　現在の年齢　　歳　ヵ月　性別　男 ・ 女
お子さんは何番目の子どもですか？　　第　　子
●お子さんは一言で言うと、どんなお子さんですか？あてはまるもの全てに○をつけて下さい。

活発　好奇心旺盛　甘えん坊　気が強い　短気　感情の起伏が激しい　わがまま　好き嫌いがはっきり
よく泣く　頑固　積極的　明るい　のんびり　大人しい　優しい　育てやすい　素直　機嫌がよい
人見知りがない　マイペース　落ち着きがない　よく気が付く　臆病　辛抱強い　きれい好き

●あなた自身の印象や観察にもとづいて答えて下さい。あまり深く考えこむ必要はありません。
●似たような項目がありますが、まったく同じではないので、項目ごとに考えて答えて下さい。
●**１つでも答えていただいてない項目がありますと、回答結果が無効になりますので、記入もれのないようにご回答ください。**

記入の仕方

お子さんの最近の状態（この1ヶ月）を考えて、以下の質問項目（1～24）にお答え下さい。質問に書いてあることについて、全くみられない場合は「1」、ほとんどみられない場合は「2」、時々みられる場合は「3」、いつもみられる場合は「4」のうち、最もあてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	全くない	ほとんどない	時々ある	いつもある
1. 知らない人に遊んでもらっていても、機嫌よくしている。	1	2	3	4
2. 初めての人に抱かれたり、体をさわられたりすると、泣いたり、嫌がって母親にしがみついたりする。	1	2	3	4
3. ベッド（または布団）に入ってから眠るまでの時間は、一定である。	1	2	3	4
4. 短気で、怒りっぽい。	1	2	3	4
5. 服が濡れるとすぐに気づき、服をかえてもらいたがる。	1	2	3	4
6. 初めての場所を探索している時、活発に動き回る（走る、飛び跳ねる、よじのぼる）。	1	2	3	4
7. 1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。	1	2	3	4
8. 新しいことに対して好奇心が強い。	1	2	3	4
9. 新しいこと（自分で服を着る、オモチャを片づけるなど）を覚える時、いらだったり、泣いたりする。	1	2	3	4
10. 食べている時は、他のことに気をそらさずに最後まで食べる。	1	2	3	4
11. 電話のベルやドアのチャイムがなると、食べるのをやめて音がした方を見る。	1	2	3	4
12. 夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。	1	2	3	4
13. 自分の思いどおりにならないと、激しく感情を表す（泣き叫ぶ、金切り声をあげる、地団駄を踏む）。	1	2	3	4
14. よくさわいで、大泣きする。	1	2	3	4
15. １～２度強く叱られると、同じ失敗をするのを避ける（過ちを繰り返さない）。	1	2	3	4
16. 快・不快を問わず、においに敏感である。	1	2	3	4
17. 知らない人にも、すぐに話しかける。	1	2	3	4

裏 に 続 く

	全くない	ほとんどない	時々ある	いつもある
18. 好きなテレビ番組を見ている時、あなたが呼びかけると、振り返ったり、テレビを見るのをやめる。	1	2	3	4
19. 他の子どもたちの遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらを見る。	1	2	3	4
20. 誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。	1	2	3	4
21. 座って遊ぶよりも、走ったり、飛び跳ねたりする遊びの方を好む。	1	2	3	4
22. 物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。	1	2	3	4
23. 他の人がそばにいると、あなたにしがみついたり、膝の上に乗りたがる。	1	2	3	4
24. 朝、目覚める時刻は、毎日大体同じである。	1	2	3	4

否定的感情反応	★♪35	自分の思いどおりにならないと、激しく感情を表す（泣き叫ぶ、金切り声をあげる、地団駄を踏む）。
	27	遊びがうまくいかないと、泣き出したり、金切り声をあげたりする。
	♪32	よくさわいで、大泣きする。
	★♪14	短気で、怒りっぽい。
	♪40	新しいこと（自分で服を着る、オモチャを片づけるなど）を覚える時、いらだったり、泣いたりする。
	3	遊びをあなたが妨げると、激しく嫌がる（怒る、泣きわめく）。
	38	泣いたり、怒ったりした時、手足をバタバタさせたり、地団駄を踏んだりする。
	26	叱られたり、注意されたりすると、不機嫌な状態が続く。
	★9	一日中ぐずっている不機嫌な日がある。
神経質	★♪18	１～２度強く叱られると、同じ失敗をするのを避ける（過ちを繰り返さない）。
	♪16	物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。
	★♪11	服が濡れるとすぐに気づき、服をかえてもらいたがる。
	6	してはいけないことをしようとした時、言い聞かせるとやめる。
	★♪46	快・不快を問わず、においに敏感である。
	23	あなたの髪型や服装の変化に気がつく。
	24	何かをしていた時、おやつを食べるとか、トイレへ行くなどで中断しても、また同じ活動を続ける。
	12	欲しいもの（お菓子、ごちそう、プレゼントなど）がすぐにもらえなくても、我慢して待てる。
	4	*「やめなさい」「おいで」「だめだめ」などと言われても、勝手にどこかに行こうとする。*
	15	*あなたが何回注意しても、近寄っては行けないところに行こうとしたり、さわってはいけないものを取ろうとしたりする。*
順応性	★♪20	初めての人に抱かれたり、体をさわられたりすると、泣いたり、嫌がって母親にしがみついたりする。
	♪41	他の人がそばにいると、あなたにしがみついたり、膝の上に乗りたがる。
	37	初めての場所（初めていく家、お店、旅行先）で、最初の数分間、不安そうにしている。
	31	*あなたから離れる新しい環境（保育園、ベビーシッターなど）に、比較的はやく慣れる。*
	★♪29	*知らない人にも、すぐに話しかける。*
	★♪36	*知らない人に遊んでもらっていても、機嫌よくしている。*
外向性	★♪28	座って遊ぶよりも、走ったり、飛び跳ねたりする遊びの方を好む。
	★♪19	1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。
	★♪13	新しいことに対して好奇心が強い。
	♪33	初めての場所を探索している時、活発に動き回る（走る、飛び跳ねる、よじのぼる）。
	21	同一の子どもとしばらく遊びが続く。
	17	他の子どもたちと一緒にいる時、機嫌よくしている。
	44	初めて見る小動物（小さな犬や猫）に近寄って行き、遊ぼうとする。
	34	自分一人でいろいろしたがる。
規則性	★♪8	夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。
	1	朝食の時に食べる量は、毎日大体同じである。
	★♪39	ベッド（または布団）に入ってから眠るまでの時間は、一定である。
	♪22	食べている時は、他のことに気をそらさずに最後まで食べる。
	♪45	朝、目覚める時刻は、毎日大体同じである。
	★43	一日の中で、一番活動的になる時間帯は、ほぼ決まっている。
	42	昼寝の長さは、毎日大体同じである。
注意の転導性	7	電話のベルやドアのチャイムがなると、食べるのをやめて音がした方を見る。
	★♪25	電話のベルやドアのチャイムがなると、遊びをやめて音がした方を見る。
	★♪30	誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。
	★♪2	他の子どもたちの遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらを見る。
	10	あなたが部屋に入ってくると、遊びを中断して、あなたの方を見る。
	♪47	好きなテレビ番組を見ている時、あなたが呼びかけると、振り返ったり、テレビを見るのをやめる。
	5	*お気に入りのオモチャで遊んでいる時は、声をかけられても、無視する（気がつかない）。*

注1）*下線のある斜字は逆転項目を示す。*♪は24項目短縮版　★は18項目簡易版の質問項目。
注2）順応性尺度は得点が高いほど、順応性が低いことを示す。

お子さんの現在もしくは過去6ヶ月以内の状態について、以下の質問項目（1～27）にお答え下さい。質問に書いてあることについて、当てはまらない場合は「1」、時々当てはまる場合は[2」、当てはまる場合は「3」のうち、最もあてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	当てはまらない	時々当てはまる	当てはまる
1. 落ち着きがない。	1	2	3
2. 活発でない、元気がない。	1	2	3
3. よくすねる。	1	2	3
4. 寝付きがわるい。	1	2	3
5. 言うことをきかない。	1	2	3
6. 集中できない。	1	2	3
7. 愛情を示しても反応しない。	1	2	3
8. 要求がかなえられないと、気がすまない。	1	2	3
9. ほかの人のものを壊す。	1	2	3
10. 神経質で興奮しやすい。	1	2	3
11. よく泣く。	1	2	3
12. 食べるのを拒否する。	1	2	3
13. 大人にまとわりつく。	1	2	3
14. ひとに親しみをあらわさない。	1	2	3
15. 心配性である。	1	2	3
16. 癇癪（かんしゃく）を起こす。	1	2	3
17. ひどく怖がる、不安がる。	1	2	3
18. ほかの人の暴力をふるう。	1	2	3
19. 臆病である。	1	2	3
20. 恥ずかしがる。	1	2	3
21. まわりに関心を示さない。	1	2	3
22. 頑固である。	1	2	3
23. 年齢に比べ、幼すぎる。	1	2	3
24. 自分のものを壊す。	1	2	3
25. 自分のからにこもる。	1	2	3
26. グズグズ泣く。	1	2	3
27. 次々にすることが変わる。	1	2	3

未記入がないかご確認ください。

ご協力ありがとうございました。

育児不安尺度

中核的育児不安	1	子育てに失敗するのではないかと思うことがある
	2	母としての能力に自信がない
	3	何となく育児に自信がもてない
	4	どうしつけたらよいか分からない
	5	育児についていろいろ心配なことがある
	6	この先どう育てたらいいのか分からない
	7	子どもの発育・発達が気になる
	8	よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくしたりする
	9	つい感情的に接してしまう
	10	育児について何かにつけ後悔する
育児感情	11	子どもをわずらわしいと思うことがある
	12	子どもを育てることが負担に感じる
	★13	子どもと一緒にいるとき、心がなごむ
	★14	子どもと一緒にいると楽しい
	15	子どもを生まなければ良かったと思う
	16	子どもを虐待しているのではないかと思うことがある
	17	子どもを憎らしいと思うことがある
	18	育児意欲がない
育児時間	19	自分の時間がない
	20	一人になれる時間がない
	21	子どものために仕事や趣味を制限される
	22	自分のペースが乱れる
	23	家事を全てする時間がない
	24	毎日同じことの繰り返しをしている

★:逆転項目